

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVII-12

御 倉 遺 跡

—草津市御倉町所在—

平成 2 年 3 月

滋賀県教育委員会

財団 滋賀県文化財保護協会

御 倉 遺 跡

—草津市御倉町所在—

平成 2 年 3 月

滋賀県教育委員会

財團法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、個性豊かな文化環境づくりに取り込んでいます。特に文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と活用に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、平成元年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に後理解と御協力をいただきました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

滋賀県教育委員会
教育長 西池 季節

例　　言

- 本書は県営ほ場整備事業に伴う草津市御倉遺跡の発掘調査報告書で、昭和63年度および平成元年度に現地調査を実施し、平成元年度に整理調査を実施したものである。
- 本調査は滋賀県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
- 現地調査にあたっては、草津市教育委員会および関係諸機関の協力を得た。
- 本書で使用した方位は磁北に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
- 本事業の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会	(平成元年度)	(昭和63年度)
----------	---------	----------

文化財保護課長	伊香 照男	堀山龟与嗣
同 課長補佐	小川 啓雄	小川 啓雄
同 埋蔵文化財係長	近藤 澤	林 博通
同 主任技師	田路 正幸	木戸 雅寿
同 管理係主任主事	山出 隆	山出 隆

(財)滋賀県文化財保護協会

理事長	吉崎 貞一	吉崎 貞一
事務局長	中島 良一	中島 良一
総務課長	山下 弘	山下 弘
専門員	林 博通	
企画調査課長	林 博通(兼任)	近藤 澤
同 調査第一係長	大橋 信弥	大橋 信弥
同 技師	北村 圭弘	奈良 俊哉
同 技師	中村 健二	

- 本書の編集は北村がおこない、執筆は調査担当者の北村、中村が分担してあたった。
- 出土した遺物や写真、図面類については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査の経緯.....	1
第2章 位置と環境.....	1
第3章 基本層序.....	2
第4章 第1調査地区.....	3
1. 検出遺構.....	3
2. 出土遺物.....	4
3. 小結.....	4
第5章 第2調査区.....	5
1. 検出遺構.....	5
2. 出土遺物.....	7
3. 小結.....	8
第6章 第3調査地区.....	9
1. 検出遺構.....	9
2. 出土遺物.....	13
3. 小結.....	15
第7章 第4調査区.....	16
1. 検出遺構.....	16
2. 出土遺物.....	20
3. 小結.....	26
第8章 第5調査区.....	27
1. 検出遺構.....	27
2. 出土遺物.....	29
3. 小結.....	32
第9章 結語.....	33

挿 図 目 次

第1図 第1調査区A地区検出遺構.....	3
第2図 第3調査区C地区、D地区、E地区検出遺構.....	12
第3図 第4調査区A地区検出遺構.....	16
第4図 遺構分布の概要.....	33

図版目次

- 図版1 遺構 御倉遺跡の位置と周辺遺跡の分布
- 図版2 遺構 トレンチ配置図
- 図版3 遺構 第1調査区検出遺構(1)／B地区
- 図版4 遺構 第1調査区検出遺構(2)／C地区
- 図版5 遺構 第2調査区検出遺構(1)／A地区
- 図版6 遺構 第2調査区検出遺構(2)／B地区
- 図版7 遺構 第2調査区検出遺構(3)／C地区
- 図版8 遺構 第3調査区検出遺構(1)／A地区(1)
- 図版9 遺構 第3調査区検出遺構(2)／A地区(2)
- 図版10 遺構 第3調査区検出遺構(3)／B地区(1)
- 図版11 遺構 第3調査区検出遺構(4)／B地区(2)、F地区、G地区
- 図版12 遺構 第4調査区検出遺構(1)／B地区、C地区
- 図版13 遺構 第4調査区検出遺構(2)／D地区、E地区
- 図版14 遺構 第5調査区検出遺構(1)／A地区的北側部分
- 図版15 遺構 第5調査区検出遺構(2)／A地区的南側部分
- 図版16 遺構 遺構の詳細(1)／①S X02C2、②S B01A3、③S D08G3、
④S A01A5、⑤S K01A5
- 図版17 遺構 遺構の詳細(2)／S X02B4
- 図版18 遺物 第1調査区、第2調査区出土遺物
- 図版19 遺物 第3調査区出土遺物(1)／B地区、G地区
- 図版20 遺物 第3調査区出土遺物(2)／G地区(1)
- 図版21 遺物 第3調査区出土遺物(3)／G地区(2)
- 図版22 遺物 第4調査区出土遺物(1)／A地区、B地区(1)、C地区
- 図版23 遺物 第4調査区出土遺物(2)／B地区(2)
- 図版24 遺物 第4調査区出土遺物(3)／D地区
- 図版25 遺物 第5調査区出土遺物(1)／A地区(1)、B地区、C地区
- 図版26 遺物 第5調査区出土遺物(2)／A地区(2)
- 図版27 遺構／写真 調査前状況(東から)／第1調査区A地区中央遺構全景(南西から)
- 図版28 遺構／写真 第1調査区B地区西遺構全景(東から)／第1調査区C地区南遺構全景(北から)
- 図版29 遺構／写真 第1調査区C地区S D01C1(南東から)／第1調査区C地区S D02C1(南

から)

- 図版30 遺構／写真 第2調査区A地区遺構全景(東から)／第2調査区B地区遺構全景(東から)
図版31 遺構／写真 第2調査区C地区遺構全景(東から)／第2調査区C地区S D08C2付近(西から)
図版32 遺構／写真 第2調査区B地区S D04B2(東から)／第2調査区C地区S X02C2(東から)
図版33 遺構／写真 第3調査区A地区南遺構全景(南から)／第3調査区A地区北遺構全景(南西から)
図版34 遺構／写真 第3調査区A地区S B01A3(南西から)／第3調査区G地区S D08G3(東から)
図版35 遺構／写真 第4調査区A地区遺構全景(南から)／第4調査区B地区遺構全景(南から)
図版36 遺構／写真 第4調査区C地区北遺構全景(南から)／第4調査区C地区南遺構全景(南から)
図版37 遺構／写真 第4調査区D地区南遺構全景(南から)／第4調査区D地区南遺構全景(北から)
図版38 遺構／写真 第4調査区E地区S D01E4(南から)／第4調査区B地区S X02B4(南西から)
図版39 遺構／写真 第5調査区A地区北遺構全景(南から)／第5調査区A地区南遺構全景(北から)
図版40 遺構／写真 第5調査区A地区S A01A5(北東から)／第5調査区A地区S K01A5(東から)
図版41 遺物／写真 第2調査区出土遺物
図版42 遺物／写真 第3調査区出土遺物(1)
図版43 遺物／写真 第3調査区出土遺物(2)
図版44 遺物／写真 第4調査区出土遺物(1)
図版45 遺物／写真 第4調査区出土遺物(2)
図版46 遺物／写真 第5調査区出土遺物

第1章 調査の経緯

御倉遺跡は草津市御倉町・矢橋町・橋岡町地先に所在し、『昭和60年度滋賀県遺跡地図』等によって弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡として周知されている。県農林部の計画する平成元年度県営は場整備事業（草津市山田地区御倉工区）は、この遺跡にかかるため、工事に先立つ埋蔵文化財の調査を実施し、遺跡の保護策が講じられることとなった。

調査はまず、遺跡の範囲とその深度にかかる資料を得ることを目的として、2m×3mを基本とする試掘坑を30箇所設定した。試掘調査の結果、工事対象地のほぼ全域にわたって遺跡の存在が確認されるに至ったため、関係部局間の協議により、工事による直接の影響が避けられないと判断された排水路および管水路計画箇所について、本格的な発掘調査を実施し、記録の収集と保存がはかられることとなった。

試掘調査は奈良俊哉を担当として平成元年3月に、発掘調査は北村圭弘、中村健二を担当として平成元年4月から7月に実施し、ひきつづき平成2年3月までを整理調査期間とした。（北村）

第2章 位置と環境

県南部に位置する草津市周辺は、金勝山地・瀬田丘陵より流れ出す多くの中小河川によって形成された低湿な沖積平野である。この平野の南西部を蛇行して西流する河川のひとつに北川（子守川）があり、御倉遺跡はこの川の最下流域に所在する。当遺跡周辺は琵琶湖面との標高差が現状でも+2m程度でしかない低地（標高86.5m前後）で、昭和57年度以降、これまでに実施されてきた新草津川改修工事に伴う発掘調査の結果では、ここに散在する微高地あるいは自然堤防上に、主として古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡が営まれたと推定されている。今回の調査地は新草津川放水路線の北側に位置し、調査箇所を全体として眺めると、遺跡範囲確認用の線状トレンチを遺跡北半部のほぼ全域にカバーしたようなかたちとなる。

周辺部における御倉遺跡と同時期の遺跡について概観すると、まず古墳群としては北方に五条古墳群、大宮若松神社古墳、南山田古墳群、南方には鞍崎神社古墳群、南笠古墳群、柳差古墳群、南田山古墳群、東方には矢倉古墳群などを見ることができる。これらは大宮若松神社古墳の5世紀後半を最古として、おむね6世紀から7世紀にかけてのものが多い。当該期の集落遺跡についてはいまだ不透明であり、現状では東方の西海道遺跡、横道跡、中畠遺跡などで少數の堅穴住居が確認されているほかは、遺物の散布地として北方に狭間遺跡、南方に広野遺跡等が知られる程度にすぎない。古墳（群）の数から推察すると同時期の集落遺跡の実数は、現状をこえてさらに多くなる可能性が高い。

奈良・平安時代は隣接地に大津京や近江国守の営まれた時代もあり、御倉遺跡の東方から南方にかけての丘陵縁辺部には、岡山追分遺跡、矢倉口遺跡、谷遺跡、墓ノ町遺跡など多くの集落遺跡がみうけられる。野路小野山遺跡、木瓜原遺跡、笠山遺跡などの製鉄や窯業生産にかかる遺跡も同地域に顕著な分布を示す遺跡群のひとつである。また市内の北部を中心とする地域には

宝光寺廃寺、花摘寺廃寺などの白鳳寺院が、県内でも最高に密集して分布することが知られている。市内の南部地域については、御倉遺跡南方の南笠古墳群に近接して笠寺廃寺の存在することが知られるものの、寺院遺跡の分布に関しては、北部地域との間に明瞭な差異の存在する可能性が指摘される。このことは、いまだ実態の不透明な集落遺跡の動向をさぐるうえで、重要な視点のひとつになり得ると思われる。

なお御倉町はかつて湖南の要港として栄えた矢橋、山田の港に近接する位置にあり、集落の中央を南北にはしる道路は「佐々木街道」とよばれ、浜街道の開通以前は湖南における重要幹線道路のひとつであったといわれている。⁽¹⁾当地付近が交通の要衝であることは古今かわらず、大津京時代には東国からの調貢を納めた倉院があったことから「玉出の御倉」とも称されたという。これらのこととは、かつての調査で出土している「郡家有」「三宅」などの墨書き器の存在や、大型の掘立柱建物、搬入系の遺物が多く出土するという点などとあわせて注目される。

(北村)

第3章 基本層序

基本層序は概ね以下のとおりである。

- 第1層……灰褐色粘質土（現耕作土）。
- 第2層……黄灰色粘質土（床土）。
- 第3層……淡灰褐色粘性極細砂泥。
- 第4層……灰褐色粘質土。
- 第5層……黄白色粘質土（地山）。
- 第6層……青灰色粘質土。

第3・4層はほぼ調査区全域に堆積している土層である。第3層は第3調査区A地区付近では約16cmの層厚をもつ。現耕作土に先立つ旧耕作土であると思われる。

第4層は層厚10cm程度で、第3層に比べて粘性も強い。遺物はほとんど包含していないものの、遺物包含層と考えられるものである。本層は比較的土妙の堆積のあるA地区などにはみることができるが、ベース面のもっとも高い了守神社周辺では、第3層とともにその堆積は認められない。このことはもともと低い部分にしか堆積していなかったのか、整地等の原因によってなかったのか積極的根拠はないが、土層の堆積している部分では、比較的全面に広がっていることから、本来は堆積してあったものが削平されたものと考えた方が良いと思われる。したがってベース面の高い部分は、耕作土直下に地山である黄白色粘質土が広がる結果となったのであろう。この黄灰色粘質土が基本ベースになっているが、浜街道に面した部分や第3調査区G地区的沼状堆積のもっとも深い部分などでは、第6層の青灰色粘質土がベースとなる。また黄白色粘質土はベース面の低いところでは、やや粘性が強く、色調もややくすんだ色となる。

(中村)

第4章 第1調査区

工区の北東部に設定された調査区で、工事計画の支線64号排水路、支線58号道路平行管水路および支線64-1~2号排水路にあたる。列記した順に、それぞれA地区、B地区、C地区と称した。

1. 検出遺構（第1図、図版3~4、27~29）

A地区（第1図、図版27）

調査区の北東部に位置するトレンチで、幅約1.8m、長さ約54mを測る。遺構検出面は褐色を帯びた黄白色粘質土層、砂質土層の上面で、標高は85.86m~86.26mを測る。トレンチの大部分は後世の搅乱を受けており、遺構ベースの遺存が良好な箇所はトレンチの北西部に限られた。

S X01A1 幅約40cm~1.3m、深さ約10cmの溝状の遺構で、埋土は灰黒色の粘質土であった。遺構の年代等については明らかでない。

B地区（図版3、28）

調査区の南側に位置するトレンチで、幅約1.8m、長さ約102mを測る。遺構検出面は黄白色あるいは青白色粘質土層上面で、標高は86.15m~86.30mを測る。東高西低の地形で、トレンチの西半では遺構面の直上に灰黑色粘質土の沼地状の堆積が広範にみられた。

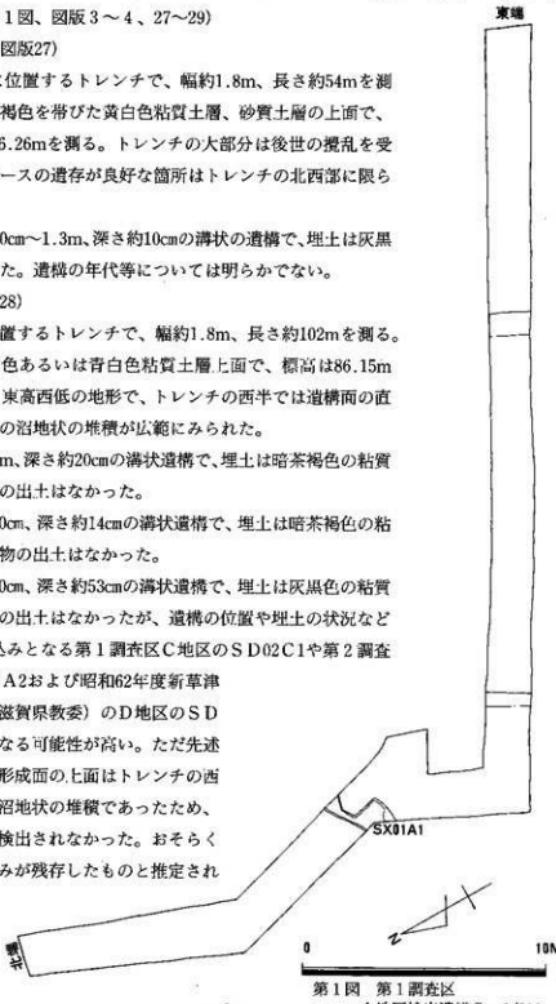
S D01B1 幅1.1m、深さ約20cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色の粘質土であった。遺物の出土はなかった。

S D02B1 幅約80cm、深さ約14cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色の粘質土であった。遺物の出土はなかった。

S D03B1 幅約60cm、深さ約53cmの溝状遺構で、埋土は灰黒色の粘質土であった。遺物の出土はなかったが、遺構の位置や埋土の状況などから、2段の掘り込みとなる第1調査区C地区的S D02C1や第2調査区A地区的S D01A2および昭和62年度新草津

川関連遺跡調査（滋賀県教委）のD地区的S D

4と同一の遺構となる可能性が高い。ただ先述のように当該遺構形成面の上面はトレンチの西侧に広範に広がる沼地状の堆積であったため、上段の掘り込みは検出されなかった。おそらく下段の掘り込みのみが残存したものと推定され



る。そうした場合、さきの遺構の例から当遺構の年代は弥生時代後期～古墳時代前期にかけてのものと推定される。

C地区（図版4、28～29）

調査区の西側に位置するトレンチで、幅約1m、長さ約81mを測る。遺構検出面は灰色を帯びた黄白色粘質土層の上面で、標高は86.04m～86.14mを測る。トレンチの北側および南側では遺構面が低くなってしまっており、その直上で灰黒色粘質土の沼地状の堆積がみられた。

S D 01 A 1 幅約1.4m、深さ約85cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。遺物の出土はなかった。

S D 02 A 1 2段に掘り込まれた溝状遺構で、遺構形成面での幅は約1.1mを測るが、約20cmの深さで60cmの幅となる。遺構面からの深さは約60cmで、埋土は上段が灰褐色系の砂質土、下段が灰黒色系の粘質土であった。遺物の出土はなかったが、遺構の位置や構造、埋土の状況などから第1調査区B地区のS D 03 B 1や第2調査区B地区のS D 04 B 2および昭和62年度新草津川関連遺跡調査（滋賀県教委）のD地区S D 4と同一のものである可能性が高い。弥生時代後期～古墳時代前期にかけてのものと推定される。

2. 出土遺物（図版18）

A地区

遺構内よりの遺物の出土はなかったが、表土中より近世以降、現代までの屋瓦、染付け碗等の出土をみた。

B地区（31／図版18）

遺構内よりの遺物の出土はなかったが、表土より須恵器甕片等の出土があった。

排土採集遺物（31／図版18）

須恵器甕（31）：内面に同心円文の当具痕を残す甕の体部片である。外面には平行線文の叩き締め痕を残すが、器表全体が磨耗しており、細部については不明である。焼成は堅緻で、青灰色を呈し、胎土は微細な長石粒を多量に含んだものである。

C地区（32／図版18）

遺構内よりの遺物の出土はなかったが、表土中より須恵器甕片等が出土した。

排土採集遺物（32／図版18）

須恵器甕（32）：内面に同心円文の当具痕が観察される甕の体部片である。自然軸のかかる外面には、木目に直交する平行線文を刻んだ叩き板の痕跡が認められる。胎土はきめのこまかい粘土質で、表面には黒色粒が目立つ。焼成は堅緻で、外面は黒灰色、内面は灰色を呈す。

3. 小結

当該調査区では広範囲にわたって沼地状の堆積が認められ、遺構の検出も、遺物の出土量も少なかった。第3地区のA地区～D地区にかけての箇所でも、中世の遺物を含む不規則な沼地状堆積が確認されており、調査対象地北東部の大半は、少なくとも中世の一時期までは低湿地化していたものと推測される。

（北村）

第5章 第2調査区

工区の東辺および南東辺に設定された調査区で、工事計画の佐々木街道平行管水路、新草津川平行管水路東部にあたる。東から順にそれぞれA地区、B地区、C地区と称した。

1. 検出遺構（図版5～7、30～32）

A地区（図版5、30）

調査区の東側に位置する南北方向のトレンチで、幅約1m、長さ約96mをはかる。遺構検出面は灰色を帯びた黄白色粘質土層の上面で、標高は86.45m～86.65mを測る。トレンチ東側の佐々木街道に平行する部分では、道路の側溝工事に伴うと推定される擾乱がみられた。

S D01A2 幅30cm、深さ約8cmを測る溝状遺物で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。遺物の出土がないため、年代等については不明である。

S D02A2 幅約70cm、深さ約10cm～15cmを測る溝状遺構で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。遺構の出土はなかった。

S D03A2 幅40cm、深さ約13cmを測る溝状遺構で、東側は佐々木街道の側溝工事に伴うと推定される擾乱を受けていた。埋土は茶褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S D04A2 幅65cm、深さ約12cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。遺物の出土がないため、年代等については特定できない。

S D05A2 幅約40cm、深さ約6cmを測る溝状遺構で、埋土は灰色粘土であった。遺物の出土はなく、深さも浅い。埋土の色調や土質も他の遺構とは異なり、遺構面直上の堆積土に近似することから、時期的にはより新しい可能性がある。

S X01A2 深さ約11cm～15cmを測り、西から東へとわずかに浅くなっている。埋土はマンガン粒を多く含む灰色土であった。遺物の出土がないため、年代や性格等については明確でないが、暗茶褐色系の埋土をもつ他の遺構よりは新しくなる可能性が高い。

S X02A2 幅約2m、深さ約12cmを測る。埋土はマンガン粒を多く含む灰色土であることから、年代、性格ともにS X01A2に近似するものと推定される。

S X03A2 直径約20cm～50cmの楕円形、もしくは一辺約30cm～40cmの方形の掘方を有した東西3間以上のピット列である。埋土はいずれも暗茶褐色粘質土で、明確に柱痕の検出されるものもあったことから、消極的だが掘立柱建物の一部、あるいは棚列等の一部である可能性が指摘される。遺物の出土はなかった。

S X04A2 幅約9.5m、深さ約15cm～20cmを測り、東から西へと徐々に深くなっている。埋土は暗茶褐色土で、遺物の出土はなかった。

B地区（図版6、30、32）

調査区の中央部に位置するトレンチで、幅約1m、長さ約106mを測る。C地区とは65号排水路を隔てて区別される。遺構の検出面は褐色を帯びた黄白色粘質土で、標高は86.02m～86.22mを測る。

S D01B2 幅30cm、深さ約20cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。遺物の出土がないため、年代等については不明である。

S D02～03B2 幅約30cm～40cm、深さ約4cm～5cmの溝状遺構である。遺物の出土はなく、埋土は灰色粘土であった。性格、年代ともに不明だが、第2調査区A地区のS D05A2と同様、暗茶褐色系の埋土をもつ他の遺構よりは新しくなる可能性が指摘される。

S D04B2 二段に掘り込まれた溝状遺構で、遺構検出面での幅は約2.2mを測るが、約60cmの深さで、幅約40cmとなる。遺構面からの深さは約74cmで、埋土は上段が暗茶褐色粘質土で、下段が灰黒色粘質土であった。上段の埋土からは弥生時代後期～古墳時代前期にかけての高杯の脚部片や甕の体部片が少量出土した。遺構の位置や規模、形状、埋土の堆積状況などから、第1調査区B地区的S D03B1、同C地区のS D01C1に連続するものの可能性が高い。同様の理由で昭和62年度の新草津川I関連遺跡調査（滋賀県委）のD地区で検出されたS D4とも同一のものになる可能性が指摘される。

S D05～11B2 規模、埋土等の状況が近似する南北方向の小溝群で、中心間距離にして約2.4m～2.5mごとに東西方向に並ぶ。方位はS D05B2を除いてほぼ同じであり、幅はS D11B2が約1m～1.7mと他に比べてやや広いものの、基本的には約35cm～60cmの規模で、深さは7cm～15cmを測る。埋土は灰色粘質土であり、いずれについても遺物の出土がない。年代等については不明であるが、S D02～03B2と同様に暗茶褐色系の埋土をもつ他の遺構よりは新しくなる可能性が高い。

S D12B2 幅約60cm～70cm、深さ約12cmを測る溝状遺構である。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S D13B2 幅約20cm、深さ約5cmの溝状遺構である。埋土は暗茶褐色粘質土であった。遺物の出土はなかった。

S D14B2 幅約1.5m、深さ約30cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。遺物の出土がないため、年代等については特定できない。

S X01B2 深さ約20cmの落ち込みである。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S X02B2 深さ約24cmを測る落ち込みで、埋土は暗茶褐色粘質土であった。S D04B2の西側肩部になる可能性も完全には否定し切れない。遺物の出土はなかった。

C地区（図版7、31～32）

調査区の西側に設定されたトレンチで、幅約1m、長さ約114mを測る。B地区とは65号排水路を隔てて区別され、西は神社前に至る。標高は85.62m～86.07mを測り、おおむね東西両側で高く中央部で低い。

S D01～02C2 幅約60cm～70cm、深さ約5cm～6cmの溝状遺構である。埋土は遺構直上の堆積土にちかい灰色粘土である。規模や方位、埋土の状況などが、B地区のS D05～11B等に近似することから、時期や性格もこれと同様のものと推定される。

S D03～04C2 幅約3m～3.5m、深さ約14cm～15cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色土である。遺物の出土はなかった。

S D05C2 幅約60cm、深さ約3cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色土である。遺物の出土はなかった。

S D06~07C2 幅約1m~1.5m、深さ約6cmの溝状遺構である。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。両遺構は規模、方位等ともに近似する。

S D08C2 幅約5m、深さ約40cm~50cmの溝状遺構で、埋土はくすんだ青灰色粘質土である。腐食の進んでいない木葉や木の実などは少量出土したが、人工の遺物の出土はなかった。したがって遺構の年代等については不明であるが、同様の規模と埋土をもった溝状遺構が、第4調査区のC地区とD地区で確認されている。また、これに連続する可能性の高い溝状遺構が昭和62年度の新草津川関連遺跡調査（草津市教委）のB地区とC地区にまたがって検出されているようである。

S X01C2 幅約75cm、高さ約10cmの畦状遺構で、遺構形成層を削り出して作られている。同様の畦状遺構は昭和62年度の新草津川関連遺跡調査（草津市教委）のB地区でも確認されており、今回検出の遺構はこれに連続する可能性が高い。**S D05C2**西側の自然地形の段差に見える箇所も、本来はこうした畦畔状遺構であったものと推測される。方位は当該調査区の隨所で確認された灰色粘土を埋土にもつ素掘り小溝群中に同じものが多い。

S X02C2 幅約7.6m、深さ約2cm~7cmの落ち込み状の遺構で、暗茶褐色粘質土の埋土には大量の土器片が含まれていた。また底面では、ほぼ中央部にピット状遺構が、東西両側には溝状遺構が検出された。中央部のピットは黒褐色の粘質土で埋まり、規模は落ち込みの底面で直径約40cm、深さ約28cmを測る。両側の溝については、埋土がいずれも暗茶褐色粘質土で、規模は東側の溝が底面で幅90cm、深さ約40cm、西側の溝が同様に幅約80cm、深さ約24cmを測る。遺物は東側の溝で須恵器や土師器の土錐、甕片、西側の溝で土師器の壺などが出土した。同じ遺構は昭和60年度の新草津川関連遺跡調査（草津市教委）でも検出されている。

2. 出土遺物（図版18、41）

A地区

遺構内からの遺物の出土ではなく、また表土中よりも遺物は出土しなかった。佐々木街道沿いの側溝工事による擾乱土中より、ガラス瓶、ビニール製肥料袋など、現代の遺物が出土したのみである。

B地区

遺構内からの遺物の出土は少なく、**S D04B2**より弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと推定される高环脚柱の小片や甕体部の小片等が少量出土したのみである。

C地区（図版18、41）

S X02C2のみから多量の土器類の出土があった。

S X02C2出土遺物（1~30／図版18、41）

須恵器壺蓋（1~2）：いずれも上段の埋土中より出土した。(1)は口径12.1cm、器高4.4cm、(2)は口径12.7cm、器高4.6cmを測る。天井部はいずれについても、扁平で、反時計回りの回転ヘラケズリによってほぼ全面を調整する。天井部との境界には明瞭な凹線が観察される。胎土には微細な

長石粒を多量に含み、刷りガラスの質感をもつ。堅緻に焼成され灰色を呈す。(1)の天井部内面中央には、甕に通有の同心円文当具痕が観察される。

須恵器坏(3~8)：(3~6)は上段の埋土、(7~8)は西側の溝状遺構から出土した。(3~6)は口縁の立ち上がりが長く、受部から直立的にたちあがる。口縁内部端には明瞭な凹線をもち、口径は12cm弱に復元される。胎土に長石粒は目立たないが、おおむね坏蓋(2~3)に類似する。堅緻に焼成され表面は青灰色を呈すが、断面がセピア色のものもある。(4)の受部外面には、坏蓋口縁端部が焼着している。(7~8)は口縁部の立ち上がりが短く、内傾して受部から鈍角的にたちあがる。端部に凹線はみられず、口径は(3~6)より小さめの11cm強と復元される。胎土に長石粒は目立たないが、基本的には坏蓋(1~2)に類似する。

須恵器高坏(22)：上段の埋土中より出土した。短脚1段の円形3方透かしの高坏で、脚部の底径は9.3cmを測る。胎土は微細な長石粒を多量に含み、坏蓋(1~2)に酷似する。焼成は堅緻で灰色を呈すが、部分的に生焼けの箇所がある。

須恵器甕(20~23、29)：(20)は西側の、(28)は東側の溝状遺構の埋土から出土し、それ以外の(23~27、29)は上段の埋土中より出土した。いずれも外面に木目に直交する平行線文を刻んだ叩き板の痕跡を残している。(20、23、28~29)の内面には同心円文の当具痕をそのまま残し、(24~27)にはこれを無文化する意識が働く。(27)は同心円文の消去が完全でない。(20、29)については叩き締め形成後、外面にカキ目調整がおこなわれる。焼成についてはいずれも堅緻であるが、色調は(20、28)が灰色~青灰色、(24~27、29)が淡い褐色、(23)が薰し焼き風で灰黒色を呈している。胎土はいずれについても微細な長石粒を含んでいる。

土師器高坏(21)：上段の埋土中より出土した。脚柱と据部との境界が明瞭で、透かしはもたない。底径は8cm強と推定される。磨耗がはげしく細部の調整等については不明である。焼成はややあまく、器表の1/2以上が灰黒色である。胎土には小砾が目立つ。

土師器土鍤(10)：東側の溝状遺構の埋土中より出土した。長さ4cm、幅2.2cmを測る。焼成は堅緻であるが、使用されたためかローリングを受けており、細部の調整等については明瞭でない。色調は灰褐色で、胎土は砂や小砾をほとんど含んでおらず、精良である。

弥生土器壺(11~16、30)：(11~16)は西側の溝状遺構の埋土中より、(30)は上段の埋土中より出土した。(11~12、15)は口縁部片で、端部に粘土を貼り付けて、それを下方に垂下せている。(11)には棒状の浮文が、(15)には横位の条線文が施される。(13)は底部片、(14)は受口状の口縁部片、(16)は貼り付けによる凸帯をもつ頸部片である。(11~12、16)はややあまく焼成され、精良な胎土をもち明褐色を呈すという点で共通している。

縄文土器深鉢(17~19)：いずれも西側の溝状遺構の埋土中より出土した。(17)は外面に貼り付けによる凸帯をもつ。(18~19)は外面に縦位の条痕状の板ケズリをおこなうものである。いずれも凸帯文土器の一部と推定される。焼成はややあまく、褐色を呈し、胎土は小砾を含んで粗い。

3. 小 結

当該調査区においては、西側の子守神社に近づくにつれて、遺構・遺物ともに多く確認される

ようになった。なかでも群状の遺構とそれに方位をほぼ同じくする多数の素掘り小溝群の確認されたことが注目される。これらは近年注目されはじめた条里制遺構の一例になるものと思われる⁽²⁾。またS X02C2からは2次堆積と推定される多量の遺物が出土した。出土した遺物の下限は7世紀前後であるが、縄文晩期の土器が含まれていたことが注目される。

(北村)

第6章 第3調査区

工区の中央部および北辺部に設定された調査区で、工事計画の第65号排水路、第66号排水路、第63号排水路および2本の管水路にある。調査区は第65号排水路よりA～Gまで的小地区に分けた。本調査区のベースは黄白色粘質土がほぼ一面に広がっており、G地区の一部は青灰色粘質土がベースとなる。

1. 検出遺構

A地区 (図版8・9、図版33)

遺構からの遺物の出土は少なく、個々の遺構の時期は必ずしも明確ではない。しかし遺構は大きく暗茶褐色粘質土の埋土をもつ古墳から古代の遺構と灰色土の中・近世の遺構に大別できるようである。前者には土坑状の遺構やピットなどがあり、後者には条里関係の溝などがある。また、本地區の北端より始まる沿状遺構はB～D地区にまで広がる。

S B01A3 (図版16、図版34)

東西1+α間、南北3間の掘立柱建物である。北側に1間以上の張出部をもつ。建物の方位はN-53°-Eである。柱穴は0.4m～0.6mの大きさで、隅丸方形あるいは円形の掘り方をもつ。1間の長さは1か所を除いて、ほぼ2mである。建物と張出部の間の長さは約1.1mである。柱穴の埋土は暗茶褐色土で、遺物の出土はない。

S X01A3 残存長2.4m、残存幅0.4mを測る。深さは0.1m程度で、床面はでこぼこしている。埋土は暗茶褐色粘質土の単層である。埋土からは少量の古墳時代と思われる土器片が出土した。

S K01A3 S X01のすぐ北で検出された土坑で、長径約0.3m、短径約0.2m、深さ約0.1mを測る。平面形は南にやや張り出す梢円形を呈する。埋土は暗茶褐色粘質土であり、須恵器壺の細片が1片出土している。

S K02A3 長軸0.8m、短軸0.5m、深さ約0.06mを測る。平面形は不定形であり北東方向に長軸約0.18m、短軸0.1mの張出部をもつ。埋土は暗茶褐色粘質土。須恵器・土師器の細片が出土している。

S K03A3 東側のほとんどが調査区外のため詳細はわからない。長軸0.2m+α、短軸0.12+α、深さ約0.1mである。埋土は灰色土である。遺物の出土はない。

S K04A3 東側のほとんどが調査区外にある。長軸0.2m-α、短軸0.12m+α、深さ約0.1mを測る。平面形は長方形を呈すると考えられる。埋土は灰色土である。遺物の出土はない。

S K05A3 S K03、S K05と同様に東側が調査区外にある。長軸0.26m+α、短軸0.24m+α、深さ約0.1mを測る。埋土は灰色土である。遺物の出土はない。

S D01A3 東西から北東方向に流れる溝である。幅は0.4~0.2mであり、深さ0.05mを測る。北東に行うほどそのプランは不明瞭になる。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

S X02A3 長径約50cm、短径約0.1m、深さ0.05mの不定形な堀り方をもつ遺構である。埋土は暗茶褐色粘質土である。出土遺物はない。

S X03A3 遺構の西側は調査区外に延びている。残存部長は0.3m、幅0.1m、深さ0.05mを測る。埋土は暗茶褐色粘質土。遺物の出土はない。

S D02A3 南西から北東に流れる溝状遺構である。北東に行くほどプランは不明瞭になる。幅は約0.04mで、深さは0.1mと他の遺構に比べてやや深い。埋土は中央部が暗茶褐色粘質土で、東西両肩付近の一部に灰色粘質土が堆積する。遺物の出土はない。

S R02A3 (第2図) 調査区の北端付近に位置する湿地状の堆積である。埋土は大きく3層に分かれる。最下層より土師皿の細片が少量出土している。

B地区 (図版10・11)

66号排水路に平行する東西方向の管水路で、比較的多くの溝や浅い多くの不明遺構が検出されている。遺構の埋土はほとんどが灰色土であり、中・近世の遺構がほとんどであると考えられている。

S X04B3 長径275cmを測る不定形土坑である。遺構の南側は調査区外に延びている。埋土は灰色土であり、遺物の出土はない。

S D03B3 幅90cm、深さ8cmを測る溝である。埋土は灰色土で、土器の出土はない。

S D04B3 幅145cm、深さ約5cmの南北溝である。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

S D05B3 幅35cm、深さ約8cmの南北溝である。埋土は灰色土で遺物の出土はない。

S X05B3 幅130cm、深さ約15cmの遺構である。西側はS X06によって切られており詳細な形状は不明である。一応性格不明遺構としたが、S D05と並行していることから幅の広い溝の可能性も否定できない。埋土は灰色土で、少量の土器片と寛永通宝が出土した。

S X06B3 幅150cm、深さ約13cmを測る。S X05同様に溝の可能性は否定できない。遺構の西肩はやや蛇行気味である。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

S X06B3 S X06によって切られているため詳細は不明であるが、残存部より楕円形の土坑であると考えられる。短軸 $0.6 + \alpha m$ 、長軸 $1.4 + \alpha m$ 、深さ約0.1mを測る。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

S K07B3 長軸1.7m、短軸0.5m、深さ約0.15mの土坑である。平面形は楕円形を呈し、底面は比較的平坦である。断面図は逆台形に近い。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

S X07B3 残存最大長 $10.1 + \alpha m$ の大型の遺構である。遺構の西側はS X08に切られており、性格な形状は不明である。東肩は東北方向に向かって延びている。当初自然の落ち込みの可能性も考えたが、深さが0.15m程で、ほぼ直に立ち上ることから人工的な物と考えた。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

S X08B3 幅 $3.5 + \alpha m$ 、深さ約0.2mの大型遺構である。西側は調査区外に延びている。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

C地区（第2図）

C地区の全てがA地区より始まる沼状遺構にあたる。

D地区（第2図）

自然流路や近代の遺構がほとんどである。溝や土坑などがあるが、遺物の出土はほとんどなく詳細な時期は明らかではない。埋土から新しい時期のものであると判断できる。

S R02D3 幅8m、最深部の深さ約0.2mの自然流路である。埋土は白色系の細かい砂層である。遺物の出土はない。

S D06D3 幅8+ α m、深さ約0.2mの溝である。東側はS R01によって切られている。埋土は灰色土である。遺物の出土はない。

S D07D3 幅0.6mの南側に行く程不明瞭になる南北溝である。北側は調査区外に延びている。遺物の出土はない。

S K08D3 長軸0.9+ α m、短軸0.8m、深さ約0.1mを測る。南側は調査区外に延びる。埋土は灰色土の单層で、陶器の細片が1片出土している。

E地区（第2図）

現代の水田関係の湿気抜きなどの搅乱が東側では多い。遺構の分布は希薄であり、古墳時代の土器が少量包含層より出土している程度である。

S K09E3 長径2.0m、短径0.65m、深さ0.05mの土坑である。平面形は西側がやや内にくぼむ長楕円形を呈する。埋土は褐色土である。須恵器の細片が微量出土している。

S K10E3 長径2.0m、短径0.9m、深さ約0.15mを測る。平面形はやや不定形気味の長楕円形である。断面図はU字形を呈する。埋土は灰色土で、遺物の出土はない。

S X09E3 残存最大長2.85mを測る正方形あるいは長方形の遺構である。遺構の北西よりのところに幅1m程の落ちがある。埋土は二層あり、上層が暗褐色土で、落ちの部分が灰色粘質土となる。遺物の出土はない。

F地区（図版11）

現行の小川に並行する水管路のうち東側の部分が相当する。遺構は少なく遺物の出土もない。

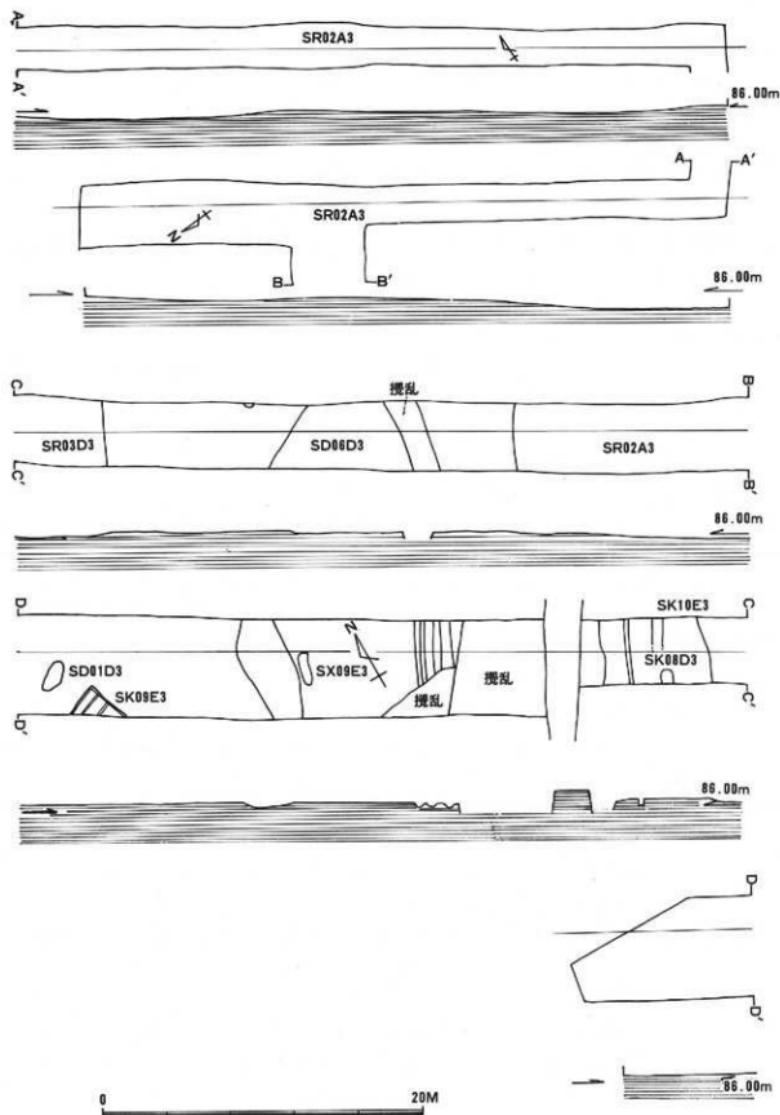
S K11F3 長径0.58m、短径0.3+ α m、深さ約0.02mの土坑である。平面形は楕円形になると考えられる。埋土は暗褐色土で、遺物の出土はない。

S K12F3 長径1.32m、短径0.3+ α m、深さ約0.02mの長楕円形の土坑である。北側は排水用の溝で切られている。埋土は暗茶褐色土で、遺物の出土はない。

G地区（図版11）

比較的多くの遺構と遺物が検出された。地区の中央付近では、完形の須恵器土師器の大型破片、円筒埴輪片、ミニチュア土器が出土した6世紀前半の溝や庄内式併行期の土器が出士した溝などがある。

S D08FG3（図版16・図版34） 残存部の最大長が4.8mを測る。溝の西肩はトレンチに対して直角にあるが、東肩はトレンチと並行気味に西肩の方に向かって延びている。トレンチの幅が狭い



第2図 第3調査区C、D、E検出遺構

ため確認できなかったが、西肩と東肩はつながっているようである。埋土は大きく三層に分かれしており、上・中肩からは土師器の壺の大型破片や細片が比較的多く出土している。下層からは6世紀前半の完形の壺や円筒埴輪片、ミニチュア土器等の祭祀遺物、木製品等が出土した。遺構の形状や出土遺物等から考えて埋没古墳の周濠の可能性もある。

S D09G3 S K13に切られる溝状遺構である。幅約0.3m、深さ0.03mで、西北に向かって流れ。埋土は暗茶褐色土で、出土遺物はない。

S K13G3 長径0.8+αm、短径0.6m、深さ約0.15mの長椭円形の土坑である。埋土は暗茶褐色土で須恵器等が多く出土した。

S X10G3 幅0.22m、深さ約0.1mの性格不明遺構である。埋土は暗茶褐色土で、土器の出土は無かった。調査区が狭いため不明遺構としたが、溝状遺構の可能性も否定できない。

S D10G3 幅0.7m、深さ約0.2mの溝状遺構である。埋土は暗茶褐色土で、比較的多くの出土器が出土した。

S R01G3 G区の西側にある沼状遺構である。埋土は灰黒色粘質土で多量の遺物が出土した。

2. 出土遺物

今回報告する遺物はほとんどG地区より出土したものである。もっとも多くの遺物を出土したS R01G3は弥生前期の土器から中世のおろし皿や天目茶碗までの多くの遺物を含んでいる。また他の遺構からはおもに弥生時代末から庄内式併行期の土器が出土している。

S D08G3 (図版19、図版42・43)

土師器壺 (33~36) 口径が24cm程度とやや大きめで、口頸部で鋭くくびれるもの(33)や口径16~19cm程度で、比較的くびれの弱いもの(34・35)がある。外面調整はいずれも刷毛目である。内面は削るもの(33・34)と撫でるもの(35・36)がある。33は最下層より出土。34~36は埋土上層より出土。

土師器壺 (37) 口径が9.5cmと小型で、鋭く外側に開く小さな口縁部をもつ。体部は浅い半椭円形を呈す。最下層より出土。

土師器碗 (38・42) 粗いつくりで、内面に輪積み痕が明瞭に残るもの(38)と小型で比較的丁寧なつくりのもの(42)がある。最下層より出土。

ミニチュア土器 (41) 口径4.4cm、器高4.7cmを測る。丸みのある体部に若干外反する口縁部がつく。底部は平底気味の丸底を呈する。底面には木の葉痕がある。内面には8mm程度の粘土紐を巻き上げた痕跡を残す。最下層より出土。

須恵器壺蓋 (39) 口径12cm、器高4.2cmを測る。体部はやや外側に開き、口縁部は尖る。大井部の削りは天井部と体部の境付近まで行われる。5世紀末から6世紀初頭ぐらいの時期になると考えられる。最下層より出土。

須恵器壺身 (40) 口径11cm、5.2cmを測る。たちあがりは短く直線的で、水平な受部をもつ。39の壺蓋とセットになるものである。最下層より出土。

円筒埴輪 (43) 外側に開き気味の口縁部片で、端部直下に凹線状のくぼみをもつ。外面調整は刷毛目調整。最下層より出土。

剣形代 (44) 全長47.4cm、幅0.8cm~1.4cm、厚さ0.8cm~1.2cmを測る。柄部は擬円形に彫り出している。最下層より出土。

板状木製品 (45) 残存長38.6cm、残存幅9.6cmを測る。側面は直に加工されている。

S X 05 B 3 (図版19)

銅鏡 (46) 外径3.2cm、内径0.6cmを測る寛永通宝である。

S D 10 G 3 (図版19・20)

高坏脚柱 (47~49・61) 坏部との接合部より大きく開きながら端部付近で若干くびれる端部がつく。弥生時代後期終末から庄内式の時期が与えられる。

古式土師器壺 (50) 口縁部がやや外側に開く受口状口縁の壺である。磨滅が激しく調整は不明である。

底部 (51) 底径11.4cmを測る平底の底部と考えられる。底面は厚く1.2cmにも及ぶ。

脚柱 (52) 坏部からゆるやかに開く脚部になると思われる。

S K 13 G 3 (図版20)

古式土師器壺 (52・53) 所謂受口状口縁の土器であり、大きく口縁端部が外側に開く。52は口縁屈曲部には刺突列点文が、頸部には斜め方向の櫛状工具による刺突文がある。53は口縁屈曲部より直に立ち上がる端部をもち、受部に4個単位の刺突列点文が施される。口縁端部があまり外に開かないことから弥生時代後期後半の土器と考えたほうが良いかもしれない。

高坏脚柱 (62) 坏部からゆるやかに開く脚部がつくものと考えられる。内面は絞り技法。

S R 01 G 3 (図版20・21・図版43)

古式土師器壺 (54) 所謂受口状口縁の壺で、頸部に刺突列点文をもつ。

土師器壺 A (55・58・59) 頸部でくの字にくびれ、口縁端部を面とりあるいは丸く取めるもの。55の端部は凹線状にくぼむ。

土師器壺 B (56・57) 頸部でくの字にくびれ、口縁端部が若干、内傾気味になるものである。57は体部外面を刷毛目調整する。

弥生土師器壺 (76) 弥生時代前期の体部片である。外面には3条+ α の篦抽沈線文を施す。

古代土師器壺 (60) 口縁端面に竹管押圧形浮文をもつ。口縁内面にも円形浮文を貼りつけた痕跡をのこす。器台の可能性もある。時期的にはやや古い弥生時代後期になれるかもしれない。

古式土師器壺頸部 (74) 口頸に『ハ』字状の竹管文を施すもの。

弥生土器壺 (75) 弥生時代前期の壺の体部片で、4条+ α の沈線文をもつ。

弥生土器高坏 (73) 口縁部で屈曲した後、外反して開く坏部で、口径20.1cmを測る。屈曲した後の外反度が強いことから、弥生時代後期でも終末の時期と考えられる。

高坏脚部 A (66・69・70) 脚柱より裾部でくびれて開くもの。69は外面篦磨き調整。内面は篦削り調整。

高坏脚部 B (71・72・77) 脚柱よりゆるやかに開く裾部をもつもの。71は外面調整は篦磨き、内面は篦削り、77は外面刷毛目調整、内面篦削り調整。

底部 (78・79) 78は底径4.3cmで約0.8cmの焼成後の孔をもつ鉢の底部である。79は底面より大きく直線的に開く底部で底径2.9cmを測る。

白磁 (80) 底径6.7cmを測り、やや内湾気味に立ち上がる底部である。高台部の底面は削りにより作り出している。

須恵器直口壺 (81) 口径13.5cmで、直線的に開く口縁部をもつ。口縁部には2条の凸帯をもち、その間には波状文を施す。

須恵器壺 (82) 頸部でゆるやかにくびれた後、口縁部が大きく外反する。口縁部には、2条の凸帯と波状文を施す。口縁部には、2条の凸帯と波状文を施す。口縁部端は欠損している。

中世陶器 (83) 壺の肩部片である。外面には釉が塗付されている。

天目茶碗 (84) 口径4.1cm、残高5.6cmを測る。肩部で内側にくびれた後、ゆるやかに外反する口縁部がつく。

須恵器高坏脚部A (85) 高坏の脚部でカキ目をもたないもの。

須恵器高坏脚部B (86) 高坏の脚部でカキ目をもつもの。

須恵器無頸壺 (88) 無頸壺の口縁部片である。

須恵器坏身 (87・89) 貼り付け高台をもつものであり、奈良時代のものと思われる。

鏡把手 (90・91) 90はぼん真横にのびるタイプ、91なやや上側につくものである。

古式土師器壺 (92) 壺形土器の体部片である。体部には上から廉状文風の刺穴列点文、直線化した4条一組の波状文、直線文が施されている。

瀬戸系おろしめ皿 (93) 底面は糸切り底である。

土釜 (94) 内傾する口縁部に小さな鋒部がつく。

磨製石斧 (95) 全長9.8cm、幅4.3cm、重さ165gの砂岩系の石斧である。

須恵器施洞部 (96~101) 96は外面平行叩き、97~98は外面は斜格子目叩き、内面は同心円叩きを行う。99は外面平行叩きの後櫛目。100は外面平行叩き、内面ナデ。101は外面平行叩きの後一部なで消し。内面円弧叩きの後ナデ消し。

3. 小 緒

本調査区はA地区を除き調査地の最も北の東西方向の調査区である。その両端でS R02A3とS R01G3という2か所の湿地状の部分を検出することができた。この2つの湿地状の部分を中心に遺構の分布をみれば時期的な偏りが認められる。

S R02A3は土器もほとんど出土しておらず、僅かに中世の土師器が出土しただけである。さらに周辺には中世から近世にかけての溝状遺構や性格不明遺構などが分布するものの、古墳時代の遺構は全くない。一方、S R01G3は弥生時代から中世まで多くの土器が包含されており、周辺には古墳の周濠の可能性のある溝や庄内併行期と考えられる時期の遺構など、時期的にやや古い時期の遺構が分布している。

土器についてみれば弥生前期の土器を最古に中世まであり、特に庄内式併行期の時期や古墳時代の土器が比較的多くある。

(中村)

第7章 第4調査区

工区の中央部および南西部に設定された調査区で、工事計画の支線55道平行管水路、子守神社周環管水路、新草津川平行管水路西部にある。北から順にA地区～C地区、また東から順にD地区、E地区と称した。なおD地区の神社北側に位置する東西方向のトレンチについては小ピット2個のみの検出であったため遺構図を省略した。

1. 検出遺構（第3～4図、図版12～13、35～38、44～45）

A地区（第3図、図版35）

調査区の最も北側に位置するトレンチで、幅約1.1m、長さ約60mを測る。遺構検出面は黄白色粘質土、黄白色砂質土層あるいは灰黒色疊層の上面で、標高は85.94m～86.13mを測る。

S R01A4 トレンチの南側で検出された河道状遺構で、B地区にまたがって確認された。遺物は須恵器の壺蓋、高壺、小壺、土師器の高壺、甕等の土器類のほか滑石製鋸鉋車も出土している。当該遺構は埋土の堆積状況や出土する遺物の年代観等から、第5トレンチで検出されたS R01A5と同一のものである可能性が高いと推定される。このことは両地の延長線上の現水面出面の高低差からも指摘される。

S X01A4 トレンチの南側で検出された遺構で、S R01A4の北側に位置する。検出面からの深さは約6cm～7cmを測り、埋土は灰褐色土であった。出土した遺物には近世の陶器碗が1点ある。

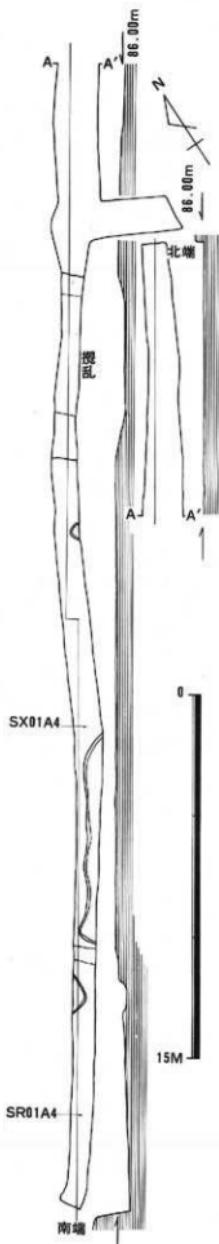
B地区（図版12、35、38）

子守神社の北東に位置するトレンチで、幅1.1m、長さ約56mを測る。遺構の検出面は黄白色粘質土層の上面で、標高は85.80m～86.18mを測る。南に高く北に低い。

S D01B4 幅約1.1mの溝状遺構で、西側部分は灰色粘質土により擾乱を受けている。埋土は暗茶褐色土で、検出面からの深さは約27cm～36cm程度を測る。遺物の出土はなかった。

S D02B4 幅約75cmの溝状遺構で、検出面からの深さは約9cm～15cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物としては須恵器の壺身、甕、土師器の甕の小片等が出土している。

S K01B4 S R01B4の南側で検出された土坑状遺構で、検出面では幅2.4m～3mの溝状プランを呈すが、深さ約40cmの付近より下位では円形に掘り込まれている。埋土は灰黒色系の粘質土で遺物としては須恵器の壺身、高壺、土師器の甕胴部片および磨製石斧などが出土して



第3図 第4調査区A地区検査遺構 S=1/200

おり、完形にちかい須恵器坏身は7世紀を前後する時期のものであった。

S R01B4 トレンチの北側で検出された河道状遺構で、A地区にまたがって確認された。検出面からの深さは、少なくとも1.5m以上をはかる。埋土は紫がかった灰黒色粘土で、遺物としては須恵器の坏蓋、坏身、甕などのほかに、中世の土師器皿の小片等が出土している。S R01A4と同じ理由で第5トレンチのS R01A5と同一のものである可能性が指摘される。

S X01B4 S D02B4の南側で検出された性格不詳の遺構で、遺構内には木を組み合わせた構築がなされていた。木組みの構築は直径約8cm程度の丸太材を用いたもので、遺構の底面に縦木2本を約40cmの間隔で杭として打ち込んだ後、それに横木1本を渡し込んだものである。検出の範囲が限られたため、その性格については明らかにし得ないが、おそらく土止めを意図としたものと推測される。遺構の深さは約22cm程度で、全体に灰色系の粘土であった。出土した遺物には須恵器の高坏、甕や土師器の甕の小片が確認されたが、埋土の状況等を考慮すれば、必ずしもこれが遺構の所属年代を示しているとは考えにくい。

S X02B4 トレンチの南側で検出された長さ約9.5mにわたる性格不詳の遺構である。検出面からの深さは約5cm~17cmで南側でやや深い。埋土は暗茶褐色粘質土の単層で、出土した遺物には須恵器や土師器の小型品が多く見られた。須恵器には完成品が多く、いずれについても6世紀を前後する古式の様相を呈すものであった。

C地区（図版12、36）

子守神社の東側に位置するトレンチで、幅約1.1m、長さ約70mを測る。遺構検出面は褐色を帯びた黄白色粘質土層の上面で、標高は85.85m~86.14mを測る。

S D01C4 約74cmの溝状遺構で、検出面からの深さ約10cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、須恵器の坏蓋や土師器の甕小片等が出土している。

S D02C4 幅約52cmの溝状遺構である。検出面からの深さは約5cm~17cmで、底面には頗著な凹凸がみられる。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物としては須恵器の坏身の小片等が出土している。

S D03C4 幅約1.4mにわたって検出された溝状の遺構で、検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S D04C4 幅約8.3mをはかる溝状遺構である。検出面からの深さは中央部で約60cmを測るが、溝の南北両側はテラス状に浅くなっている。南側で約27cm、北側で約32cmを測る。埋土はほぼ全体に暗茶褐色土であったが、中央部の下層はくすんだ青灰色土であった。第2調査区C地区的S D08C5に連続するものの可能性がある。遺物としては須恵器の坏身や土師器の把手付き甕片等がみられたが、その多くは南側のテラス状に浅くなっている部分から出土した。

S D05C4 幅約80cmの溝状遺構で、検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、遺物の出土はなかった。

S D06C4 幅約1.4mの溝状遺構で、検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S D07C4 トレンチの南側で検出された幅約1.1m~1.3mの溝状遺構で、検出面からの深さは約

5cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、遺物の出土はなかった。

S K01C4 直径約1mの土坑状の遺構で、検出面からの深さは約46cmをはかる。埋土は暗茶褐色土で、出土した遺物には古式土師器の高壺、壺、甕などがある。同時に投棄されたことは証明できないが、大部分は底部からまとめて出土したことから、一括性の高い遺物と推定される。

S X01C4 幅約1.6mにわたって検出された性格不詳の遺構で、検出面からの深さは西側で約13cm、東側で約7cmをはかる。東側はテラス状で浅い。埋土は全体に暗茶褐色粘質土で東西両側での顕著な土質の差は認められなかった。出土した遺物には土師器の甕小片がみられたにすぎない。

S X02C4 幅約44cm以上、深さ約7cmの性格不明の遺構で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。東側は灰色土で埋まるところから擾乱を受けているものと推定される。遺物の出土はなかった。

S X03C4 不整形な性格不明の遺構で、深さは約3cmを測る。北西部分は円形を呈しており、他よりさらに約13cm程度落ち込み、検出面からの深さは約16cmを測る。遺物は落ち込み部分の底面に接して須恵器の壺蓋の完形品が出土しているほか、土師器の甕片等もみられた。遺構の所属年代は完形品の須恵器の年代観から概ね6世紀を前後する時期が想定される。

S X04C4 幅約4.2mにわたって検出された性格不詳の遺構で、検出面からの深さは約10cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物としては須恵器の壺身や土師器の甕片等が出土している。

S X05C4 トレンチの南端で検出された遺構で、検出面からの深さは7cm～10cmをはかる。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物には須恵器の壺身や土師器の甕片がみられ、時期的にはおおむね6世紀を示すものであった。

D地区（第4図、図版13、37）

神社の北側および西側に位置するトレンチで、幅約1.1m、長さ約115mを測る。遺構の検出面はややくすんだ黄白色粘質土層の上面を基調とするが、北側の一部ではその下層にあたる黒褐色疊層の上面となる。検出面の標高は85.68m～86.30mを測り、北側と南側で高く、中央部がもっとも低い。

S D01D4 幅約75cmの溝状遺構で、検出面からの深さは約20cmを測る。遺構内の底面には直径約20cm、深さ約30cmのピット状遺構がある。埋土はいずれについても暗茶褐色土で、須恵器の壺身や土師器の甕片等が出土している。

S D02D4 幅約3.9mの溝状遺構で、検出面からの深さは約30cmを測るが、北側はテラス状でやや浅い。埋土は全体に灰褐色土だが、最上層にのみ黄白色粘質土の薄い層が見られた。遺構の廃絶後、埋め立てられている可能性がある。出土した遺物には須恵器の壺身や土師器片、石錐等のほか、近世の陶器片がみられる。量的には前者が多く、後者が少ない。

S D03D4 幅約62cmの溝状遺構で、検出面からの深さは約12cmを測る。埋土は灰褐色土である。出土した遺物には須恵器の壺身や壺蓋、土師器の甕片等がみられる。

S D04D4 深さ約40cm前後の溝状遺構で、長さ約16mにわたって検出された。埋土はくすんだ灰色土で、出土した遺物には近世初期の陶器類が多く見られた。須恵器や土師器の小片も出土したが混入品の可能性が高い。

S D05D4 幅約60cmの溝状遺構で、検出面からの深さは約6cm～10cmを測る。S D06D4と同様、断面形状は緩やかなレンズ状を呈し、埋土は遺構ベースの黄白色粘質土をブロック状に含む暗茶褐色土であった。出土した遺物には須恵器の坏身や土師器の壺片等がみられる。

S D05D4 深さ約40cm前後の溝状遺構で、検出面からの深さは約20cmを測る。遺構内の底面には直径約20cm、深さ約30cmのピット状遺構がみられる。埋土はいずれについても暗茶褐色土で、須恵器の坏身や土師器の壺片が出土している。

S D06D4 幅約50cm～65cmの溝状遺構で、断面形状は緩やかなレンズ状を呈す。埋土は暗茶褐色土を基調とするが、遺構ベースの黄白色粘質土がブロック状の混入を見せている。遺物の出土もなく、検出面からの深さも約5cm程度と浅い。

S X01D4 最大幅約2.6cmにわたって検出された。埋土には全体に耕作土の混入がみられた。遺物には須恵器の坏身や壺、土師器の壺片等が少量みられる。

S X02D4 最大幅約1.5mにわたって検出された。埋土は灰色かかった淡い褐色土で、きわめて堅く縮まっていた。風倒木の可能性が高い。

S X03D4 幅約2.3mにわたって検出された性格不詳の遺構で、検出面からの深さは約40cmを測る。埋土は灰褐色土で、出土した遺物には須恵器の坏身、土師器の高坏、壺片等がある。

S X04D4 S X05D4の北側で検出された長方形状の平面プランを有す遺構で、短辺が約40cm～60cm、長辺が約1.1m～1.3m、深さが約25cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、須恵器の坏蓋、土師器の高坏等が出土している。

S X05D4 平面プランが方形を呈す遺構で、短辺が約50cm、長辺が約65cm、深さが約50cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、出土した遺物には須恵器の坏身、壺、土師器の高坏、壺片等が見られた。

S X06D4 トレンチの南端で検出された性格不詳の遺構で、検出面からの深さは北側がテラス状で約5cmと浅いが、最深部では約20cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、出土した遺物には須恵器の坏身や壺片、土師器の壺片等がみられた。

E 地区（図版13、37、38）

神社の西側に位置する新草津川平行の管水路計画箇所にあたり、幅約1.1m、長さ約71mを測る。遺構の検出面は黄白色粘質土層の上面で、標高は86.06m～85.68mをはかる。なおS P01E4付近より西側では灰黒粘質土の堆積がみられたことから、この部分は沼などの低湿地と推定された。この部分については、埋土とみられる灰黑色粘質土層を除去したところ、青灰色粘質土層がみられたため、この上面で遺構の検出をはかった。

S D01E4 幅約2.8mの溝状遺構で、検出面からの深さは約70cmを測る。埋土はくすんだ青灰色粘土で木葉などが出土したが、人工の遺物の出土はなかった。

S D02E4 幅約34cmの溝状遺構で、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は淡く緑かかった灰黑色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S K01E4 検出された部分から推定すると、直径約1.2mの円形を呈した土坑状遺構とみられる。

検出面からの最大深度は約70cmを測り、素掘りである。埋土は灰黒色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S K02 E4 検出された部分から推定すると、直径約1.7m～1.9mの円形を呈した土坑状遺構と推定される。検出面からの最大深度は約57cmを測り、素掘りである。埋土は灰黒色粘質土で、出土した遺物には須恵器の甕、土師器の甕片等がある。

S K03 E4 検出された部分から推定すると、直径約2.1m～2.3mの円形を呈した土坑状遺構と推定される。検出面からの最大深度は約85cmを測り、素掘りである。埋土は灰黒色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S X01 E4 1.9m～2.6mの幅で検出された性質不詳の遺構で、検出面からの深さは約50cmを測る。埋土は全体に灰黒色を呈し、遺物の出土はなかった。

2. 出土遺物（図版22～24、44～45）

A地区（図版22、44）

河道状遺構のほかは、遺物の出土が稀薄であった。A地区的S R01B4とB地区的S R01B2は連続する遺構であるため、ここではあわせて報告しておく。

S X01 A4出土遺物（102／図版22）

陶器碗（102）：見込みに淡い緑色釉のかかる高台径4.1cmの陶器碗である。高台は削り出されており、その内側には「+」状の墨書きがある。焼成は堅緻で、見込み中央には円形に砂が熔着している。砂を「焼き台」として使用したものと推定される。

S R01 A～B4出土遺物（102～112、117／図版22、44）

須恵器壺（117）：天井部と体部との境界に退化した縦線をもつ。焼成は堅緻で、色調は青灰色を呈し、胎土には長石粒が目立つ。B地区側より出土した。

須恵器高壺（108）：裾部外面に凸帯と櫛描きによる波状文をもつ。焼成は堅緻で灰白色を呈す。胎土には多量の微細な長石粒が含まれる。A地区側より出土した。

須恵器甕（105～106）：（105）は頸部、（106）は体部であり、いずれも甕の破片と推定される。

（105）の外面には凸帯と櫛描きによる波状文が観察される。焼成は堅緻で青灰色を呈す。胎土には多量の微細な長石粒が観察される。（106）の外面には櫛描きの波状文と沈線が観察される。明瞭ではないが、その下部は横位のヘラケズリ状調整が施されている可能性がある。胎土には微細な長石が目立ち、表面には黒色粒も認められる。焼成は堅緻で表面は青灰色を呈すが、断面はセピア色である。いずれもA地区側より出土した。

須恵器甕（107、109～112）：（110～112）はA地区側より、（107、109）はB地区側より出土した。（107）は口縁部片であり、外面には櫛描きの波状文が2帯施され、その下部にはそれぞれ2条1対の凸帯が観察される。また内面にはヘラの先端で引かれた不規則な沈線が認められる。焼成は堅緻で、色調は表面が青灰色、断面がセピア色を呈す。胎土には微細な長石粒を多量に含んでいる。（109～112）は体部片であり、いずれについても外面には木目に直交する平行線を刻んだ叩き板の痕跡をとどめている。（109）は内面に同心円文・凸具痕をそのまま残し、（110～112）につ

いては、ナデにより不完全ながら消去している。(111～112)は外面を叩き締めた後、さらにカキメ調整をおこなっている。焼成はいずれも堅緻であるが、(109)は青灰色、(110)は表面が灰色、断面がセビア色、(111)は橙色、(112)は灰色を呈している。胎土にはいずれも微細な長石粒を多量に含んでいる。

筋鎌車 (104)：滑石製の筋鎌車で、上面径1.7cm、下面径3.6cm、高さ1.3cm、孔径0.5cm、重さ20gをはかる。側面は縦位に、下面は多方向から細かく削られている。石材の色調は濃緑色である。**土師器皿** (103)：口縁部1段ナデ手法の土師器皿で、口縁外端は押しナデによる面をもつ。口径8.1cm、器高1.3cmを測る。淡い褐色で胎土は精良である。B地区側より出土した。

B地区 (113～115、135～138／図版22、44～45)

S X02B4より古式の須恵器等が多数出土した。S R01B4出土遺物については連続する遺構であるためA地区のS R01A4とあわせて報告している（前項参照）。

S K01B4出土遺物 (113～115／図版22、44)

須恵器坏身 (113)：口径9.9cm、器高3.2cmの坏身である。底部には厚く自然釉の付着がみられるが、約1/2をヘラズリしているようである。また底部の中心を通るようにして「一」状のヘラ記号が認められる。焼成は堅緻で灰色を呈し、胎土には長石粒がほとんど見られない。

須恵器高坏 (114)：短脚1段の方形4方透かしの高坏である。焼成は堅緻で青灰色を呈す。胎土は微細な長石粒が目立つ。

磨製石斧(115)：長さ8.7cm、刃部幅4.6cm、厚さ1.25cmの磨製石斧で、重さは68gを量る。にぶい灰色のきめ細かな石材をもちいる。

S X02B4出土遺物 (135～138／図版23、45)

須恵器坏蓋 (137～138)：(137)は口径12.2cm、器高5.1cm、(138)は口径12cm、器高4.7cmをはかる。いずれについても半球形の天井部をもつが、体部と天井部の境界の稜線は、(137)が細身でシャープなのにに対し(138)は太くて鈍い。同様に(137)は口縁内端に明瞭な凹線を有すのに対し、(138)にはそれがなく、法量も小振りで器壁も薄い。ロクロの回転方向は(137)が時計回り、(138)は反時計回りである。焼成はいずれも堅緻で青灰色を呈し、胎土には微細な長石粒が目立つ。

須恵器坏身 (139～141)：口径10.3cm～10.9cm、器高は(140)が4.7cmを測る。口縁の立ち上がりは長く、受部から直立的にたちあがり、内端には明瞭な凹線が認められる。底面は接地面が大きい半球形状で、約2/3程度をヘラケズリ調整する。胎土は微細な長石粒を多量に含み、堅緻に焼成され、表面は青灰色、断面はセビア色を呈す。ロクロの回転方向については、少なくとも(140)が反時計回りである。

須恵器高坏蓋 (135～136)：いずれも半球形の天井部をもち、その中央には宝珠形のつまみを有す。天井部と体部の境界になる稜線は(136)が細身でシャープ、(137)は太くて鈍い。宝珠つまみは(135)が内凸、(136)は内凹であり、天井部はいずれも約1/2を回転ヘラケズリする。法量は(135)が口径12.1cm、器高5.3cm、(136)が口径11.8cm、器高5.0cmをはかり、(136)は小振り

で器壁も薄い。ロクロの回転方向は(135)が反時計回り、(136)が時計回りである。焼成はいずれも堅緻であり、胎土には微細な長石粒を多量に含む。(136)の色調は青灰色。(135)は灰色で表面には多くの黒色粒が観察される。

須恵器高坏(142~146)：(142)は無蓋の坏部で、口径は14.9cmをはかり、脚部は短脚の方形4方透かしと推定される。器壁の薄い口縁部は外方に開き、体部の外面には2条1対の凸帯とその下部に櫛描きの波状文を有す。ロクロの回転は反時計回りで、底部の約1/3程度をヘラケズリする。(143)、(146)は有蓋の坏部で、(146)は当該遺構の埋土と推定される排土中より採集した。(143)は口径11.2cmを測り、脚部は短脚の方形3方透かしと推定される。口縁の立ち上がりが長く、受け部から直立的にたちあがり、内端には明瞭な凹線をもつ。ロクロの回転は時計回りで、約4/5程度を回転ヘラケズリする。(146)は口径11.4cmで、脚部は長脚の方形3方透かしと推定される。口縁部の立ち上がりは短く内傾しており、受部から鈍角的にたちあがる。坏部は扁平で、(143)の約1/2程度の器高しかない。ロクロの回転方向は(143)については時計回りであり、(143)の底部の約4/5、(146)の約1/2がヘラケズリされている。(144)、(145)は脚部であり、(144)は短脚1段の円形3方透かしで、底径は8.9cmをはかる。(145)は短脚1段の方形4方透かしを有し、外面にはカキ目が施される。胎土は(146)が緻密な砂質であるほかは、すべて多量に微細な長石を含むものである。焼成はいずれも堅緻で、(143)、(145)の断面がセビア色のほかはすべて灰色~青灰色である。

須恵器壺(147~150)：(147)は口縁部片で、外面には1条の凸帯があり、その下部には櫛描きの波状文が施される。(148~150)は体部片で、外面には木口に直交する平行線文叩きを実施したのち、横位のカキ目調整をおこなっている。内面については本来いずれも同心円文の当具痕を残していたものと推定されるが、(150)を除いて完全に無文化されている。胎土は微細な長石を多量に含み、焼成は堅緻で表面は青灰色、断面はセビア色を呈す。

土師器高坏(151~154)：いずれも磨耗がはげしく、細部の調整については明瞭でない。(154)は透かしをもたない脚部で、底径は8.5cmをはかり、(153)の脚柱内面には絞り目が観察される。粘土のあわせめ等から坏部と脚部の接合は、脚部の内側から粘土を詰め込んでおこなわれていると推定される。焼成はいずれもあまく、色調は淡い褐色~茶褐色を呈している。胎土は(154)が小礫を含んで粗いが、その他はいずれも精良な粘土質である。

土師器碗(155)：口径12.1cm、器高5.4cmを測る。体部は半球形状を呈し、口縁端部はわずかに内傾している。磨耗がはげしく細部の調整等については明瞭でない。胎土は多くの小礫を含んで粗い。堅緻に焼成され橙色を呈す。

土師器壺(156)：口径12cmを測り、器高は8cm強と推定される。口縁部は短く外方に開き、体部は横につぶれた球形状で、器壁の厚い底部とは明瞭な段により区別される。磨耗がはげしく細部の調整等については明瞭でないが、体部の内面にはハケ目状の痕跡が、外面には横位のミガキ状の痕跡がわずかながらも認められる。胎土は精良な粘土質で、高坏(151~153)に類似する。堅緻に焼成され、橙色を呈す。

土師器壺 (157～158)：(157) は器壁が厚くて口縁端部に面をもち、(158) は器壁が薄くて口縁端部は鋭角的である。いずれも磨耗がはげしいが、(157) の体部にはハケ目調整および粘土紐の痕跡が観察される。胎土は小礫を含んで粗く、灰褐色を呈す。

C地区 (116、118～128／図版22、44)

おもに古墳時代の前期から古墳時代の中期に至るまでの遺物が出土したが、弥生時代前期の土器も認められた。

S P01C4出土遺物 (121／図版22)

弥生土器壺 (121)：壺体部の小片で、外面には4条1組の沈線文が認められ、その上下両側には直径約5mmの竹管文が観察される。沈線文はヘラ描きで、一本いっぽん別べつに施文されている可能性が高い。内面はナデにより調整されているが、粘土紐の痕跡が残る。焼成は堅緻で淡い褐色を呈し、胎土は小礫を含んで粗い。

S K01C4出土遺物 (122～128／図版22、44)

土師器壺 (122～125)：受口状の口縁をもち、(122) で口径16cmを測る。器壁は磨耗しているが、少なくとも残部については全面ナデ調整のようである。焼成は堅緻で灰褐色を呈し、胎土は小礫を含んで粗い。

土師器壺 (128)：頸部の径は6.1cmである。胎土、焼成とともに (127) に酷似し、胎土はきわめて精良で、全体に精製品的印象を与える。焼成は堅緻で、淡い橙色を呈す。磨耗がはげしく、細部の調整等については明らかでない。

土師器鉢 (127)：受口状の口縁をもった鉢形の土器で、口径は14.5cm程度である。示した図では口縁端部が推定になっているが、これは別に存在する同一個体の口縁端部片に基づく推定である。焼成は堅緻で淡い橙色を呈すが、口縁の端部付近は部分的に黒色化している。胎土は (126) に酷似してきわめて精良である。

S X03C4出土遺物 (116／図版22、44)

須恵器壺 (116)：口径12.3cm、器高4.1cmの壺蓋で、体部と口縁部の境界には明瞭な稜線を有し、口縁内部には凹線をもつ。天井部は扁平な半球形状を呈し、天井部の約4/5については、時計回りのロクロによる回転ヘラケズリをおこなう。胎土は微細な長石粒を多量に含み、焼成は堅緻でおむね青灰色を呈すが、セビア色の部分も日立つ。

S X04C4出土遺物 (120／図版22)

須恵器壺：口縁の立ち上がりが長く、口縁の内端に凹線をもつ壺身で、口縁端部は外方に引き出すようなかたちとなる。器壁は厚く、天井部には回転ヘラケズリを施す。焼成は堅緻で灰色を呈し、胎土には微細な長石粒を多量に含んでいる。

S X05C4出土遺物 (118～119／図版22)

須恵器壺 (118～119)：いずれも口縁の立ち上がりが長く、口縁の内端には明瞭な凹線をもつ。(118) については口径10.2cmを測る。胎土には多量の長石を含み、焼成は堅緻で灰色～青灰色を呈すが、(118) の断面はセビア色である。

D地区（図版24、44）

S D04D4をはじめとして、中・近世の遺物の出土が多かった。

拂土採集遺物（159～160／図版24）

須恵器壺蓋（159～160）：天井部と体部の境界に明瞭な稜線を有す器壁の薄い壺蓋で、口縁部は外方に張りだし、その内端には明瞭な凹線をもつ。天井部は境界の稜線ちかくまで回転ヘラケズリされている。胎土には微細な長石粒を多量に含み、焼成は堅緻で灰色を呈す。

S D02D4出土遺物（162、166、168～169、173～176、186／図版24、44）

須恵器壺蓋（162）：体部と天井部との境界に太い稜線を有す器壁の厚い壺蓋で、口縁内端にはわずかな凹線をもつ。天井部は回転ヘラケズリされている。胎土には微細な長石粒を含み、器壁には黒色粒が浮き出ている。焼成は堅緻で、灰色を呈す。

須恵器壺身（166）：小振りの壺身で、口縁の立ち上がりも受部も短い。焼成は堅緻で青灰色を呈し、胎土には微細な長石粒が多量に含まれている。

須恵器甕（168～169）：いずれも外面には、木目に直交して平行線の彫られる叩き板の痕跡を残し、内面はナデにより無文化されている。焼成はいずれも堅緻で、表面は青灰色、断面はセビア色を呈している。胎土には微細な長石粒が多量に含まれている。

土師器壺（174）：底径4.5cmをはかる内凹の底部片である。焼成は堅緻で褐色を呈すが、外面の約1/2は黒色化している。胎土には小礫を多量に含んでいる。

礫石錘（173）：褐色をおびた灰色の砂岩系の礫を用い、両端を打ち欠いて作られている。長さ8.2cm、幅5.5cm、厚さ1.1cm、重さは120gをはかる。

陶器擂鉢（175～176）：（175）は原体5条の擂目が密に施されるもので、堅緻に焼成され橙色を呈している。（176）は原体4条の擂目をまばらに施すもので、堅緻に焼成され、灰色を呈している。内面には擂目が消えかかるほどどの使用痕が観察される。（175）の胎土には長石跡が目立つのに対し、（176）には礫等の混入が少ない。

陶器甕（186）：内外面ともにナデ調整をおこなう口縁部片で、胎土、焼成とともに擂鉢（175）に酷似している。

S D04D4出土遺物（177～185、187～193／図版24）

須恵器甕（178～184）：（178～179）は頸部片で、（178）の外面には2条1対の凸帯の間に、同じく2条1対の櫛抜き波状文が観察される。（179）は体部の内面に同心円文の当具痕をそのまま残すもので、外面の口縁端部に近い箇所には横位のカキ目調整を施している。いずれも堅緻に焼成され、セビア色の箇所が目立つ。（180～184）は体部片であり、いずれについても外面には、木目に直交する平行線文を彫り込んだ叩き板の痕跡を残している。外面については（180～182）が同心円文をそのまま残すほかは、他の全てがナデにより消去されている。（182～184）の外面には横位のカキ目調整が観察される。いずれも焼成は堅緻で、灰色～青灰色を呈すが、（180、183～184）の断面および外面の一部はセビア色である。

土師器壺（177）：接着面の小さい底部をもつ。器壁は磨耗していて、細部の調整等については明

らかでない。胎土には小礫を多量に含む。

陶器皿(185)：口径11.5cm、高台径6cm、器高2.5cmを測る。口縁端部はほぼ水平に外方に引き出されたのち上方に屈曲し、受口状の形状を示す。体部の内面には丸彫りがみられ、内面見込みは露胎で墨痕がのこるほかは、全体に淡緑色の灰釉が施されている。焼成は堅緻で、胎土は緻密で堅い。

陶器擂鉢(188～191)：(188)は内面の擂目がきわめて密に施される。(190～191)は擂目がまばらで(190)の原体は4条、(191)は使用により擂目が消えかかっている。(189)には擂目がないが、少片であることを考慮すれば、擂鉢もしくはまばらな擂日の擂鉢と推定される。焼成はいずれも堅緻だが、(188)がくすんだセピア色で胎土に礫等をほとんど含まないのに対し、(189～191)は褐色で多量の長石礫が認められる。

陶器壺(187、192)：(187)は逆L字状に口縁を作るものである。焼成は堅緻で、胎土には礫等をほとんど含まず精良である。(192)は底部外面に木目痕(亀板?)が残る。焼成は堅緻で、胎土には長石礫が目立つ。

丸瓦(193)：玉縁の丸瓦で、凹面には粘土板の糸切り痕と布目が観察される。凸面については無文化されている。瓦質に焼成され表面は黒色、断面は灰色を呈す。

S X 01 D 4 出土遺物 (163、167／図版24)

須恵器坏身(163)：天井部の約1/2程度を回転ヘラケズリする坏身である。焼成は堅緻で、青灰色を呈し、胎土には多量の長石粒が含まれる。

須恵器疋(167)：外面には2条の凸帯をもち、その上下両側に櫛描きの波状文が施される。疋の頭部と推定される。堅緻に焼成され青灰色を呈し、胎土には多量の長石粒が含まれる。

S X 03 D 4 出土遺物 (161、170～171／図版24)

須恵器坏蓋(161)：天井部と体部との境界にわずかながらも稜線をとどめる坏蓋で、天井部は反時計回りのロクロにより稜線ちかくまで回転ヘラケズリされている。堅緻に焼成され、灰色を呈し、胎土には多量の長石粒が含まれている。

須恵器甕(170～171)：いずれも外面には本日に直交する平行線文の叩き縮めを施したのち、横位のカキ目調整をおこなっている。内面には同心円文の当具痕をそのまま残している。胎土には微細な長石粒を多量に含み、堅緻に焼成され青灰色を呈している。

S X 05 D 4 出土遺物 (164／図版24)

須恵器坏身(164)：口縁の立ち上がりは受部から直立的に立ち上がり、底部は反時計回りのロクロによる回転ヘラケズリで調整している。胎土には微細な長石粒を多量に含み、堅緻に焼成され青灰色を呈す。

S X 06 D 4 出土遺物 (165、172／図版24)

須恵器坏身(165)：口縁の立ち上がりは受部から直立的に立ち上がり、底部には反時計回りのロクロによる回転ヘラケズリをおこなう。焼成は堅緻で青灰色を呈し、胎土には微細な長石粒を多量に含む。

須恵器壺（172）：外面には木目に直交する平行線文を刻んだ叩き板の痕跡を残し、内面には同心円文の当具痕をそのまま残している。胎土には微細な長石粒を多量に含み、焼成は堅緻で表面は青灰色、断面はセピア色を呈している。

E地区（図版22）

遺物の出土量は概して少なく、広範にわたって確認された沼地状の堆積にも遺物はほとんど包含されていなかった。

S K 02 E 4 (133～134／図版22)

須恵器把手付壺（133）：二等辺三角形状の把手を貼り付けられた壺で、内面には同心円文の当具痕を残す。外面には回転を利用しないハケ目調整が施され、叩き締めの痕跡はまったく認められない。当具の使われたことは確実なので、叩き締め痕は完全に消去されたものと推定されるが、器面の観察のみからはもともと叩き締めがおこなわれていない可能性も否定できない。胎土は他の須恵器と比較して精良で、微細な長石粒はほとんど含まず、小礫がまばらに観察される程度である。一見して「土師器」の印象を受けるもので、須恵器としてはややあくまで焼成され、灰褐色を呈している。

土師器壺（134）：外面に縦位のハケ目をほどこしたのち、外方に開く口縁端部に強いナデを施している。焼成は堅緻で全体に灰褐色を呈すが、口縁端部には煮こぼれ状のススが付着している。胎土は小礫が目立ち粗い。

3. 小 結

当該調査区では遺構密度は比較的高かったが、B地区およびC地区において顕著にみられたように遺構内の深さの浅いものがきわめて多かった。これらのなかには底面に接して完形に近い遺物の出土したものも目立ったことから、本来の掘り込み面からは、大きく削平を受けている可能性が推定される。これらの遺構は、出土した遺物からみると、おおむね古墳時代の前期から中期にかけてのものが多いが、神社西側のD地区においては近世初期の溝状遺構等も認められた。また少量ではあるが、弥生時代の土器、それに縄文時代に多く見受けられる砾石錐等も確認された。

(北村)

第8章 第5調査区

工区の西部に設定された調査区で、工事計画の支線62号排水路およびそれ以西の管水路計画箇所にあたる。便宜的に排水路計画箇所をA地区とし、管水路計画箇所については東西方向のトレンチをB地区、南北方向の浜街道沿いのトレンチをC地区とした。

1. 検出遺構（図版14～15、39～40）

A地区（図版14～15、39～40）

支線62号排水路の計画箇所にあたり、幅約2m、長さ約195mを測る。遺構の検出面は黄白色粘質土層の上面で、標高は85.85cm～86.15cmの耕土直下に位置している。おもに古墳時代の遺構が検

出されたが、現代を最新とする各種の「温氣抜き」や攪乱も隨所で見られ、遺構の遺存状況はよくない。なお調査区南部の現水路以南の地区については、第4調査区のE地区西侧で検出された沼状低湿地の連続箇所が検出されている。

S A01A5 直径約40cm～60cmの隅丸方形状の柱列群で、西側の1群と東側の1群の、少なくとも2時期の重複があるものと推定される。いずれも南北2間以上で、柱痕の明確に検出されるものがあったことから、東西方向にのびて掘立柱建物になる可能性が指摘される。西側の柱列からは、土師器の甕体部片が少量出土したが、小破片で時期等を特定できるものではない。

S D01A5 S R01A5の底面で検出された幅約70cmの溝状遺構である。埋土は淡い灰黒色粘質土で、S R01A5の埋土とは區別しがたいほど酷似していた。検出面からの深さは約14cmを測り、土師器壺等が出土した。

S D02～04A5 S X01A5の南側で検出された幅約20cm～50cm、深さ約4cm～6cmの溝状遺構で、埋土は灰色粘質土であった。遺物の出土はないが、中世の遺物を出土するS X01A5を切って形成されていることから、それより時代の降ることは確実であり、染付碗を出土したS D06A5とは規模、埋土の状況、方位等の近似することから、これと同時期で近世以降のものである可能性が高い。

S D05A5 幅約74cm、深さ約10cmの溝状遺構である。幅は広いが、埋土は灰色粘質土でS D01～02A5と類似する。須恵器や土師器の小片が出土した。

S D06A5 幅約40cm、深さ約7cmの溝状遺構である。埋土はS D02～05A5等と類似する灰色粘質土で、染付けの碗が出土している。

S D07～11A5 幅約34cm～50cm、深さ約6cm～10cmの溝状遺構である。北側のS D07A5を除いて、中心間距離が約1.1mの等間隔でならぶ。埋土はいずれも、灰色粘質土で、S D02～06A5とは規模、方位等ともに類似する。遺構の形成はS D06A5で出土した染付け碗の時期である可能性が高い。

S D12A5 幅約32cm、深さ約5cmの溝状遺構で、埋土は暗茶褐色粘質土であった。土師器の高環脚部片が出土している。

S D13A5 幅約72cm、深さ約18cmの溝状遺構である。埋土は緑かかった灰黒色粘質土で、遺物の出土はなかった。

S K01A5 タマゴ形の平面プランを呈した土坑状遺構である。検出面では長径約2.7m、推定短径約2.1mを測るが、約50cm掘り込んだところで、直径約1m程度の円形となり、全体の深さは約1mある。埋土は大きく3層にわかれ、上層は多量の土器細片を包含した暗茶褐色粘質土で、中層は黒茶褐色粘質土、下層は青灰色粘土のブロックを含んだ黒灰褐色粘質土であった。遺物としては、6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器环身、坏蓋、高环、横瓶、甕等、土師器の小壺、土玉等がある。またフイゴの羽口の出土したことは注目される。

S K02A5 直径約1m、深さ約33cmの土坑状遺構で、北側はテラス状を呈し深さ約20cmと浅くなっている。埋土は暗茶褐色粘質土で、把手付き壺の把手破片等が出土した。

S K03A5 直径約74cm、深さ約11cmの土坑状遺構である。底面のほぼ中央には、直径約14cmの小ビットがある。埋土は暗茶褐色土で、出土した遺物には須恵器の高坏、土師器の高坏、把手付き壺の把手破片等がある。

S R01A5 トレンチの北端で検出された遺構で、等4調査区で確認された河道状遺構に連続するものと推測される。検出面からの深さは少なくとも90cm以上を測り、埋土は灰黒色系の粘質土である。出土した遺物は弥生時代から古墳時代までの土器類を中心とするが、玉縁白磁碗等の中世前期の遺物も少量認められた。

S X01A5 S R01A5の南側で幅約8.4mにわたって検出された。埋土は他地区においては遺構面の上層に堆積するマンガン粒を多く含む灰色土であることから、自然地形の凹部と推定される。出土した遺物には須恵器や土師器のほかに中世陶器の甕や擂鉢片が認められた。

S X02A5 幅約5.4mにわたって検出された。埋土はS X01A5と同様のマンガン粒を多く含む堅く締まった灰色土である。深さは約15cmで、きわだった遺物の出土はないが、S X01A5の例から推察すると自然地形の凹部に中世までの遺物を含む包含層が堆積したものと想定される。

S K03A5 幅4mにわたって検出された。検出面からの深さは約10cmで、埋土はS X01~02A5等と同様のマンガン粒を多く含む灰色土である。遺物の出土はなかった。

S X04A5 幅約4.2mにわたって検出された。深さは約5cm~10cmで、埋土はS X01~03A5と同様のマンガン粒を多く含む灰色土であった。遺物の出土はなかった。

S X05A5 幅約3mにわたって検出された。深さは約10cmで、埋土はS X01~04A5等と同様のマンガン粒を含む灰色土であった。遺物の出土はなかった。

S X06A5 幅約1m、深さ約10cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、土師器の高坏の破片等が出土した。

S X07A5 幅約86cm、長さ約8.4mの南北方向に長い遺構である。中央付近がもっとも深く、約50cmを測るが、南北両端に近づくにつれ徐々に浅くなっていく。埋土はマンガン粒を多く含んだ灰色土で、遺物の出土はなかった。

S X08A5 幅約3.2m、深さ約23cmの遺構で、断面形状は緩やかなレンズ状を呈している。埋土は暗茶褐色粘質土で、須恵器の坏身、高坏、壺片、土師器の高坏、壺片等が出土している。

S X09A5 幅約1.9m程度の不整形な遺構で、深さは約10cmを測る。埋土は暗茶褐色粘質土で、土師器の高坏、壺片、須恵器の壺片等が出土している。

B地区

A地区の北端から浜街道に至る東西方向トレンチで、管水路計画箇所にあたり、幅約1.1m、長さ約120mを測る。遺構の検出面は淡黄色粘質土で、標高は85.30m~85.40mを測り、西端のみや低い。全体に遺構密度が低く、西側部分で幅約40cm~60cm程度の小規模な溝状遺構が検出されたほかは、東側部分でA地区等検出の河道状遺構の連続部分が確認されたにすぎない。

S D01~03B5 幅約40cm~60cmの南北方向の溝状遺構で、検出面からの深さは約2cm~4cmを測る。埋土は灰色粘質土である。遺物の出土はなかった。

S R01B5 A地区で検出されたS R01A4に連続する河道状遺構で、西岸にあたる部分とみられる埋土は灰黒色系の粘質土で、遺物も同様のものが確認されている。

C地区

浜街道に近接して平行する南北方向のトレンチで、管水路計画箇所にあたり、幅約1.1m、長さ約184mを測る。遺構の検出面は標高約85.12m～85.58mの青灰色粘土層の上面を基調としたが、明確な遺構は確認されなかった。昭和初年におこなわれた浜街道建設工事の際には多数の土器や人骨等が出土したと伝わっている。⁽³⁾

2. 出土遺物

A地区（図版25～26、46）

S K01A5等から6世紀後半から7世紀前半にかけての多量の土器等が出土したほか、各遺構から、おおむね古墳時代中期以降の土器類が出土した。なおS R01A5出土遺物については、S R01G3と連続する遺構であるため、「第6章 第3調査区」で報告した。

S D01A5出土遺物（194／図版25）

土師器壺（194）：ゆるやかに外方に開く口縁部は、その外端に横位の強いナデをおこなう。口径は11.8cmを測る。頸部以下の体部外面には継位のハケ目調整をおこない、内面には粘土紐のつなぎ目を指でナデつけた痕跡が残る。口径は11.8cmを測り、胎土には小穂をまばらに含む。焼成は堅緻で、灰褐色を呈す。

S K01A5出土遺物（224～245／図版26）

須恵器壺蓋（224）：口径15.3cmを測り、天井部の約2/3程度について回転ヘラケズリをおこなう。天井部と体部との境界には弱い棱線を有し、口縁内端にも弱い凹線をもつ。胎土には多量の微細な長石粒と礫を含む。焼成は堅緻で灰色を呈す。

須恵器壺身（228～232）：（228～230）は、口径11.5cm～13.1cm、器高4.1cm～4.8cmの大型品で、（231～232）は、口径8.2cm～10.9cm、器高2.9cm～4cm弱の小型品である。大型品の（228～230）は、いずれも口縁の立ち上がりが長く、底部の約1/2～2/3程度について、反時計回りのロクロによる回転ヘラケズリをおこなう。胎土は粗く、微細～3mm程度の長石粒を含む。焼成は堅緻で灰褐色～暗灰色を呈す。小型品の（231～232）は、いずれも口縁の立ち上がりが短く、底部については、基本的にはヘラケズリをおこなわないようである。未調整の可能性が高い。胎土には多くの長石粒を含むが、微細なものしか観察されない。焼成は堅緻で、（232）にはセピア色の箇所が目立つ。

須恵器高壺蓋（225～227）：（227）は口径14.1cmを測り、半球形の天井部外面の中央には内凹の宝珠形つまみをもつ。天井部の約1/3程度にはカキ口調整がみられ、その下部には、別個体の一部が2箇所で接着している。（225～226）は、それぞれ内凹と内凸の宝珠形つまみを有するもので、（226）の形状などからは、当該遺構出土の他の須恵器より、時期的に新しい壺蓋の可能性が指摘される。しかし口縁部やそれに伴う壺身などは出土しておらず、現状では他にそれと判断できる要素がないため、ここでは一応（227）と同様のものとして理解しておく。焼成はいずれも堅緻で

灰色～青灰色を呈すが、(227) の断面はセピア色である。いずれの胎土にも微細な長石粒が目立つ。

須恵器高坏 (233～234)：(233) は坏部で、口径は11.6cmをはかる。口縁部の立ち上がりが短く、プロポーションは坏身の小型品 (231～232) に類似する。(234) は脚部で、短脚1段の方形4方透かしである。いずれの焼成も堅緻で灰色を呈し、胎土には微細な長石が目立つ。

須恵器横瓶 (235)：口径8.6cmの横瓶で、体部にはカキ目調整を施す。頸部には縦位に「一」状のヘラ記号 (?) が認められる。焼成は堅緻で灰色を呈し、胎土には微細な長石粒が多く含まれる。

須恵器甕 (236～245)：凸面にはいずれも木目に直交して平行線文を彫り込んだ叩き板の痕跡を残すものである。(236～237) の外面の平行線文は直交する木目が浮き出で、擬格子文状に変化している。(244～245) の外面には横位のカキ目が施される。(236～239、242～244) の内面には同心円文の当具痕をそのまま残すが、(240～241) についてはナデにより消去している。(245) の内面の当具痕は通常の同心円ではなく、円の中心からあたかもタイヤのスポークのように、放射状の線が拡がるものである。この線は同心円を正確に等分することを意識して彫られているようで、単なる原体の傷である可能性は低い。「車輪文」とよばれるものになるだろう。いずれの胎土にも微細な長石粒が多く含まれ、焼成は (238～239) が薰し焼き風でややあまく灰黒色であるほかは、堅緻で青灰色を呈す。

土師器壺 (246)：口縁外端に弱い面をもち、口径は9.8cmを測る。器表は磨耗しており、細部の調整等については明らかでない。胎土は小砾を含んで粗く、焼成は堅緻で褐色を呈している。

土師器土玉 (247～248)：最大径2.9cm～3.1cm、孔径は8mm～9mmで、重さは約15g～17.5gをはかる。いずれにも多くの指頭圧痕が観察され、(248) の底面には木目状の圧痕が残る。いずれも堅緻で (247) は褐色、(248) は灰黒色を呈す。

S K 03 A 5出土遺物 (202／図版25)

須恵器高坏 (202)：底径9.2cmを測る短脚透かしの脚部で、器部の外面には1条の凸帯が認められる。内面は形成時に指による縦位のナデつけがおこなわれているため、不規則な6角状に変形している。焼成は堅緻で灰色を呈し、表面に黒色粒が浮く胎土には微細な長石粒が多量に含まれている。

S X 01 A 5出土遺物 (203～206／図版25)

須恵器坏身 (203～204)：いずれも口縁の立ち上がりが長い坏身と推定される。(204) の底部外面は反時計回りのロクロにより、受け部の近くまで回転ヘラケズリされている。焼成はいずれも堅緻で灰色を呈し、胎土には微細な長石粒を多量に含んでいる。

須恵器コップ型土器 (206)：外面には櫛描きの波状文が施され、その上段には凸線に狭まれた凹線があり、その下には1条の凸線がめぐる。底部はいわゆる平底で、体部の立ち上がり近くには縦位のヘラケズリ状調整および環状把手の接合部分が残る。焼成は堅緻で青灰色～灰色を呈し、胎土は微細な長石を含むがおおむね精良である。

須恵器甕 (205)：外面には木目の直交して浮き出る平行線文叩きを施した後、横位のカキ目調整

をおこなう。内面には同心円文の当具痕をそのまま残す。胎土には微細な長石粒を多量に含み、堅緻に焼成され青灰色を呈す。

S X 06 A 5出土遺物（198～199／図版25）

土師器高坏（198～199）：（198）は坏部、（199）は脚部片である。（199）は脚柱と裾部との境界が明瞭で、外面には縁位のミガキ状調整が、裾部の内面にはハケ目状調整が観察される。いずれも胎土は精良で、小穢等はほとんど含まない。焼成は堅緻で淡い橙色を呈す。

S X 08 A 5出土遺物（195～197／図版25）

須恵器高坏（195）：体部と底部との境界に明瞭な段をもつ坏部で、外面には2条の凸帯を有し、その下部には波状文が施される。底部の大部分は時計回りのロクロによるヘラケズリが施される。胎土には多量の長石粒を含み、堅緻に焼成され灰色を呈す。

須恵器甕（196）：口縁外端に明瞭な面をもち、外面には2条の凸帯とそれぞれの下段に櫛描きの波状文を有す。堅緻に焼成され、表面は黒色、断面はセピア色を呈す。胎土には微細な長石粒が多量に含まれる。

S X 09 A 5出土遺物（200～201／図版25）

須恵器甕（201）：外面には格子状の叩き締め圧痕をのこし、内面はナデにより完全に無文化されている。胎土には3mm程度を最大とする長石粒が大量に含まれている。焼成は堅緻で、表面は濃厚な青灰色、断面はセピア色を呈す。

土師器高坏（200）：体部と底部との境界に弱い段を有す口径13.4cmの坏部で、口縁から体部にかけての全面を横位のナデにより調整し、口縁外端には弱い面をもつ。脚部の剥離痕などから、坏部と脚部の接合は脚部の内側から粘土を詰め込んでおこなわれているものと推測される。焼成は堅緻で灰褐色を呈し、胎土には小穢等の混入が少なく精良である。

B地区出土遺物（207～208／図版25）

遺物の出土は希薄で、S R 01A 5に連続する S R 01B 5より少量の遺物が出土したのみである。

S R 01B 5出土遺物（207～208／図版25）

磨石類（207）：全体の約1/2が残存し、残存長4.5cm、幅8.7cm、重さ290gはある。表面および側面に敲打痕が認められ、側面と裏面には磨面がある。石の色調は灰色を呈す。

黒色土器碗（208）：断面二等辺三角形状の高台を有し、高台径は7.2cmを測る。焼成は堅緻で全体に褐色を呈すが、内面は黒化処理されている。胎土には小穢等は含まず、精良である。

C地区出土遺物（209～223／図版25）

遺構は確認されなかったが、伝承を裏付けるように、古墳時代以降の遺物が少量出土した。

須恵器坏蓋（209、211）：（211）は体部と口縁部の境界に明瞭な稜線を有すもので、口縁内端には凹線をもつ。天井部は半球形と推定され、稜線の近くまで回転ヘラケズリをおこなっている。

（209）は内凹の宝珠形つまみを有するもので、天井部には反時計回りのロクロによる回転ヘラケズリがおこなわれている。2者の胎土はいずれも微細な長石を多量に含んでおり、焼成は堅緻である。色調は（209）の表面が灰色、断面がセピア色。（211）は全体に灰色を呈すが、外面にはセ

ピア色の部分が目立ち、自然釉の付着もみられる。

須恵器坏身 (212)：貼り付けによる高台をもつ坏身で、高台は小振りで退化したものである。焼成は堅敏で青灰色を呈し、胎土には微細な長石粒が目立つ。

須恵器高坏(210)：短脚1段の方形4方透かしの高坏で、底径は9.2cmを測る。焼成は堅敏で灰色を呈す。胎土には微細な長石粒が多く含まれる。

須恵器甕(213～217)：いずれも凸面に、木目に直交する平行線文の叩き縮めを施すものであり、(215～217)の凹面には、同心円文の当具痕がそのまま残っている。(213～214)の凹面については同心円文の消去がおこなわれており、(214)にはわずかな文様の痕跡が残る。(217)の外面にはカキ目が施されている。いずれの胎土にも多量の長石粒が観察される。焼成はいずれも堅敏で灰色～青灰色を呈すが、(213)の断面はセピア色である。

平瓦(218)：凸面に長方形状の格子叩きを施すもので、凹面には密な布目压痕がそのまま残る。胎土には多量の長石礫の混入がみられる。酸化炎焼成により橙色を呈している。

土師器皿(219)：口径は8cmを測る。器表は全体に消耗しているが、形態や法量、あるいは口縁外端の押しナデによる面などの諸点から、口縁部1段ナデ手法の土師器皿と推定される。焼成はあまく灰褐色を呈し、胎土は小礫等をほとんど含まない精良なものである。

陶器碗(220)：削り出しによる、径4.9cmの高台をもつ瀬戸の平碗で、内外面には淡い緑色の釉が施される。焼成は堅敏で、灰褐色を呈す。

陶器擂鉢(223)：内面にはややまばらな原体5条の捺目が施され、外面には横位のナデが観察される。焼成はきわめて堅敏で、セピア色かかった暗灰色を呈す。

磁器碗(221～222)：いずれも片切り彫りの文様が認められる青磁碗である。(221)の釉調は透明度の高いエメラルド色で、外面には蓮弁文が観察される。(222)の釉調も基本的には(221)と同様だが、やや色が濃く多数の質入が認められる。径4.9cmの高台は、内面の削り込みが浅い。

3. 小 緒

当該調査区では擾乱、各種の湿気抜き、および灰色粘質土で埋まる東西方向の素掘り小溝群等が隨所で見られ、遺構の遺存状況は良くなかった。しかしながらS A01A5をはじめとして、掘立柱建物の存在をうかがわせる多数のピットや、SK01A5のような井戸の可能性もある土坑状遺構が検出されたことは、この付近が集落遺跡の一部を占めていた可能性を示唆している。これらの遺構について、出土した遺物をみると、おおむね古墳時代中期の6世紀前後から古墳時代でも終わりに近い7世紀前半頃までにかけてのものが多いようである。またSK01A5からはフイゴの羽口が出土しており、当該地における鍛冶関連遺構の存在をうかがわせている。(北村)

第9章 結語

今回の調査の結果、掘立柱建物、土坑状遺構、溝状遺構、ピット状遺構等集落遺跡の存在を示唆する各種の遺構が検出され、古墳の周溝の可能性もある S D08G3なども確認できた。また河道状遺構や沼地状遺構等が検出され、集落の営まれた微高地の範囲もおおよそ推測できるようになったと思われる。これらの遺構の営まれた時期については、遺構からまとめて出土した遺物に限ってみてみると、SK01C4の出土遺物を最古とし、SK01A5の出土遺物を最新とする時間幅におさまるようである。つまり SK01C4出土遺物は畿内の庄内式併行期に比定されるものであり、SK01A5出土遺物については、飛鳥地域の飛鳥寺下層式～飛鳥I式併行期に比定されるものである。

これらから、今回の調査で確認できた御倉遺跡での生活期間は、おむね古墳時代前期の4世紀頃から古墳時代でも終わりに近い7世紀前半までと推定される。そしてこの期間内でも中心となる時期は、遺物の出土量からいえば SX02B4出土遺物に代表される大阪陶邑編年のMT15型式併行期前後の6世紀前半である可能性が高い。

一方、遺跡の性格については、

これまでの調査において、大型の掘立柱建物や、時期的には降るが「郡家有」「三宅」などの墨書き器が確認されていたことから、公的な施設や有力氏族の居住地の可能性が指摘されてきた。今回の調査でも、SK01A5からフイゴの羽口の出土がみられ、当遺跡で鍛冶のおこなわれた可能性を推測し得る状況となった。これまでの指摘をわずかながらも補強し得る材料となるだろう。

また、量的には少ないものの、SR01G3などの河道状遺構や沼地状遺構、またSX02C2、SD04D4および遺構面直上の堆積土などから、縄文晩期の土器片、礫石錐、磨石類、あるいは前期を含む弥生時代の土器片や磨製石斧、奈良時代から鎌倉時代にかけての土器類、近世初頭の土器類などが出土している。これらの遺物のなかには、これまでの調査で知られてきた御倉遺跡の内容を補強するものもあるが、同時に隣接地に時期も性格も異なる未発見の遺跡の存在をうかがわせるものも多い。

(北村)

註)

(1)別名「芦浦觀音寺道」ともよばれ、「佐々木街道」とは地元での呼称である。北は現在の野洲町付近までつづいており、戦前は陣屋の移動等にも使用されたらしい。「佐々木」の名称は中世の近江守護・佐々木氏（戦国時代の六角氏、京極氏）を思わせるが、その由来については明らかでない。



第4図 遺構分布の概要

(2)宮崎幹也氏は、蒲生町市子・堂田遺跡等検出の素掘り小溝群について「小区画に規制された耕作痕」であるとして、これにみえる「条里に規制された方位を示すものと、異なった方位を示すもの」の2者の存在は「条里坪内の小区地割が、地形に規制されていることに応じている」と考えている(『紀要 第2号』)。当該調査区で検出された多数の素掘り小溝群が、宮崎氏のいうものに該当するか否かについては、必ずしも明らかでないが、その可能性は高いうと思われる。

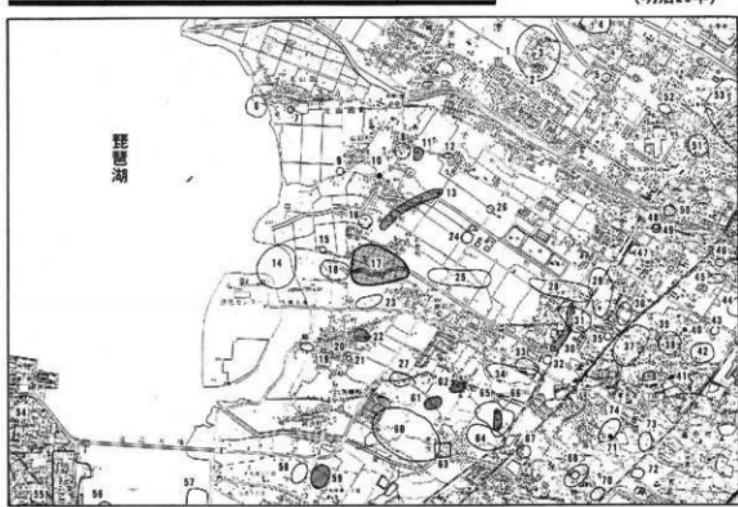
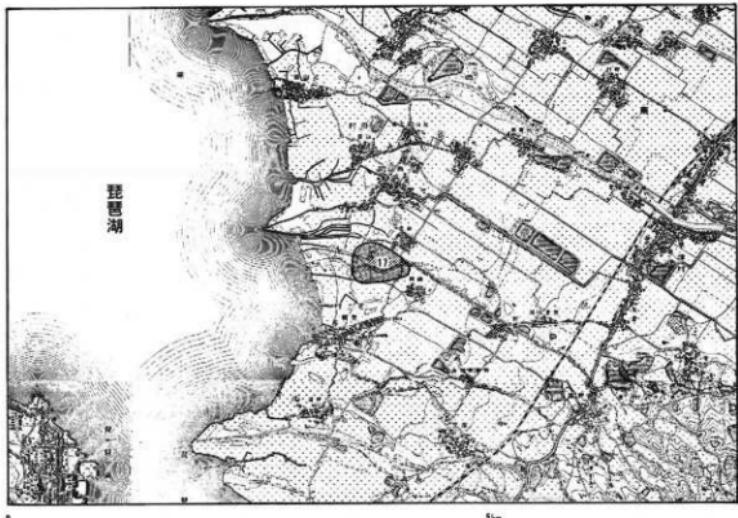
(3)中村良雄氏の御教示による。氏は浜街道建設工事にも参加されている。

引用・参考文献

- 滋賀県教育委員会『昭和60年度 滋賀県遺跡地図』1986年 滋賀県教育委員会
田辺 昭三 他 『陶邑古窯群1』 1968年 平安学園考古学クラブ
田辺 昭三 『須恵器大成』 1981年 角川書店
西 弘海 『土器様式の成立とその背景』 1986年
花塚 信雄 『4.2 須恵器について』『金沢市畠山・寺中遺跡』金沢市文化財紀要42 1984年 金沢市教育委員会他
宮崎 幹也 『条里遺構の調査と現状』『紀要 第2号』 1989年 勅滋賀県文化財保護協会
横山 浩一 『須恵器にみえる車輪文印きの起源』『九州文化史研究所紀要 第26号』1981年 九州文化史研究所

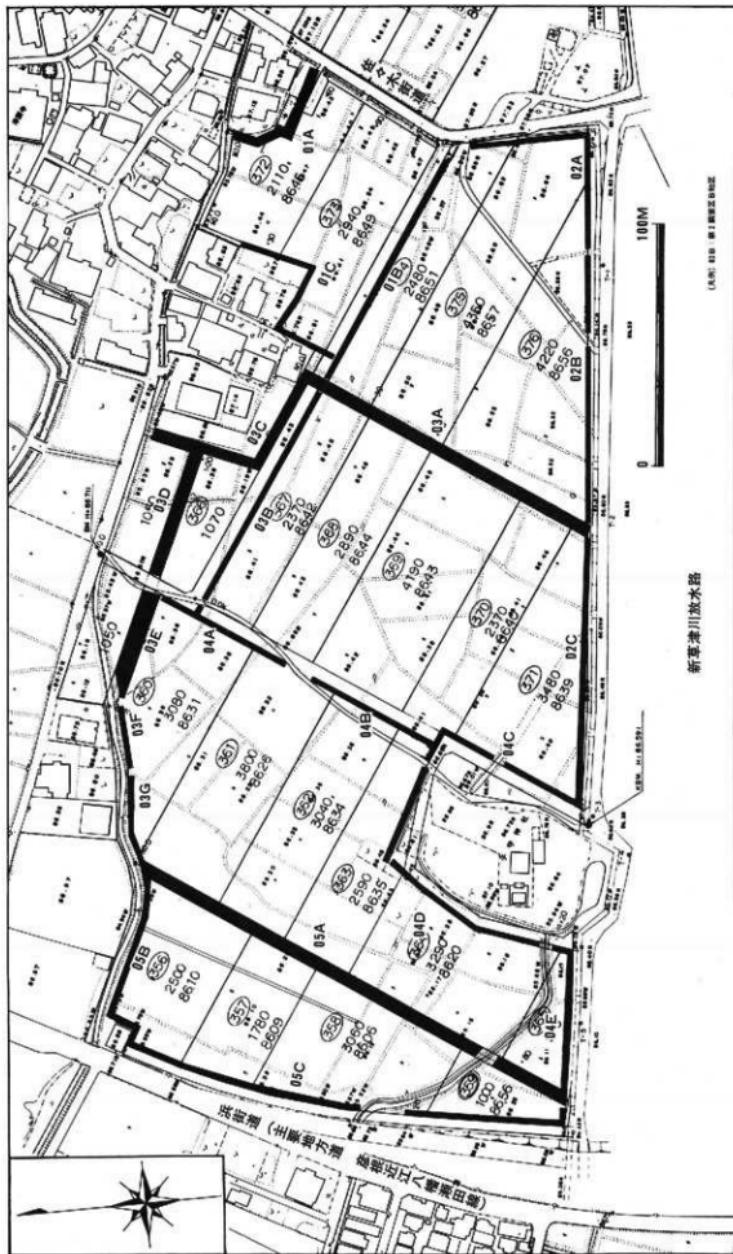
〈御倉遺跡調査報告関係〉
小宮 猛幸 『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(1)』草津市文化財調査報告11 1986年 草津市教育委員会
藤井 聰 『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(II)』草津市文化財調査報告13 1988年 草津市教育委員会
谷口 智樹 『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(III)』草津市文化財調査報告15 1989年 草津市教育委員会
三宅 弘 他 『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報1—御倉・大萱一』1986年 滋賀県教育委員会、勅滋賀県文化財保護協会
三宅 弘 他 『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報2—御倉・大萱一』1987年 滋賀県教育委員会、勅滋賀県文化財保護協会
三宅 弘 『草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報3—御倉・大萱一』1988年 滋賀県教育委員会、勅滋賀県文化財保護協会
酒造 豊 『「都家」の墨書き器』『滋賀文化財だより』No83 1984年 勅滋賀県文化財保護協会
酒造 豊 『草津川改修工事に伴う調査—近世の排水路と水田跡—(上)』1984年『滋賀文化財だより』No91 勅滋賀県文化財保護協会
酒造 豊 『草津川改修工事に伴う調査—近世の用水路と水田跡—(下)』1985年『滋賀文化財だより』No98 勅滋賀県文化財保護協会

図 版

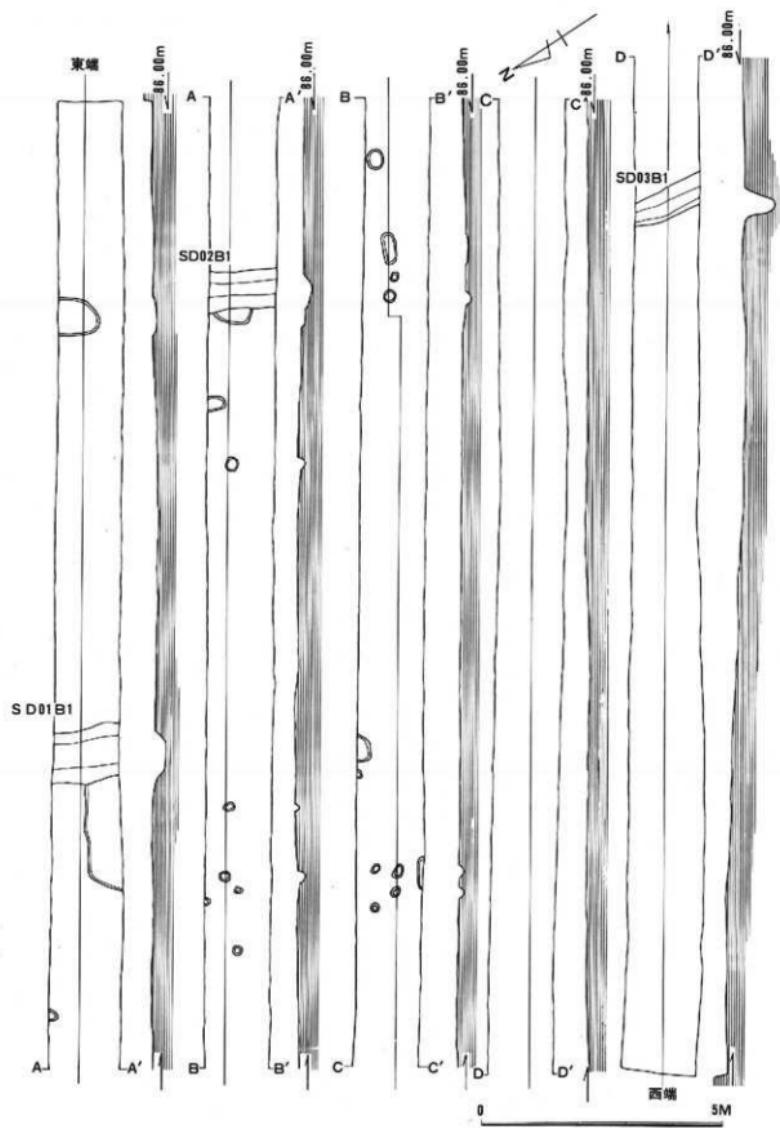


1. 上ノ瀬遺跡 [古瀬～平瀬]。
2. 上ノ瀬遺跡 [古瀬]。
3. 正対寺遺跡 [古瀬]。
4. 宝篋遺跡 [宝篋～御食]。
5. 野村光光中瀬遺跡 [平安]。
6. 北山御前瀬遺跡 [御前・御食]。
7. 善安寺南御前瀬 [御前]。
8. 山田瀬遺跡 [御前・御食]。
9. 大石の松神社古瀬 [古瀬]。
10. 五百石古瀬 [古瀬]。
11. 金剛寺古瀬 [古瀬]。
12. 金剛御前瀬 [平安]。
13. 門山古瀬 [古瀬]。
14. 美濃御前瀬遺跡 [御食～]。
15. 金剛御前瀬 [古瀬]。
16. 金剛御前瀬 [古瀬]。
17. 金剛御前瀬 [古瀬]。
18. 金剛御前瀬 [古瀬]。
19. 金剛御前瀬 [古瀬]。
20. 石渡寺房御前瀬 [古瀬]。
21. 大久保寺御前瀬 [古瀬]。
22. 御前瀬 [古瀬]。
23. 御前瀬 [古瀬]。
24. 御前瀬 [古瀬]。
25. 御前瀬 [古瀬]。
26. 中兵衛瀬 [古瀬]。
27. 中ノ瀬遺跡 [平安]。
28. 御前瀬 [古瀬]。
29. 御前瀬 [古瀬]。
30. 美之瀬 [古瀬]。
31. 大坂御前瀬 [古瀬]。
32. 金原草御前瀬 [古瀬～御食～平瀬]。
33. 片知御前瀬 [古瀬]。
34. ヘソ瀬 [古瀬]。
35. 御前瀬 [古瀬～平瀬]。
36. 南平瀬 [古瀬～平瀬]。
37. 矢作口遺跡 [古瀬・奈良・平安]。
38. ヘソ瀬 [古瀬]。
39. 御前瀬 [古瀬]。
40. 御前瀬 [古瀬]。
41. 御前瀬 [古瀬]。
42. 大河原瀬 [古瀬～平瀬]。
43. 大河原瀬 [古瀬～平瀬]。
44. 御前瀬 [古瀬～平瀬]。
45. 下ノ瀬遺跡 [古瀬・平安]。
46. 御前瀬 [古瀬]。
47. 御前瀬 [古瀬]。
48. 御前瀬 [古瀬]。
49. 御前瀬 [古瀬]。
50. 御前瀬 [古瀬]。
51. 御前瀬 [古瀬]。
52. 横尾瀬 [古瀬～平瀬]。
53. 中央瀬 [御食～平安]。
54. 御前瀬 [御食～平安]。
55. 諏訪御前瀬 [御食]。
56. 丹生吉古瀬 [古瀬]。
57. 大江戸瀬 [御食～平安]。
58. 御前瀬 [御食～平安]。
59. 野村小野山御前瀬 [御食]。
60. 西内瀬 [古瀬～平瀬]。
61. 南豊内瀬 [古瀬]。
62. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
63. 神寺御前瀬 [古瀬～御食]。
64. 三之瀬 [古瀬]。
65. 御前瀬 [古瀬]。
66. 鶴ヶ若瀬 [古瀬～平瀬]。
67. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
68. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
69. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
70. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
71. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
72. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
73. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
74. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
75. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
76. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
77. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
78. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
79. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
80. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
81. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
82. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
83. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
84. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
85. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
86. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
87. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
88. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
89. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
90. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
91. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
92. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
93. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
94. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。
95. 五郎瀬 [古瀬～平瀬]。

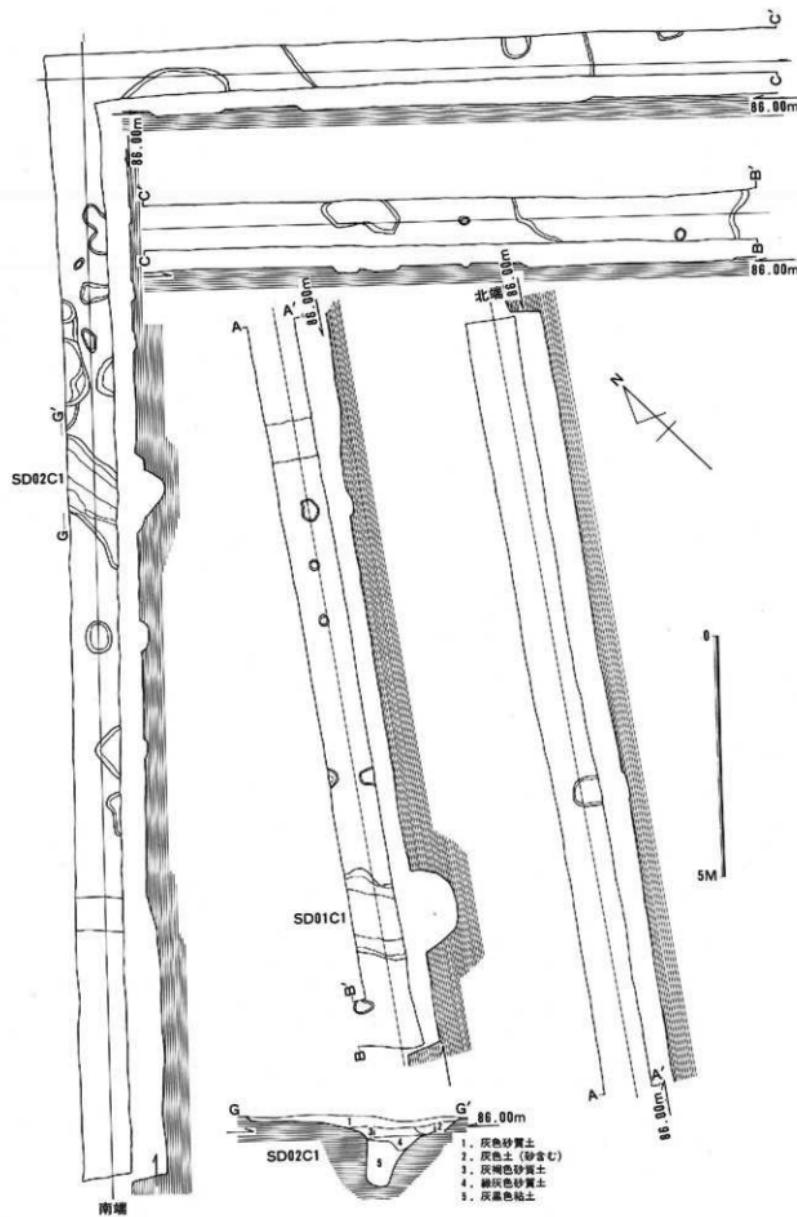
御前瀬遺跡の位置と周辺遺跡の分布 (1:50,000)



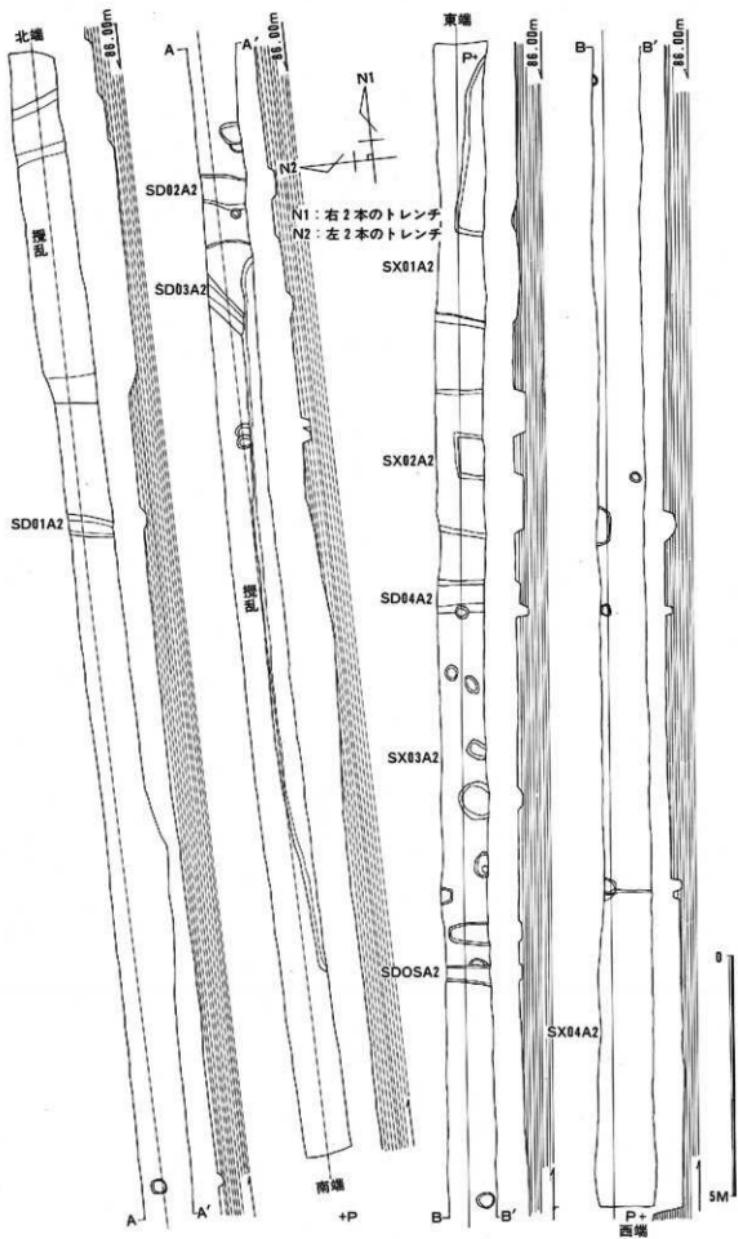
トレンチ配置図 (1:2,000)

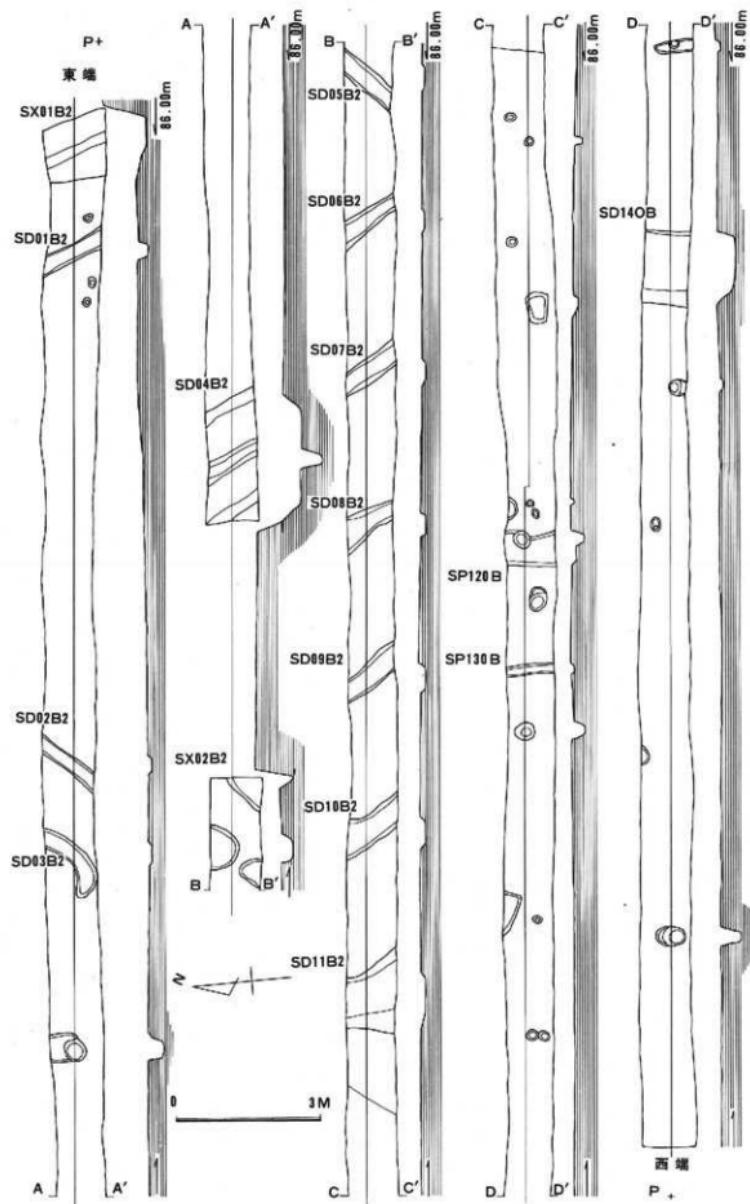


B地区 第1調査区検出遺構(1) S = 1/100



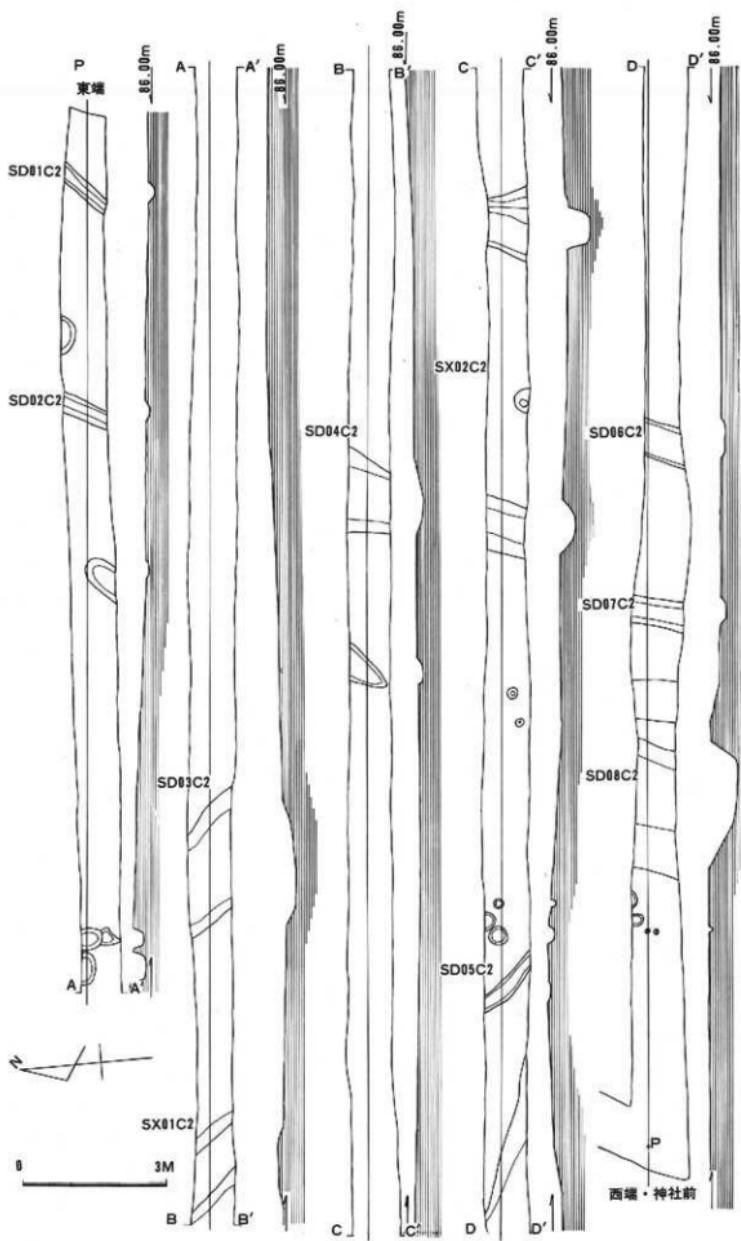
C地区 第1調査区検出遺構(2) S=1/100



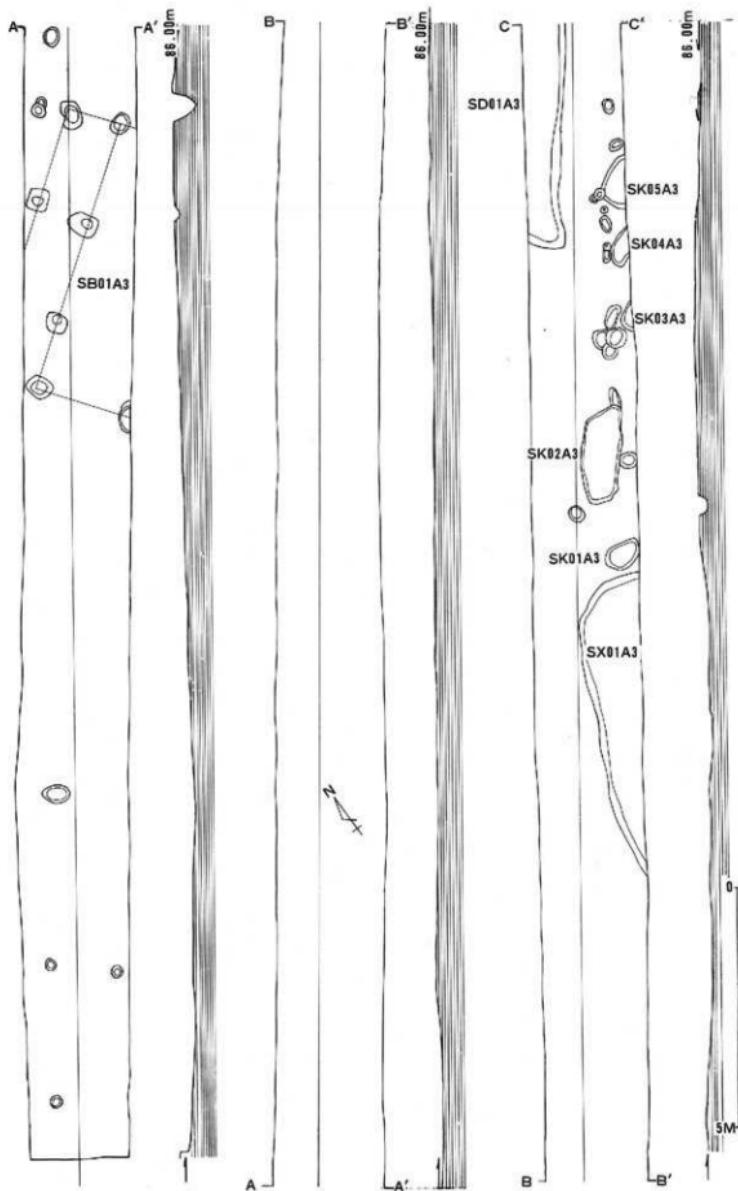


B地区 第2調査区検出遺構(2)

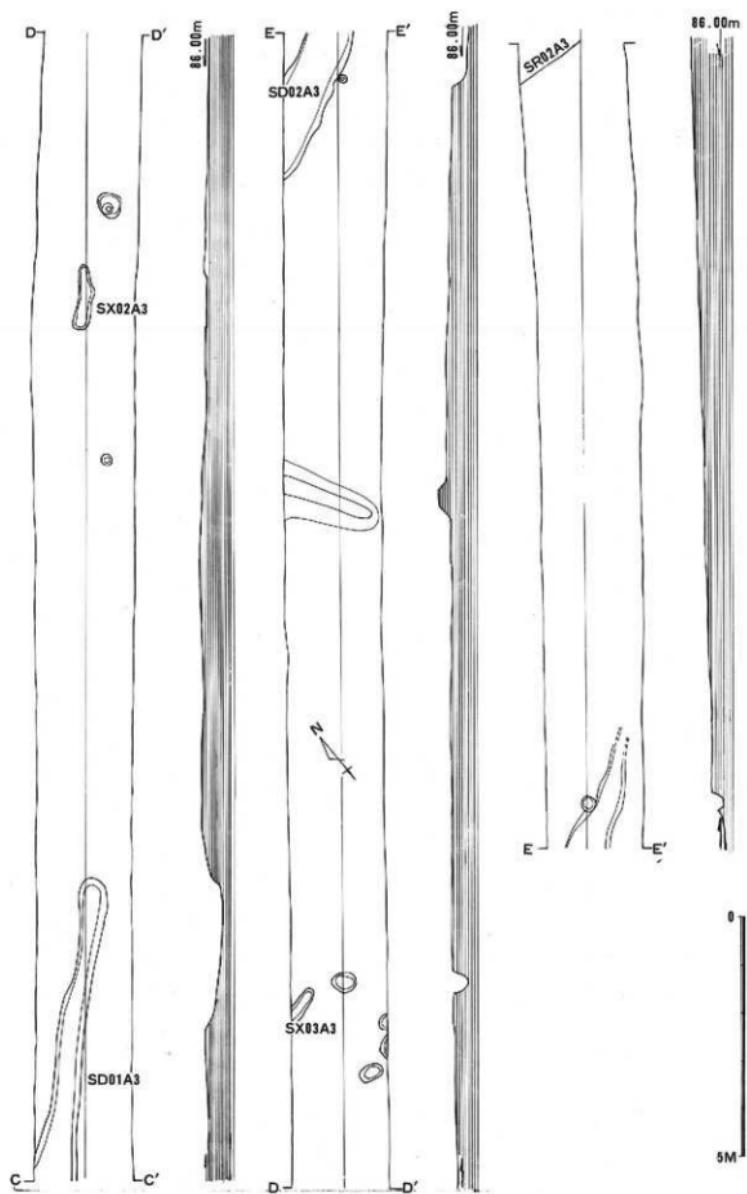
図版七 遺構



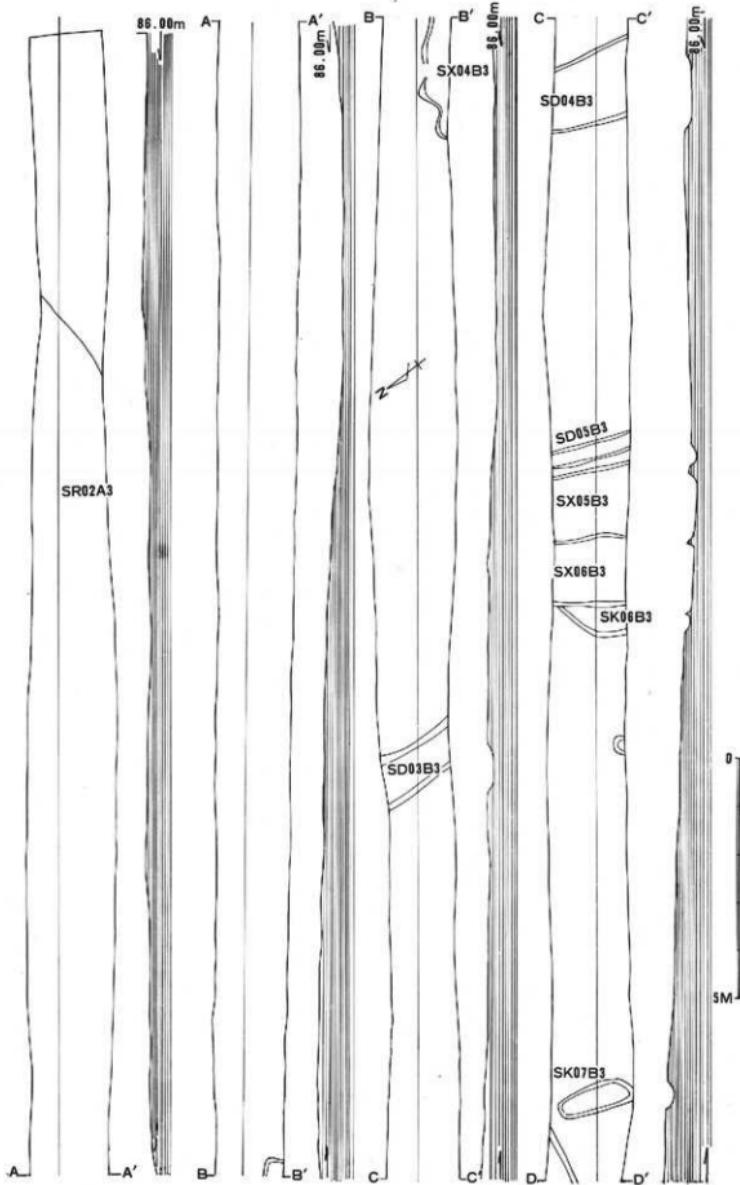
C地区 第2調査区検出遺構(3) S=1/100



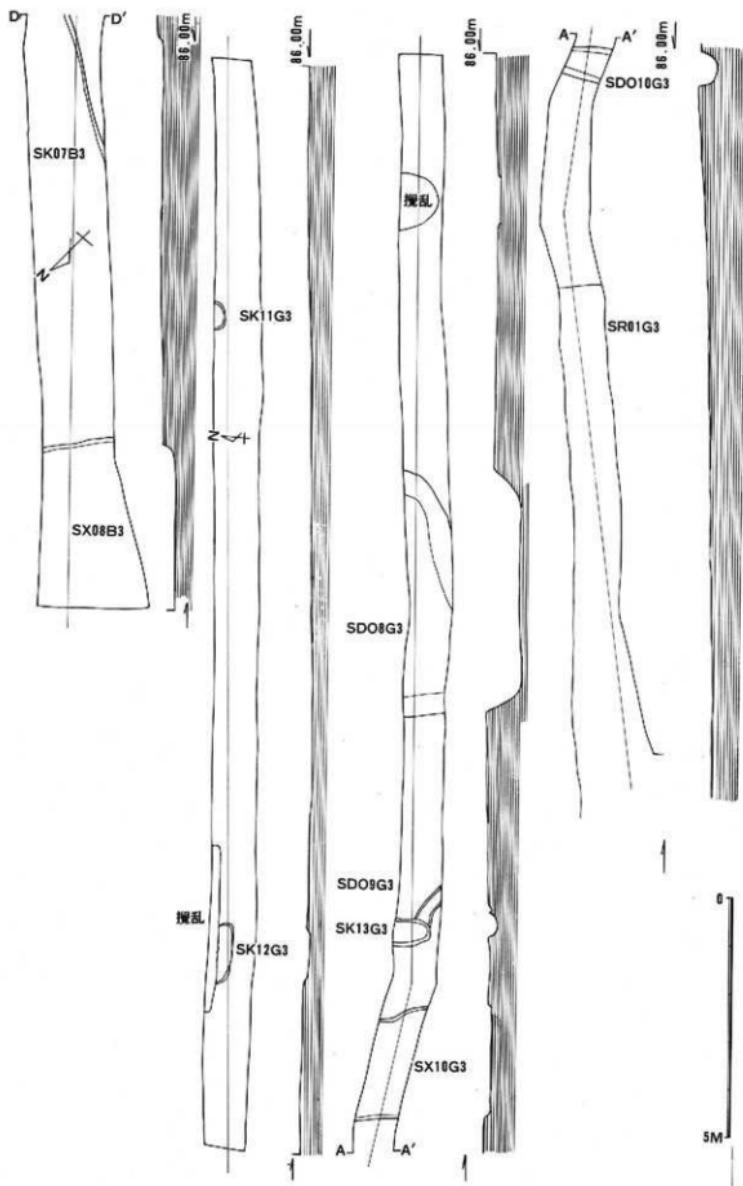
A地区 第3調査区検出遺構(1) S=1/2



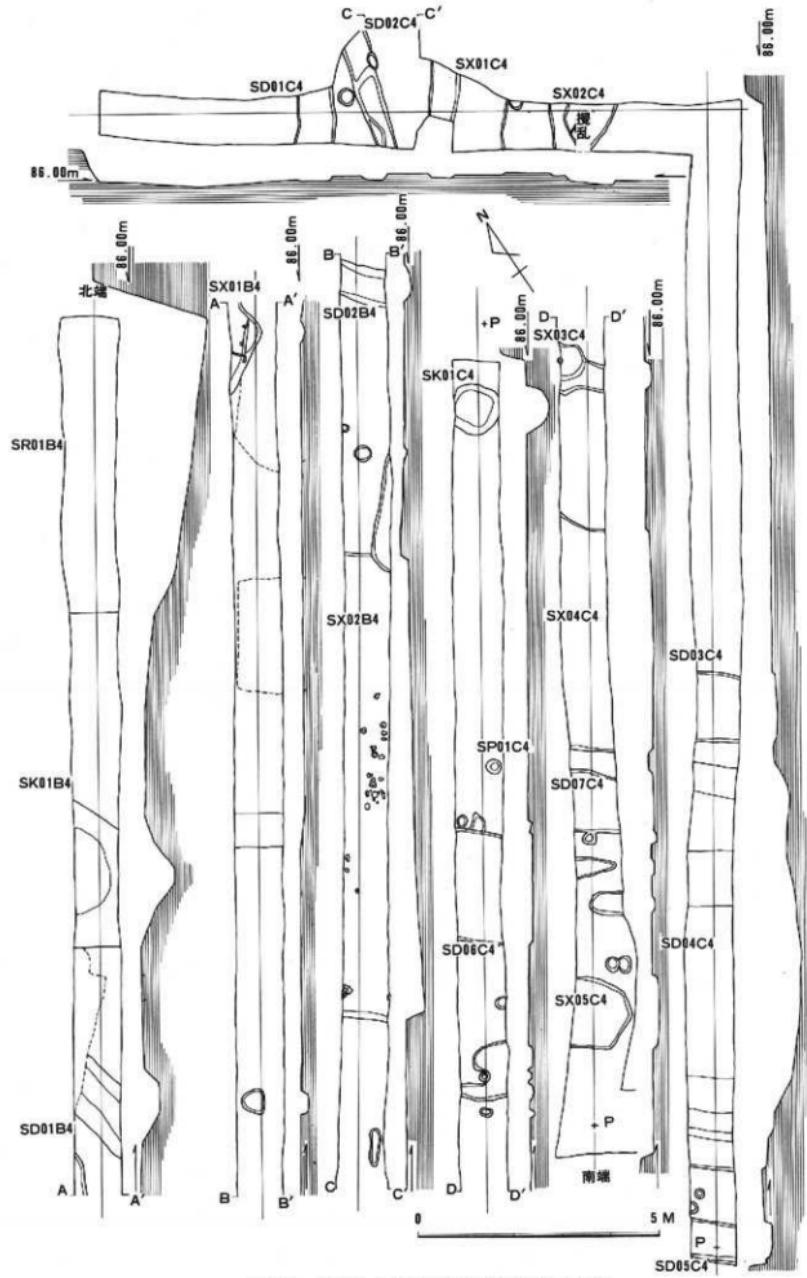
A地区 第3調査区検出遺構(2) S=1/2



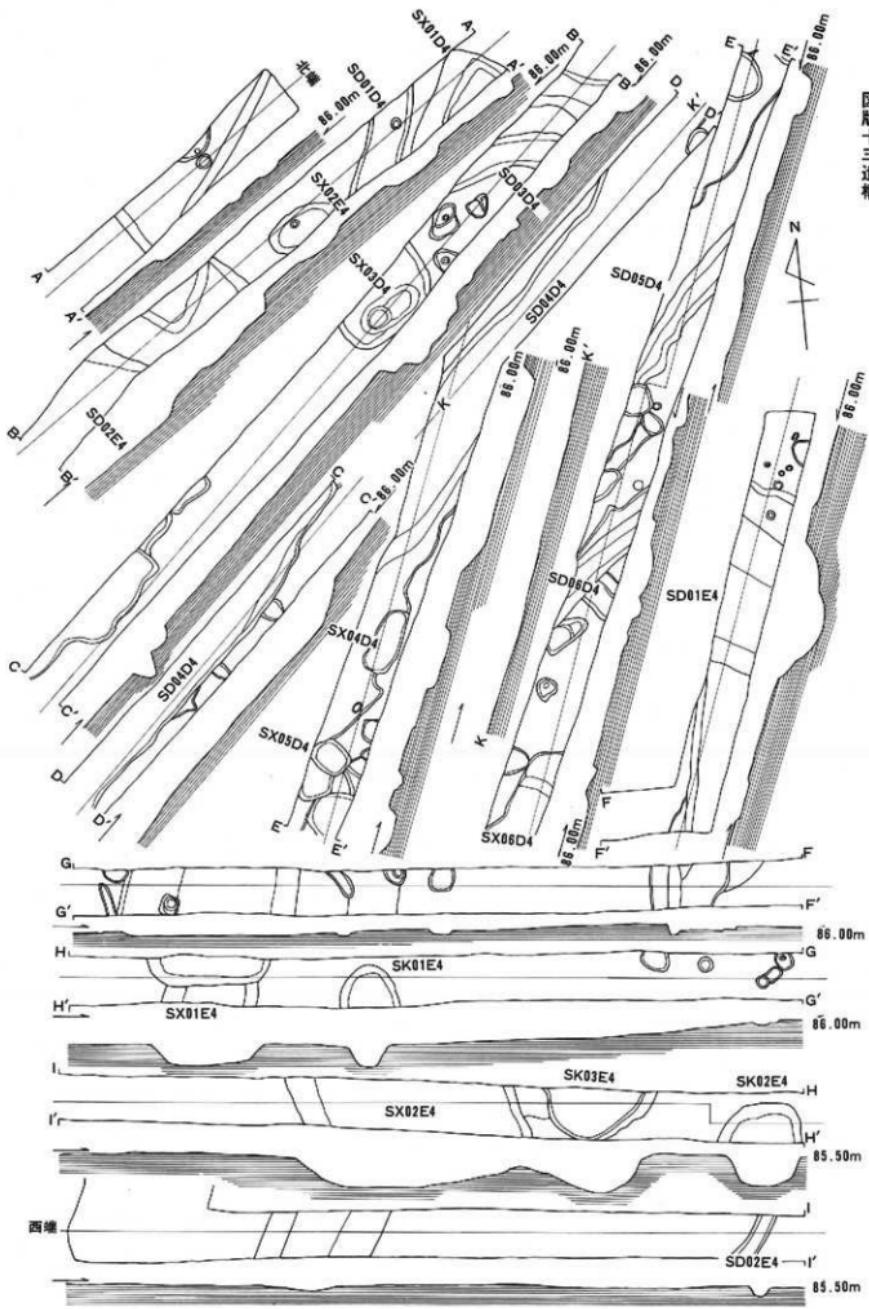
B地区 第3調査区検出造構(3) S=1/2



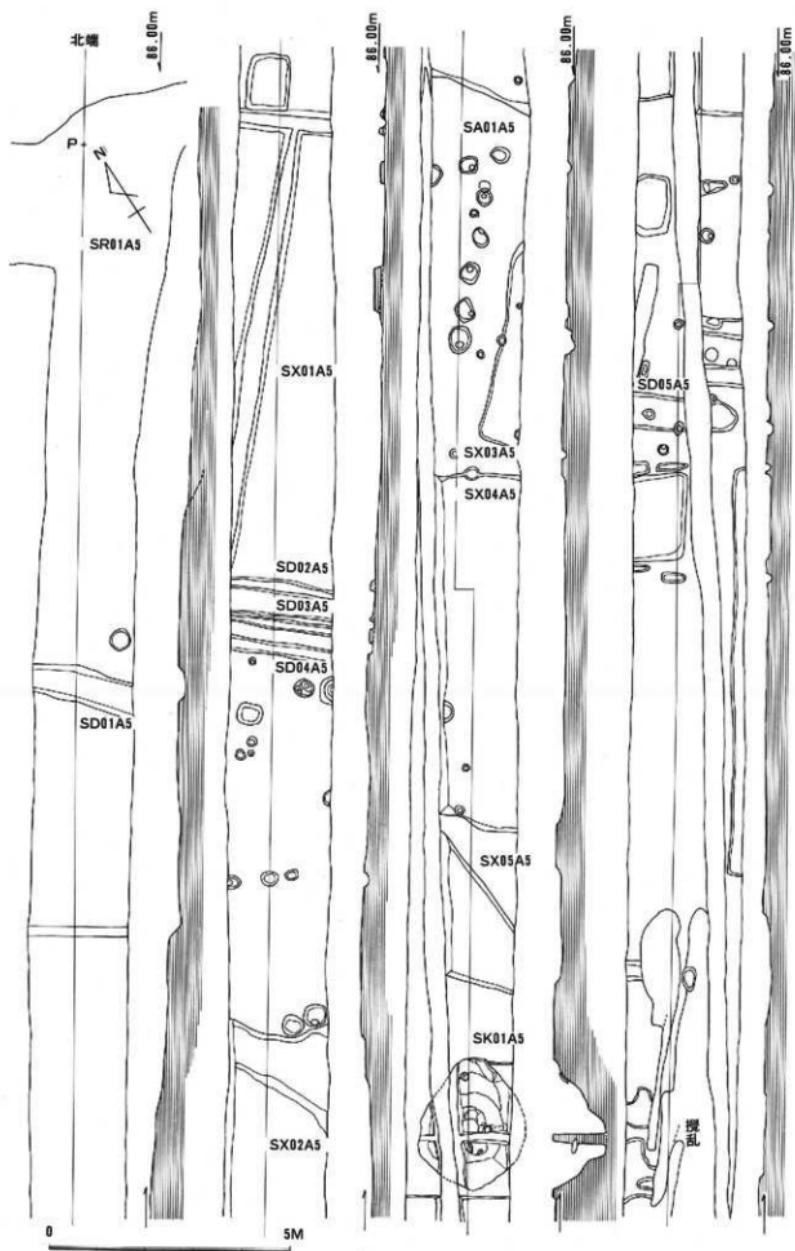
B・F・G地区 第3調査区検出遺構(4) S=1/2



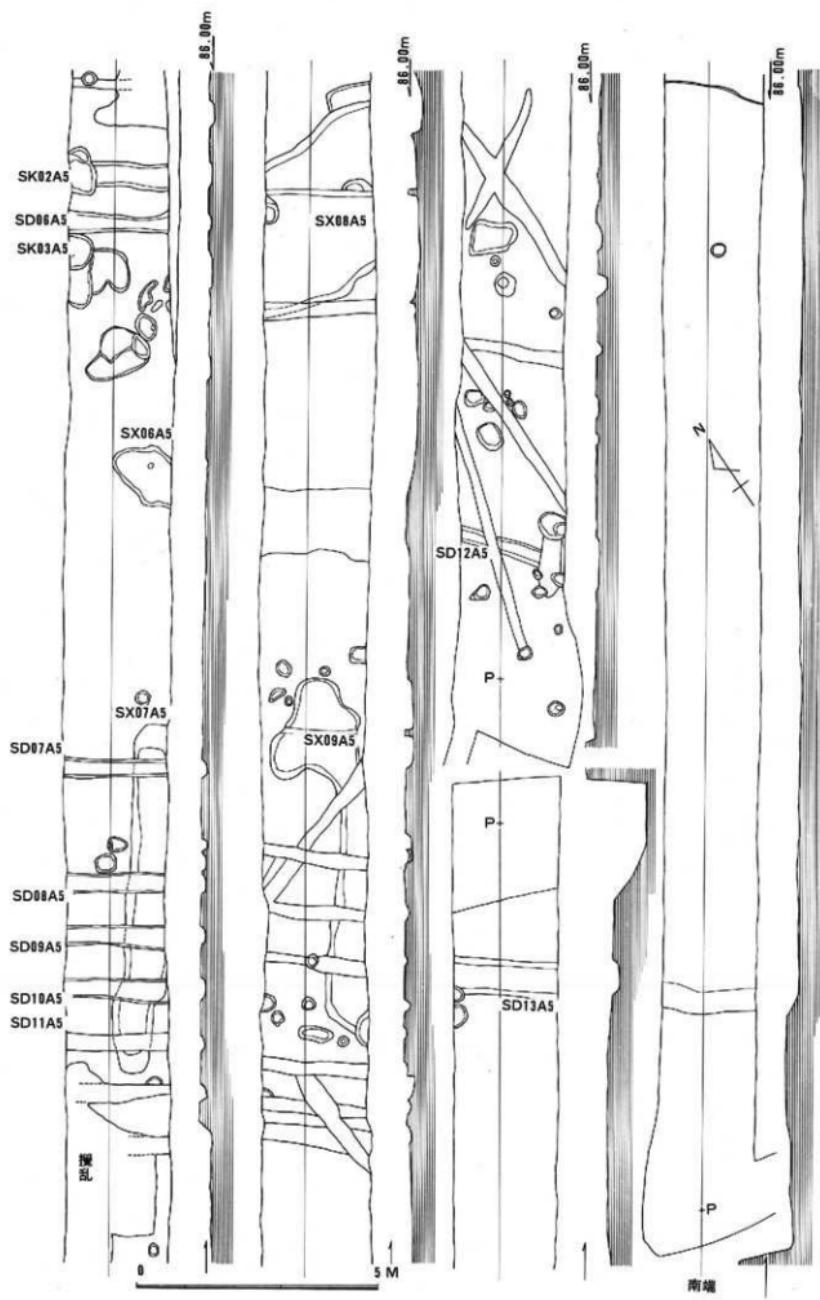
B地区、C地区 第4調査区検出遺構(1) S = 1/100



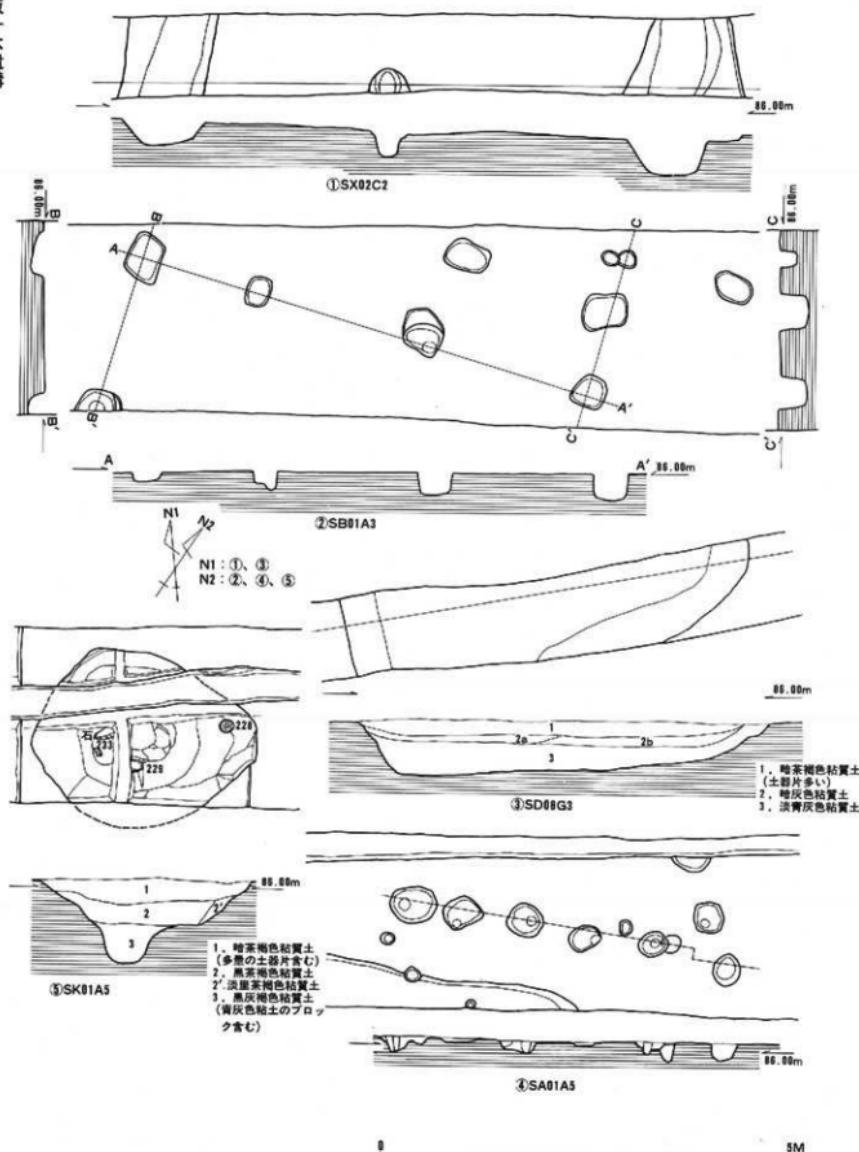
D地区、E地区 第4調査区検出遺構(2) S=1/100



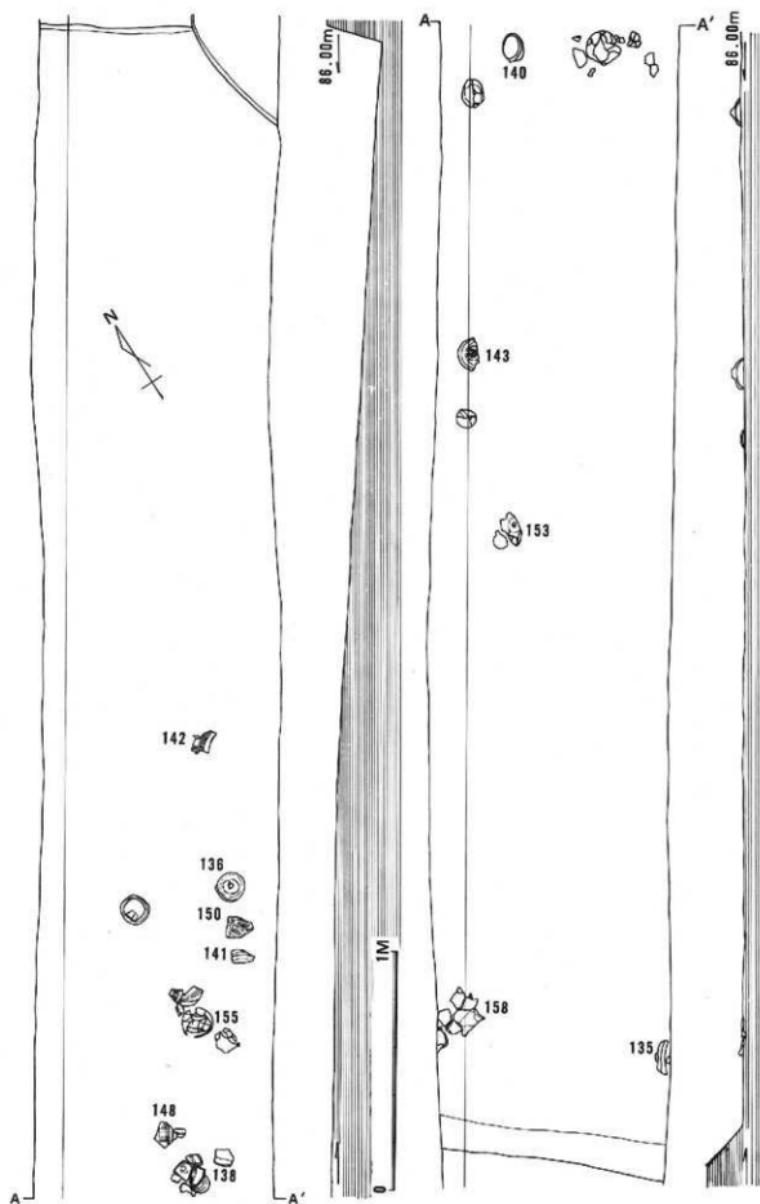
A地区北側 第5調査区検出遺構(1) S=1/100

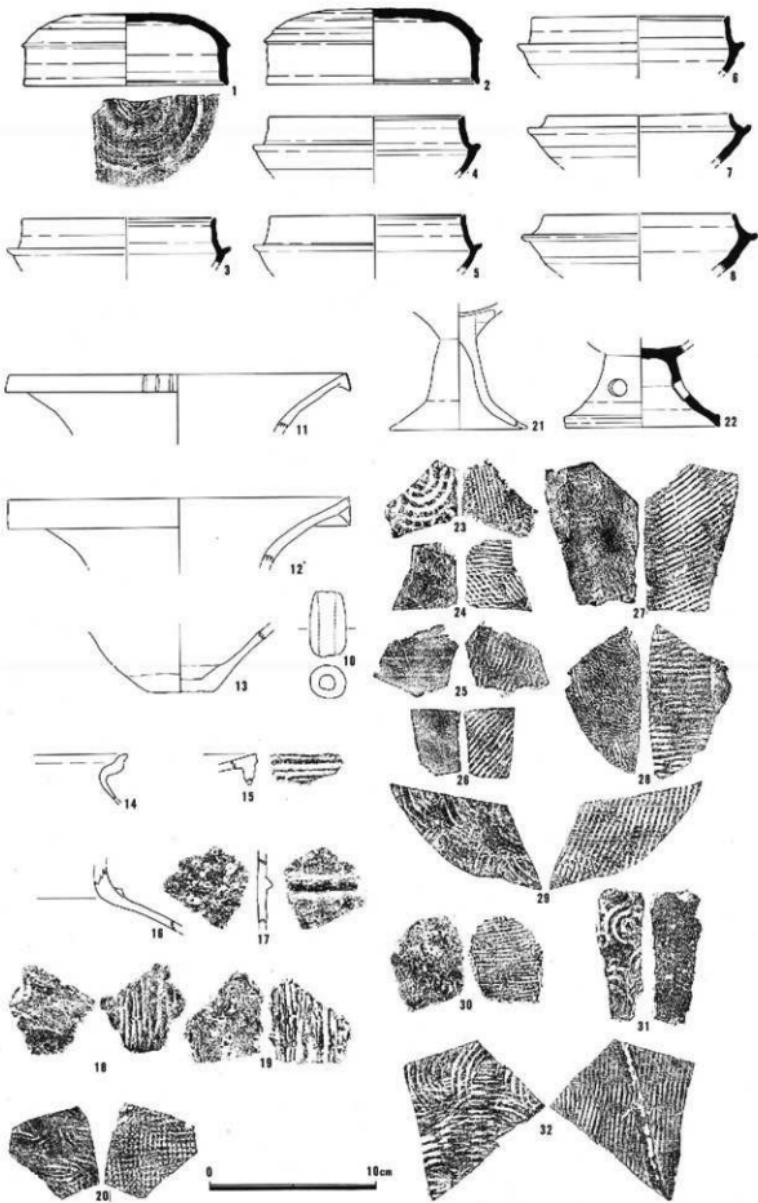


A地区南側 第5調査区検出遺構(2) S=1/100

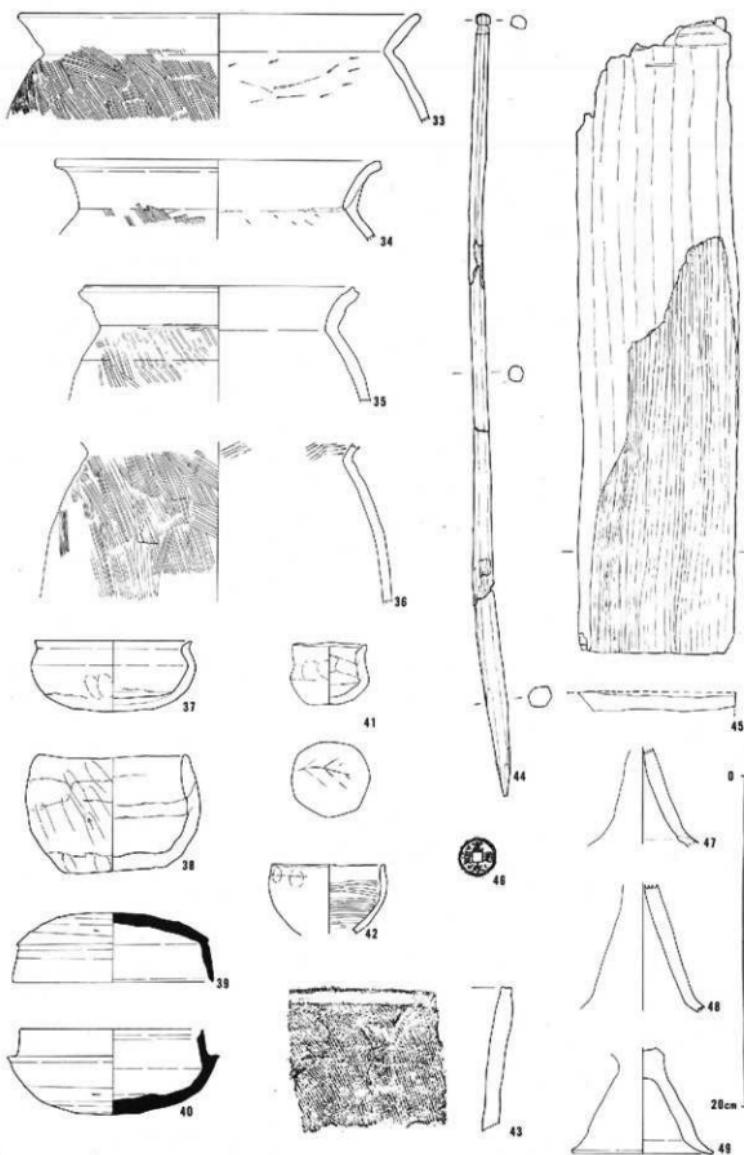


遺構の詳細(1) S = 1/60

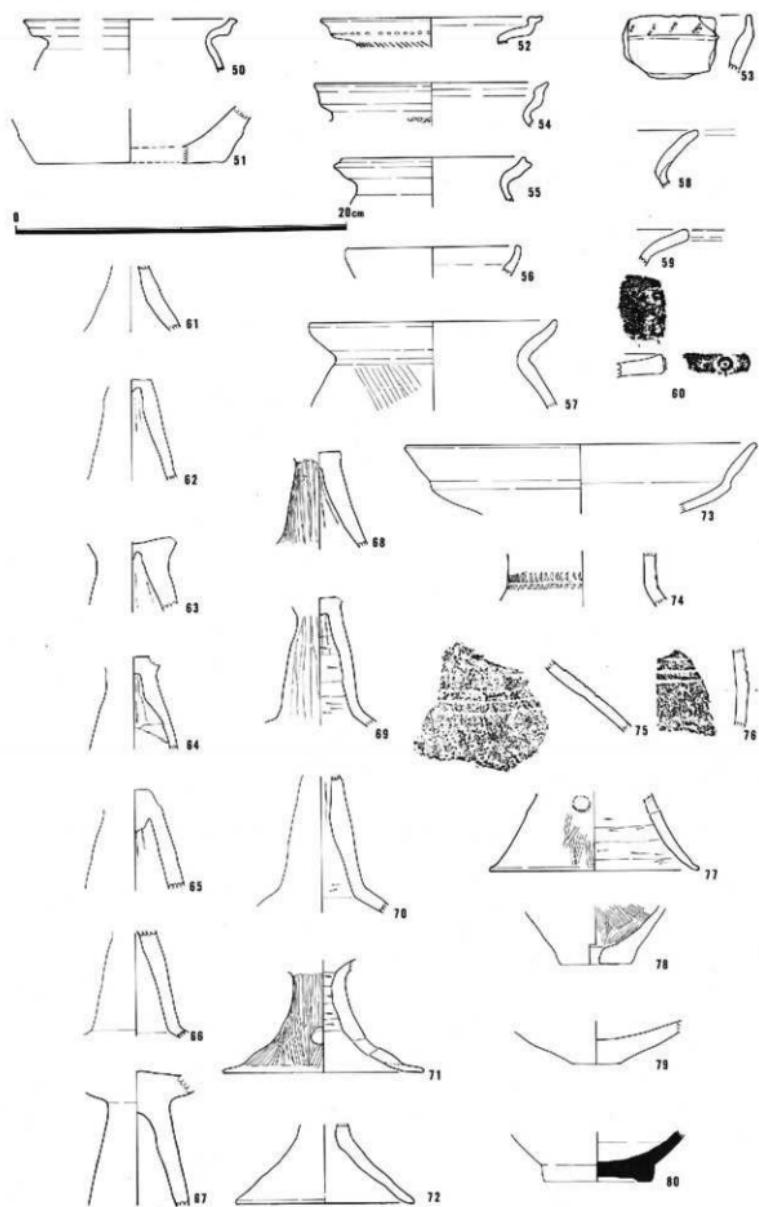




(1~8、9~30) : S X02C2、(31) : 第1調査区B地区拂土、(32) : 第1調査区C地区拂土
第1調査区、第2調査区出土遺物 S = 1/3

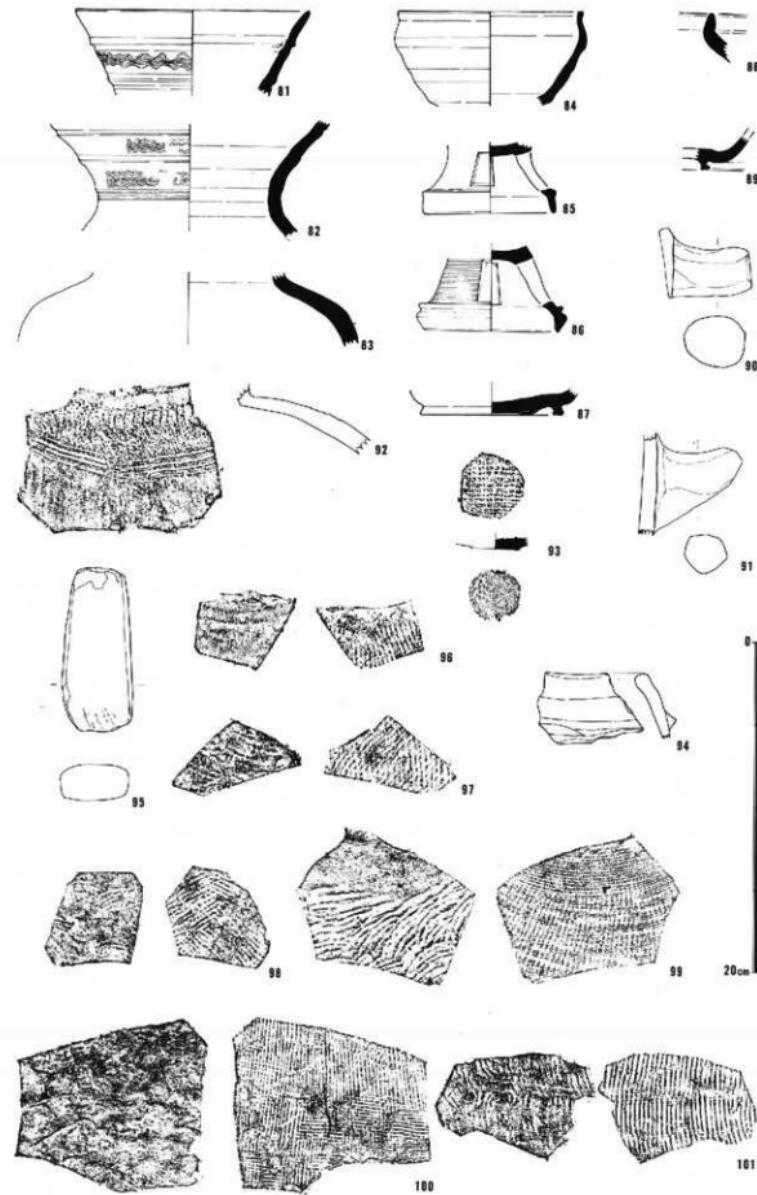


(33~45) : S D08G3 (46) : S X05B3 (47~49) : S D10G3 第3調査区出土遺物(I) S = 1/3

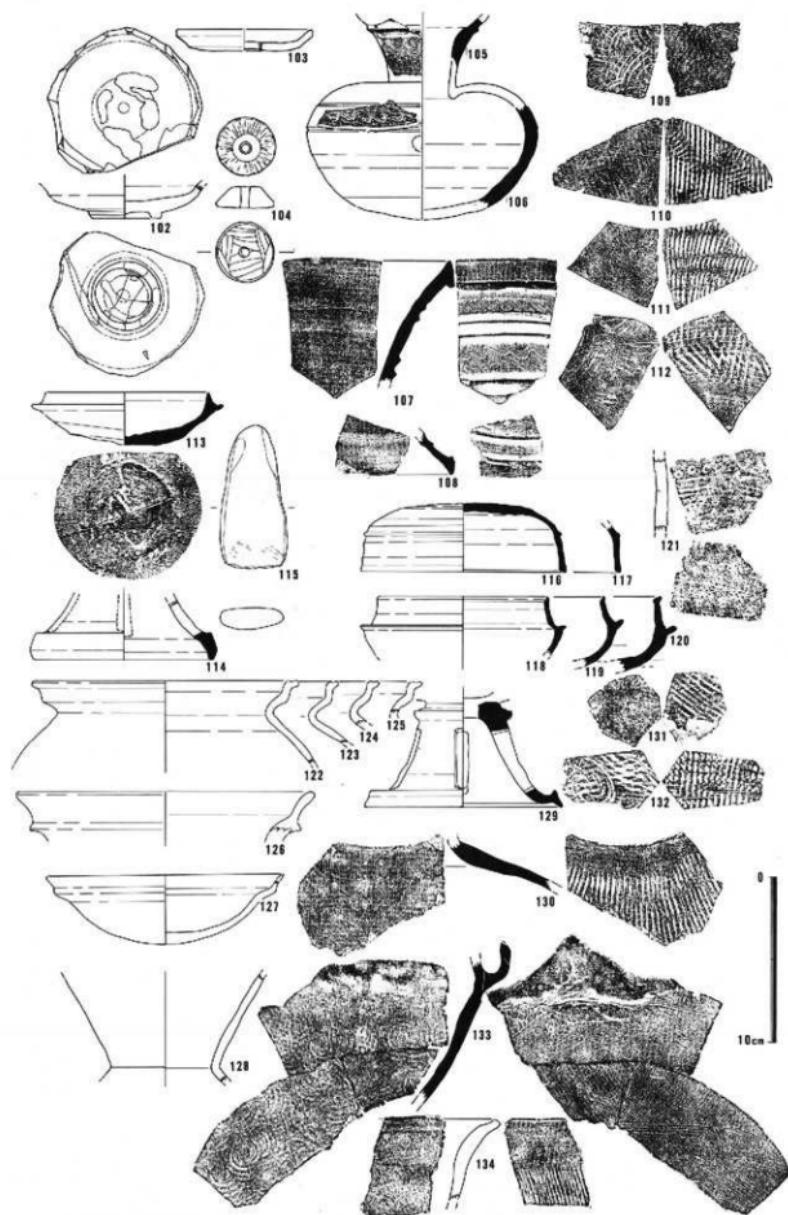


(50・51・61) : SD10G3 (52・53・62) : SK13 (54~60・63~80) : SR01G3 第3調査区出土遺物(2) S = 1/3

図版二十一 遺物

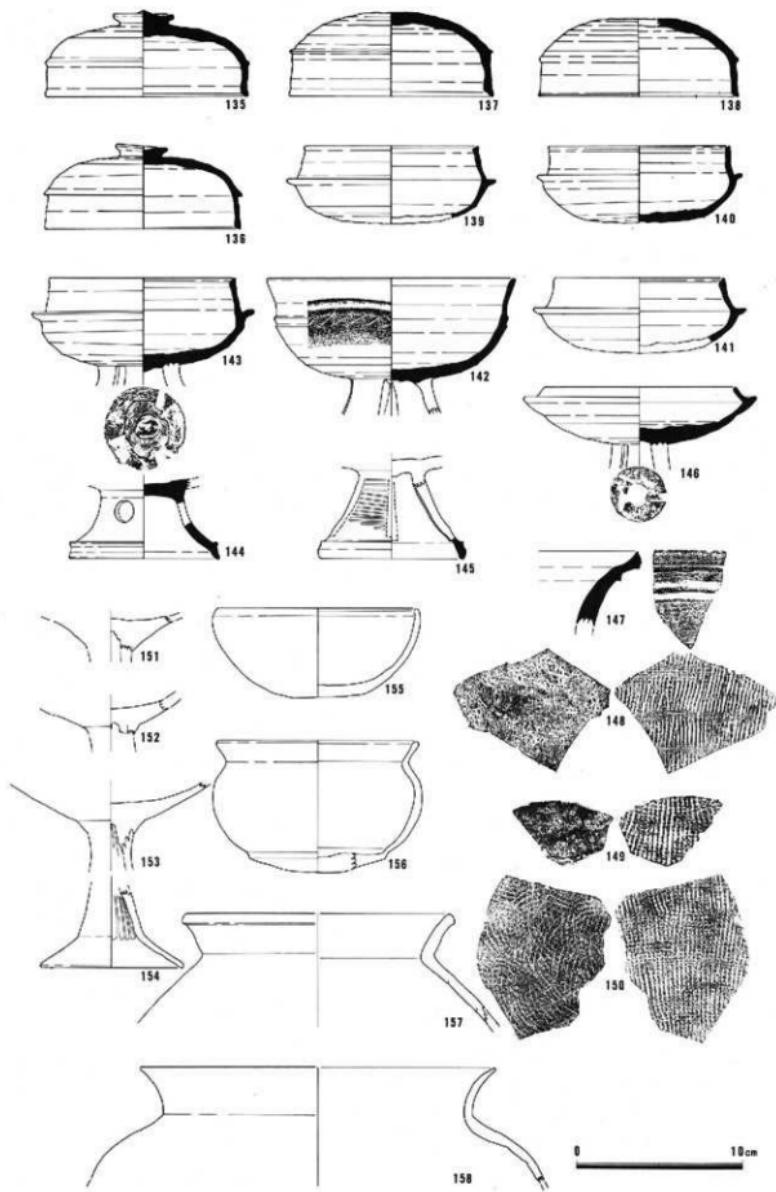


第3調査区出土遺物(3) (81~101) : S R01G3 S=1/3

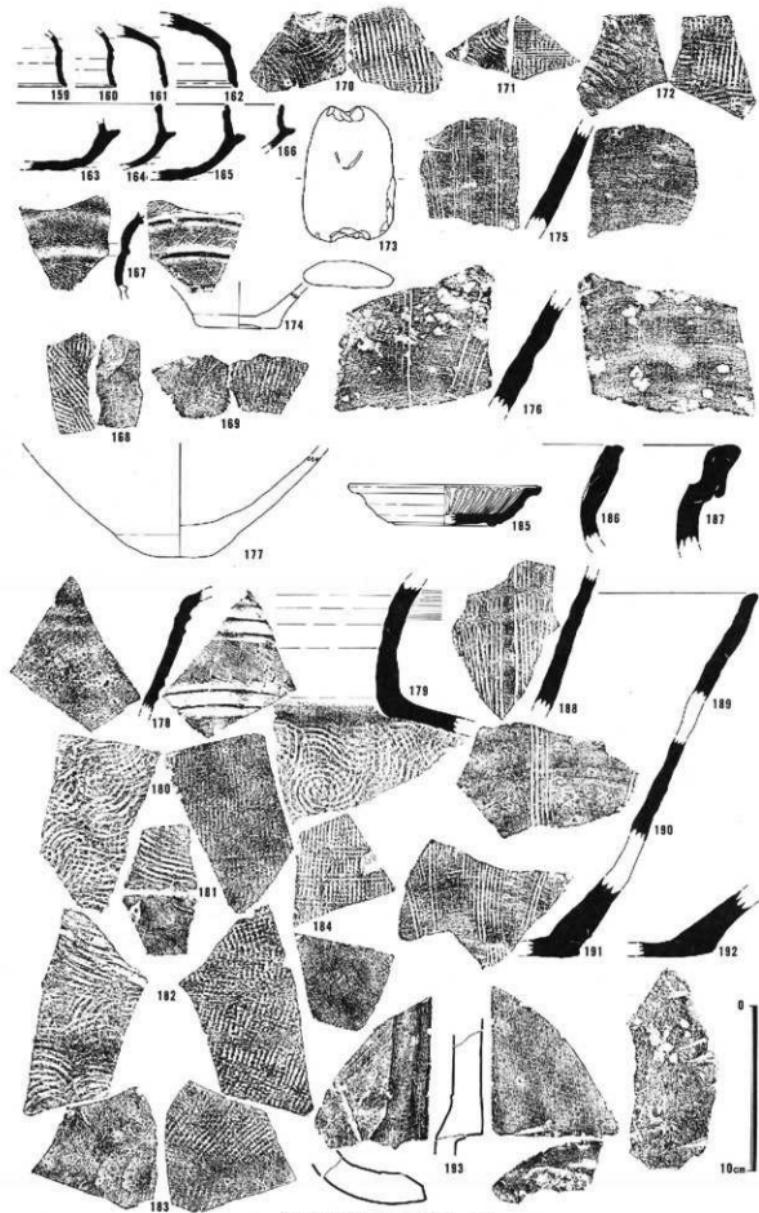


第4調査区出土遺物(1)S = 1/3

- | | | |
|---------------------|----------------------------|----------------------|
| (102) : S X01A4、 | (103~112、117) : S R01A~B4、 | (113~115) : S K01B4、 |
| (116) : S X03C4、 | (118~119) : S X05C4、 | (120) : S X04C4、 |
| (121) : S P01C4、 | (122~128) : S K01C4、 | (119~132) : E地区排土 |
| (133~134) : S K02E4 | | |

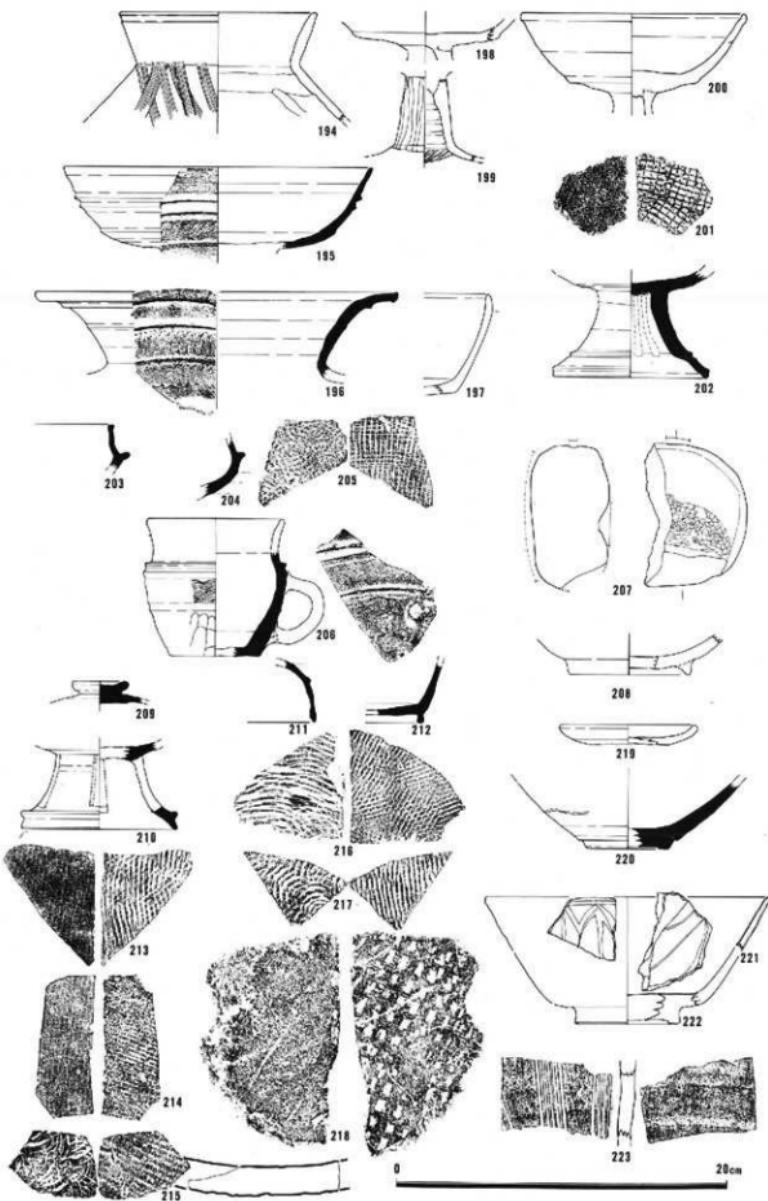


第4調査区出土遺物(2) S=1/3 (135~158) : S X02 B4



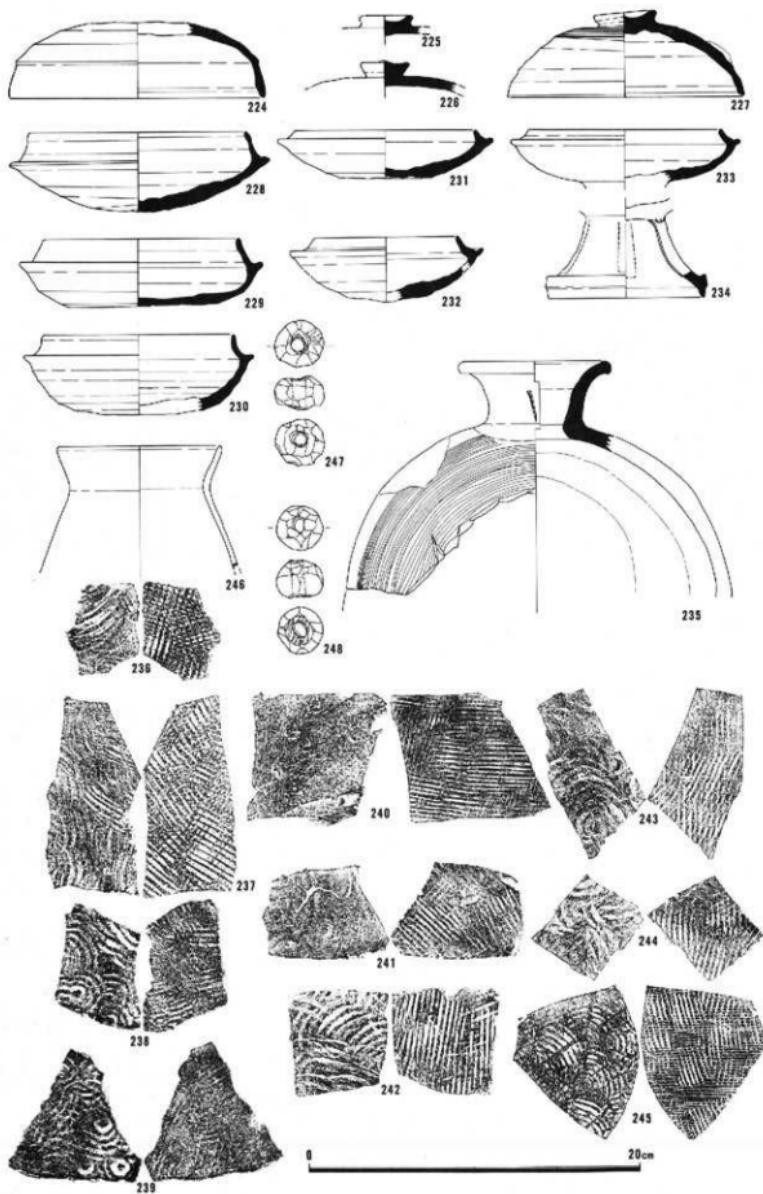
第4調査区出土遺物(3)S=1/3

(159~160) : D地区堆土、(161、170~171) : S X03D4、(164) : S X05D4、(165、172) : S X06D4、(163、167) : S X01D4、(162、166、168~169、173~176、186) : S D02D4、(177~185、187~193) : S D04D4



第5調査区出土遺物 1) S = 1/3

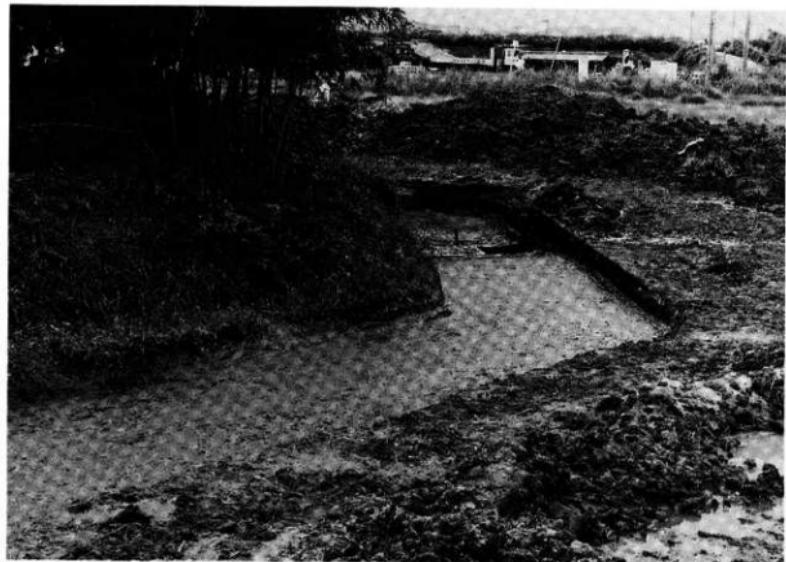
(194) : S D01A5、(195~197) : S X08A5、(198~199) : S X06A5、(200~201) : S X09A5
 (202) : S K03A5、(203~206) : S X01A5、(207~208) : S R01B5、(209~223) : C地区排土



第5調査区出土遺物(2) S = 1/3
(224~239) : SK01A5



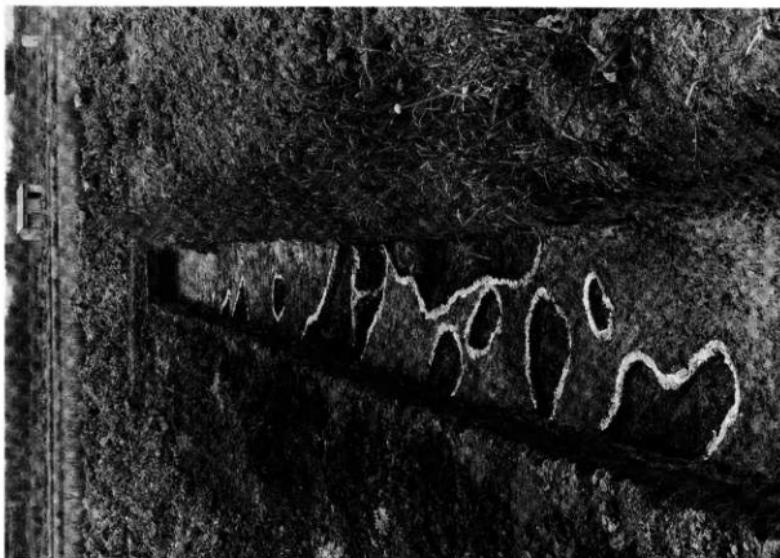
調査前状況（東から）



第1調査区A地区中央遺構全景（南西から）



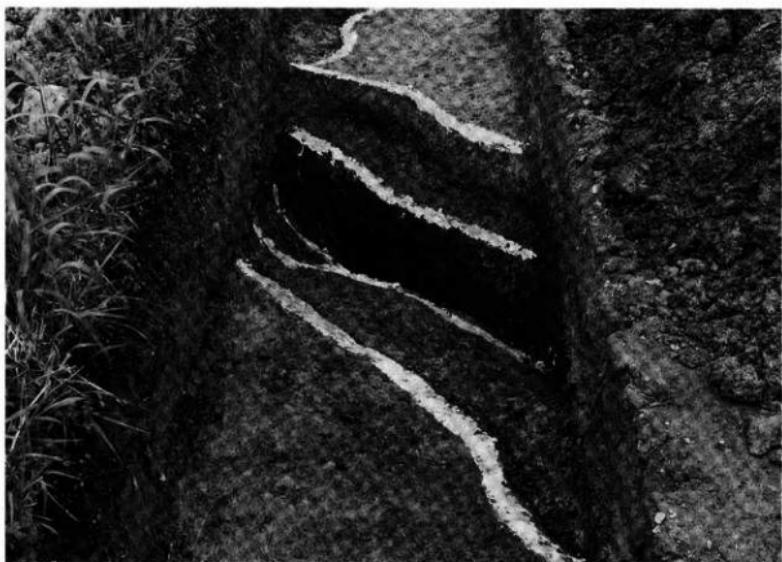
第1調査区B地区西遺構全景（東から）



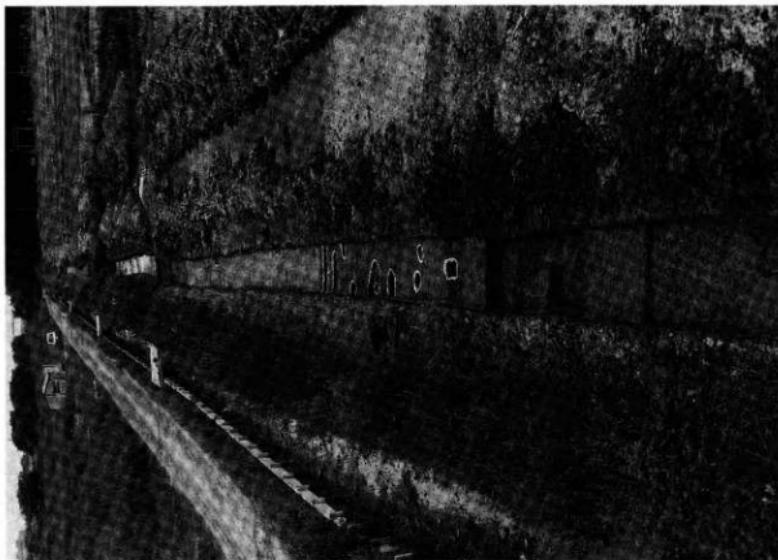
第1調査区C地区南遺構全景（北から）



第1調査区C地区S D01C1（南東から）



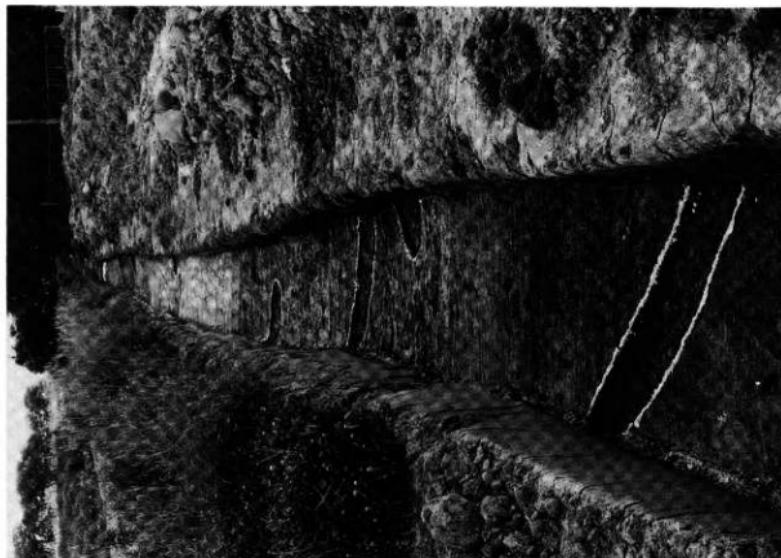
第1調査区C地区S D02C1（南から）



第2調査区A地区遺構全景（東から）



第2調査区B地区遺構全景（東から）



第2調査区C地区遺構全景（東から）



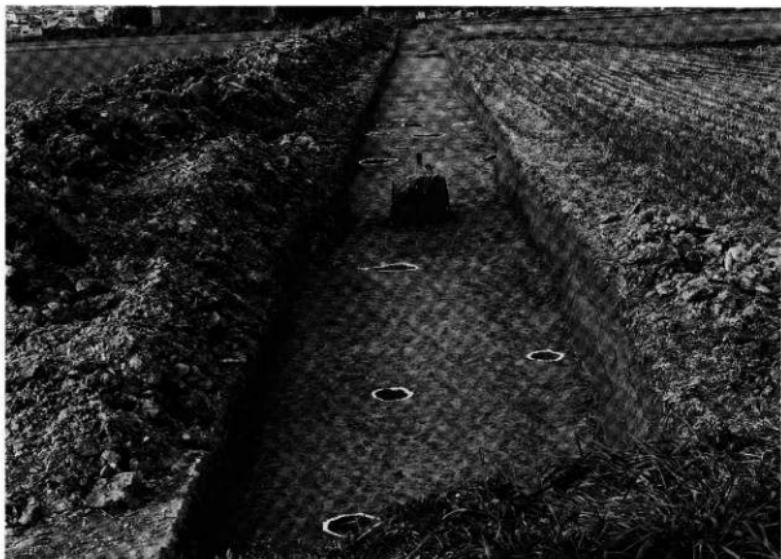
第2調査区C地区 S D08C2付近（西から）



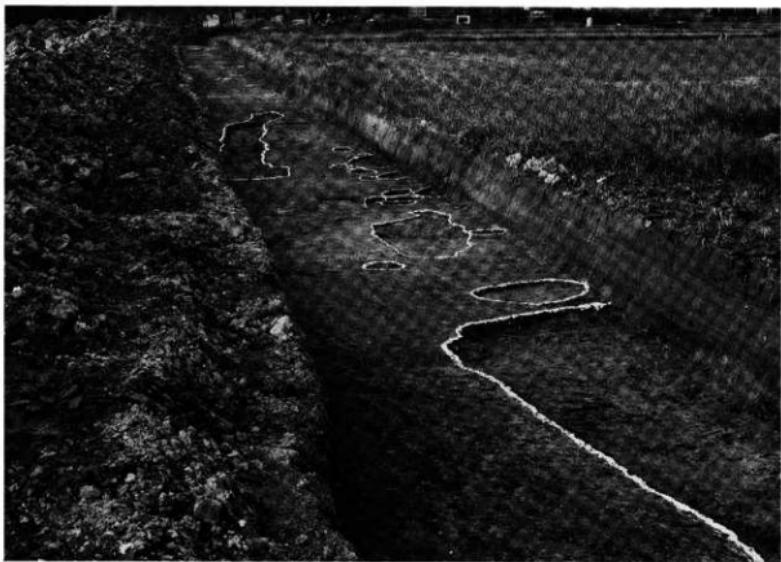
第2調査区B地区S D04 B 2 (東から)



第2調査区C地区S X02 C 2 (東から)



第3調査区A地区南遺構全景（南から）



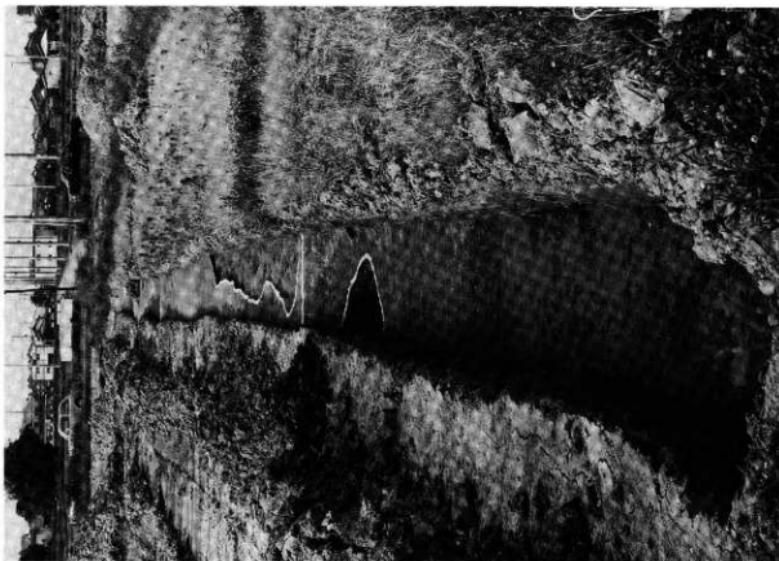
第3調査区A地区北遺構全景（南西から）



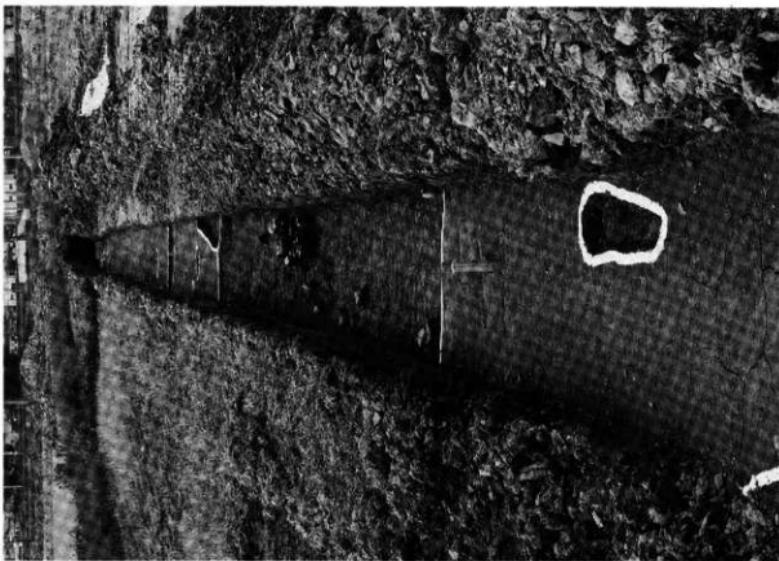
第3調査区A地区S B01A3（南西から）



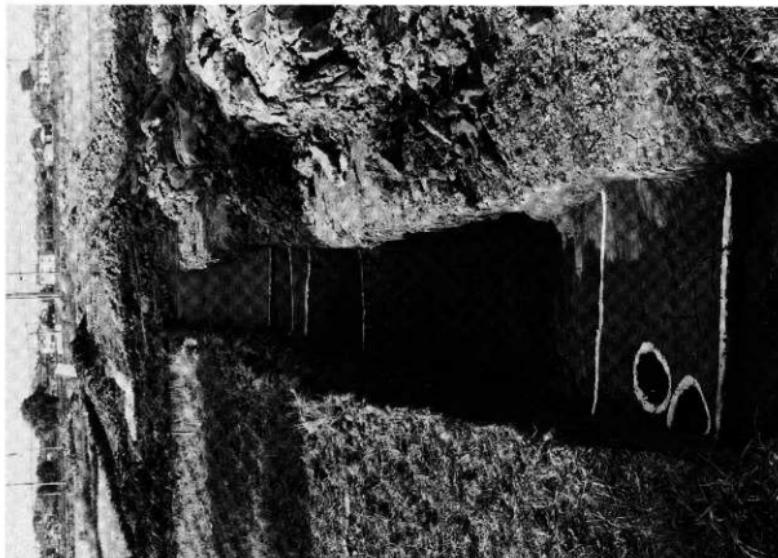
第3調査区G地区S D08G3（東から）



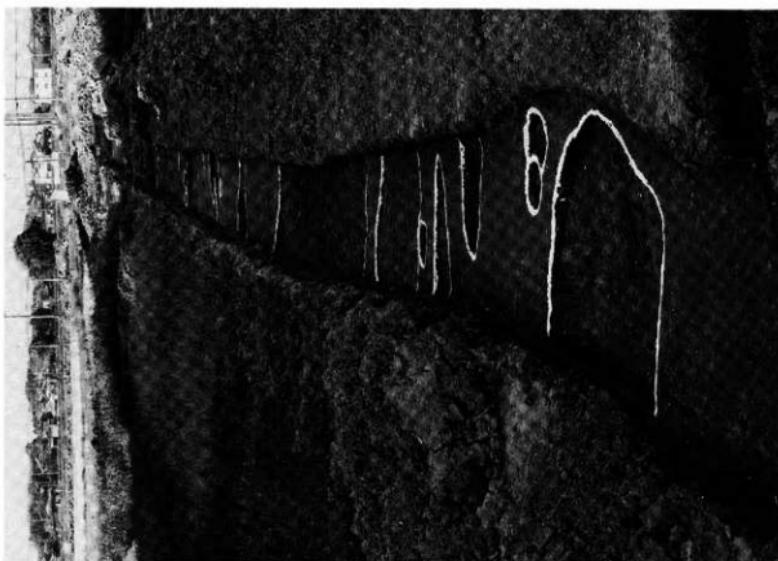
第4調査区A地区遺構全景（南から）



第4調査区B地区遺構全景（南から）



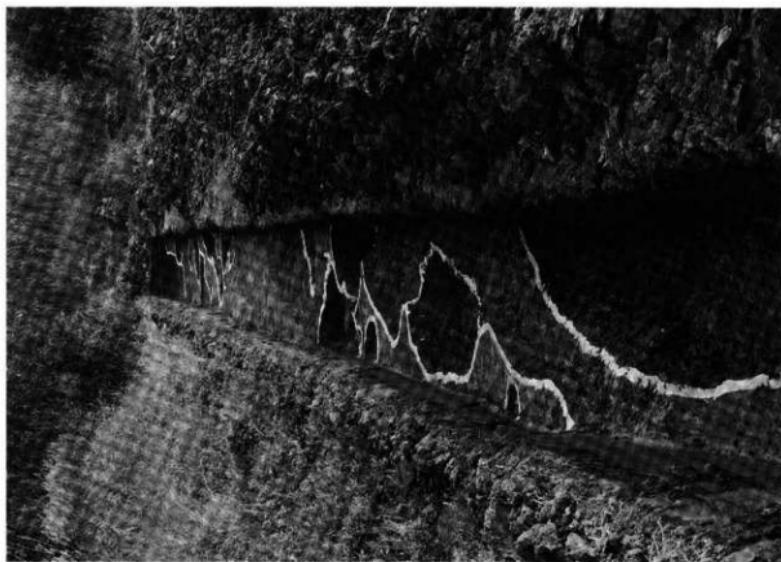
第4調査区C地区北遺構全景（南から）



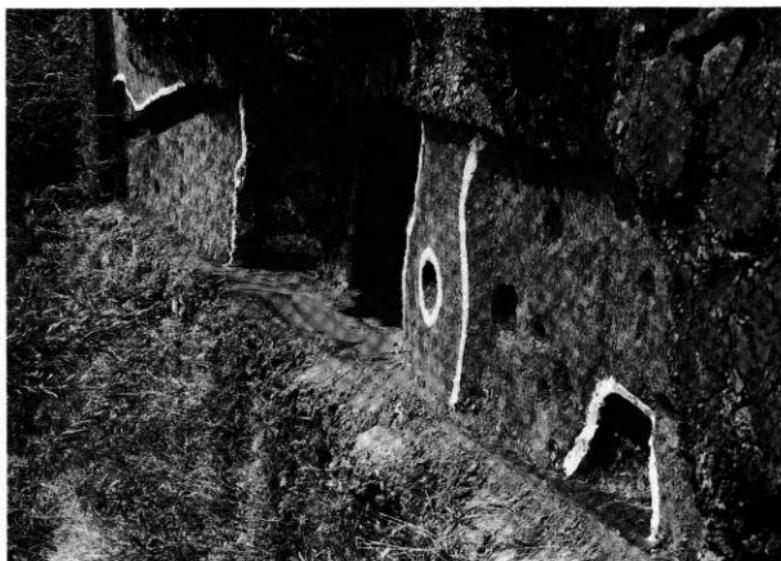
第4調査区C地区南遺構全景（南から）



第4調査区D地区南遺構全景（南から）



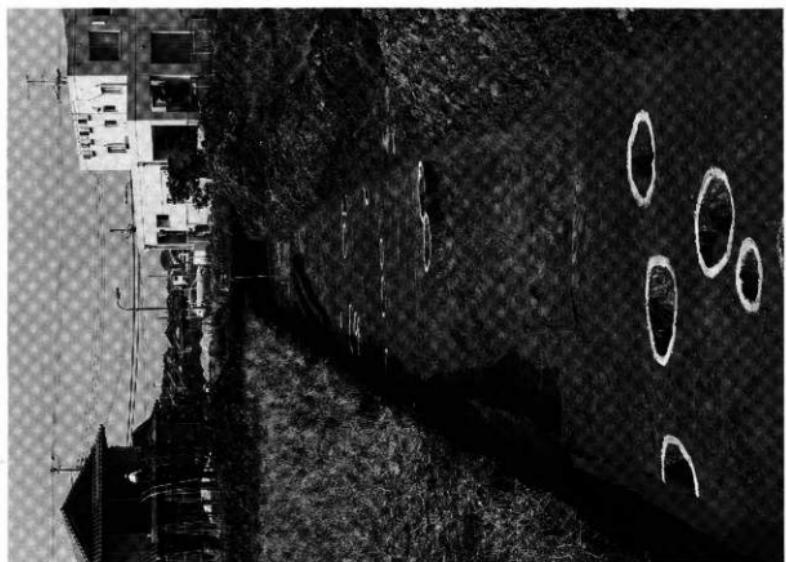
第4調査区D地区南遺構全景（北から）



第4調査区E地区S D01E4（南から）



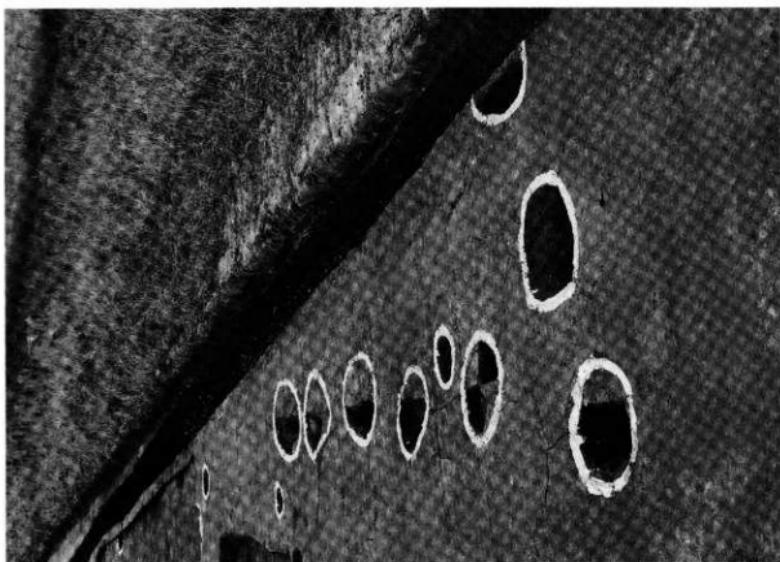
第4調査区B地区S X02B4（南西から）



第5調査区A地区北遺構全景（南から）



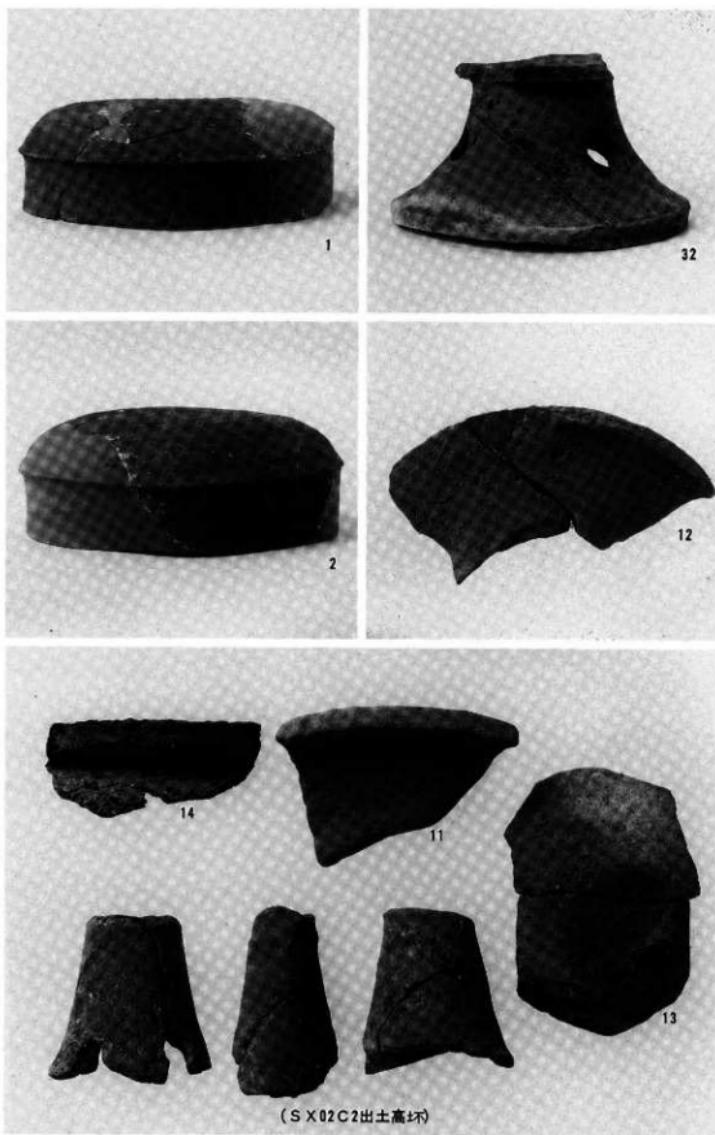
第5調査区A地区南遺構全景（北から）



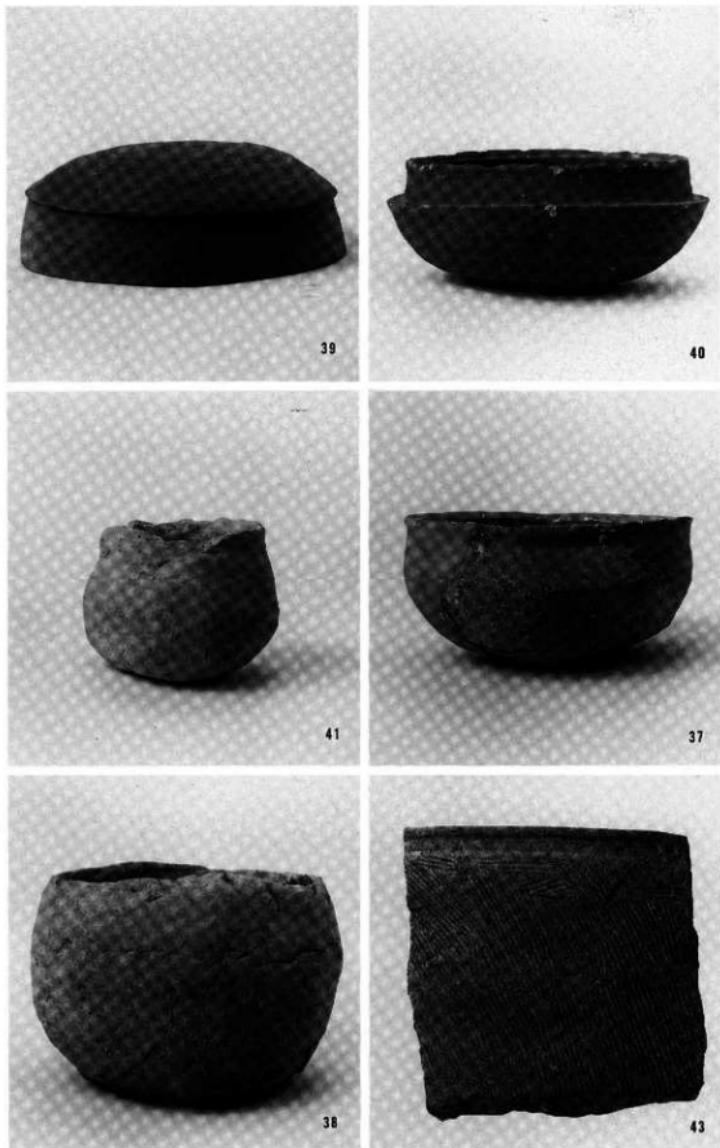
第5調査区A地区 S A01A5 (北東から)



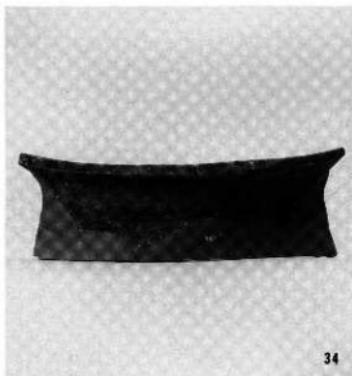
第5調査区A地区 S K01A5 (東から)



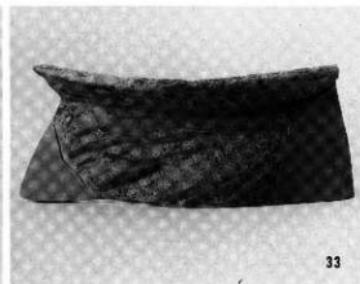
第2調査区出土遺物



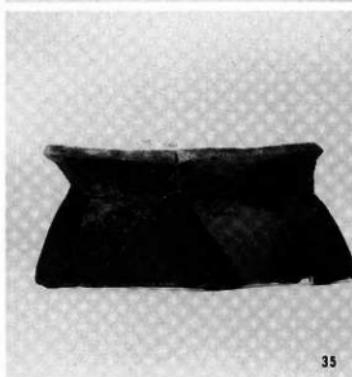
第3調査区出土遺物(1)



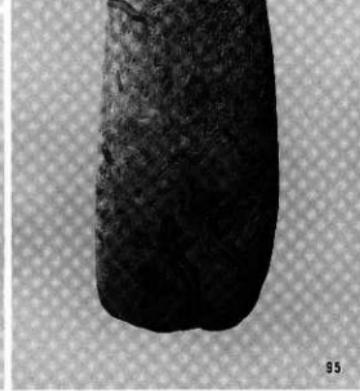
34



33



35

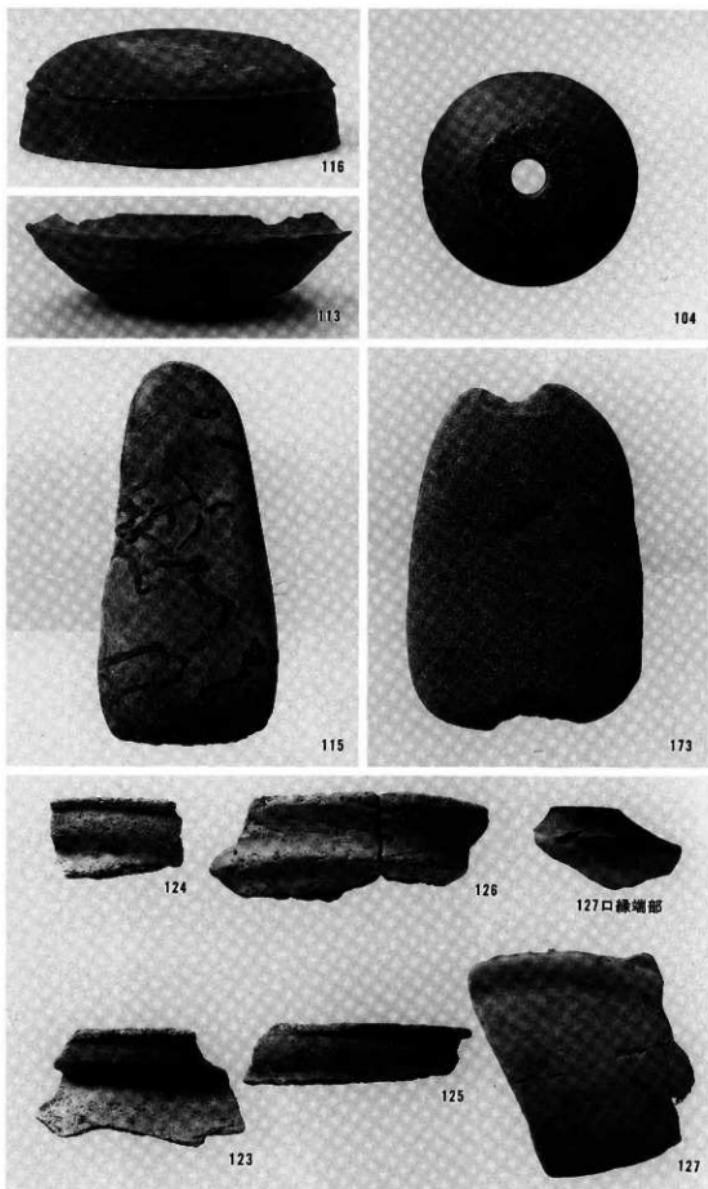


36

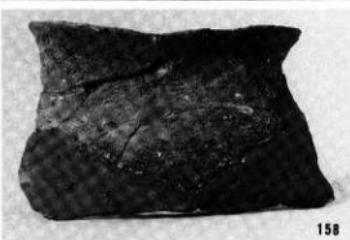
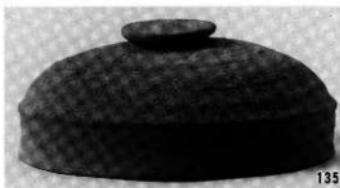


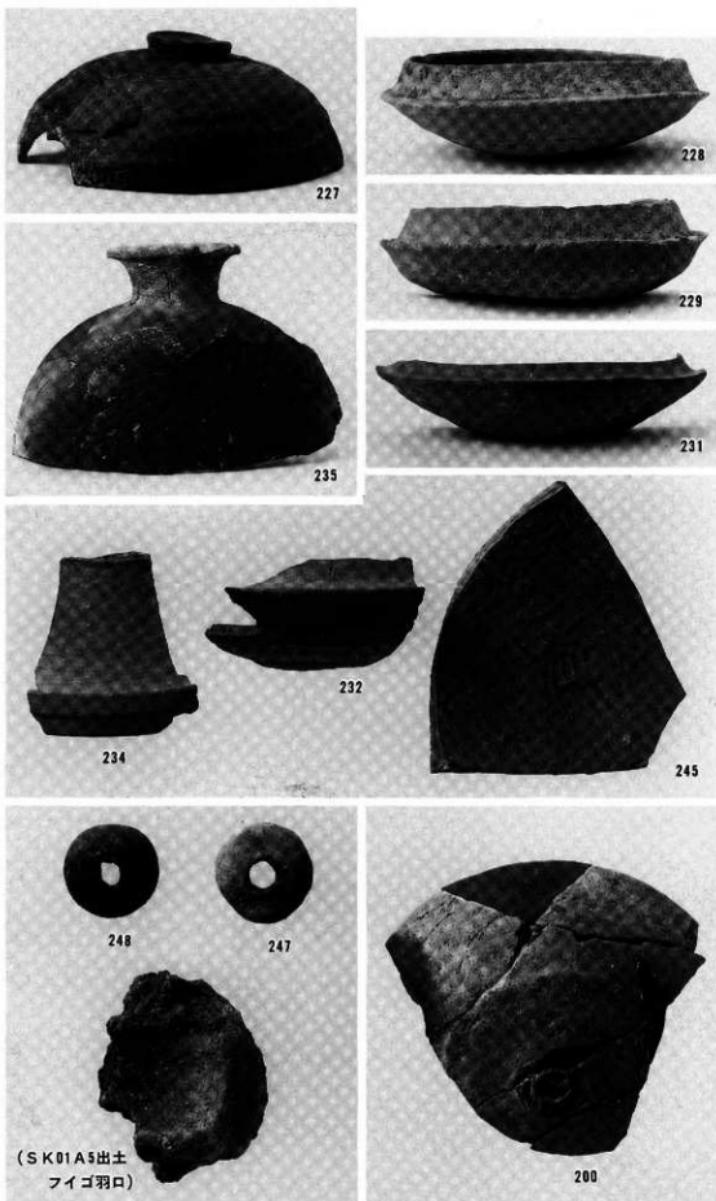
71

95



第4調査区出土遺物(1)





第5調査地区出土遺物

1990年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVII-12

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目1-1

電話 0775-24-1121 内線 2536

(財) 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大宣町1732-2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 宮川印刷株式会社